
NOAH

緑川海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NOAH

【Nコード】

N2982E

【作者名】

緑川海月

【あらすじ】

嵐の夜、地球に降り立った少年は酷い怪我を負い、記憶を失っていた。少年を救ってくれた家族とともに、暫くは平和な時を過ごす
が、やがて蘇る過去の記憶が彼を苦しめる…。

序章

空には暗雲が広がり、辺りは暗闇に覆われていた。

風が吹き荒び、それに乗って大粒の雨が勢いよく地面に叩きつけられている。道路には川のように水が流れ、そこを通る影などまったく見受けられなかった。

そんな嵐の中、少年がひとり、立っていた。

激しく体をなぶる風も雨もまったく気にすることなく　いや、気付いていないのか　虚ろな瞳で佇んでいた。

(ここはどこだろう…)

ぼんやりと考える。

ひどく頭が重かった。痛かった。顔も、首も、腕も、胸も、腹も、足も、どこもかしこも痛い。何故こんなにも痛いのだろうか？…考えても分からない。

少年は空を見上げた。

雨粒が容赦なく頬を叩いた。　痛い。顔も痛いけれど、それ以上に…胸が。

目頭が熱い。

雨に打たれて冷たくなった頬に、暖かいものが流れていく。

何故…？

喉の奥が痛くて、嗚咽する。でも、その理由が分からなくて…。

『レイ……』

声が聞こえた。

『レイ』

誰かの名前……自分の、名前？

少年　レイはゆっくりと振り返った。すると、そこにはひとりの少女の姿があった。自分と同じように雨に濡れて……少女は立っていた。

黒髪の、髪の短い少女は、大きな瞳を見開いてレイを見つめている。その少女に……レイは銀色の髪的女性を見た。長い銀色の髪を揺らして、女性は笑う。

「ああ……ノア……」

レイは女性に向かって微笑む。その女性に近づきたくて、一歩前へと踏み出そうとした。

しかし、そこで崩れるように倒れてしまうのであった……。

傷を負った少年 1

高倉乃亜は後悔していた。

昼過ぎから降り始めた雨は徐々に強くなり、下校時刻には大雨になっていた。

友達みんな親に迎えに来てもらっていたのだが、生憎、乃亜の家には誰も居ず、一人で帰ることになった。

友達と一緒に車に乗っていくように勧められたが、このくらいの雨なら大丈夫だろうと、赤いタータンチェックの傘を差して歩き出したのだった。

しかしそれが間違いのもと。

歩き出してしばらくすると、台風並みの風が吹き出した。傘の柄をしつかりと握っていても、風に煽られて今にも飛ばされそうになる。道路はあつという間に川となり、靴の中までぐちよぐちよ。

「あーもうっ、傘なんて意味ないじゃない!」

長袖の白いセーラー服はぐっしょりと濡れ、肌にピタリと張り付くのが気持ち悪い。

頭を覆っているはずの傘だが、下からも風が吹き上げてくるので、見事なまでに頭からつま先までまですべ濡れだ。

しかし意地になっているのか、それでも乃亜は傘を握って歩いていた。

それからおよそ二十分。暴風雨と戦いながらようやく家の前までたどり着く。

「やっと着いたよー」

小さな体で雨風と格闘したため、かなり疲労していた。

早く中に入って暖かいココアでも飲もう……そう思い、道路から玄関に向かって歩いていった。その時。

バンツ。

何か爆発でもしたかのような音が聞こえた。

「ん？」

顔を上げると、更にもう一度バンツと音がして、目の前にプラズマが散った。

「きゃっ!？」

更にゴウツと暴風が襲い掛かり、持っていた傘はそれに飛ばされ、乃亜も後ろにひっくり返って尻餅をついた。バシヤツと道路の水がはねる。

「い……いたた……」

雷でも落ちたのだろうか……。おしりを押さえながら顔を上げる。目の前にはもくもくと水蒸気が立ち込めていた。

「…何これえ…」

深い霧で辺りが何も見えない。しかし、それは強い風があったという間に押し流してしまった。すぐに視界が開けてくる。そこで乃亜が見たもの。

少年が、立っていた。

暗雲から降りしきる雨に打たれて、少年は微動だにすることなく、佇んでいた。

乃亜はしばらく道路に座ったまま少年を見つめていたが、良く見るともう一人、少年の足元に人が倒れているのが分かった。

「……」

ゴクツと唾を飲み込むと、立ち上がり、恐る恐る近づいてみる。二、三歩歩いたところで、ふいに少年が振り返った。

目が合い、乃亜は硬直する。

少年は無表情でこちらを見ている。乃亜はしばらく動くことも声を発することも出来なかった。しばらくして。

フツ、と少年が表情を崩した。とても穏やかな笑みを浮かべ、乃亜に手を差し伸べた。

「……ノア」

どくん、と心臓が跳ね上がる。

「…え？」

乃亜は少年の顔を良く見た。見たことのない少年だった。なのに。どうして名前を知っているのだろうか…？

「あの…」

もう少し近づいてみようと思い、足を一步前に出した瞬間、少年の体が崩れた。

バシャン、と水溜りの中に倒れてしまう。

「あつ……ど、どうしたの!？」

急いで駆けつけ、少年の傍に膝をつき、ハッとする。

おびただしい血が流れ出ていた。傷口がどこにあるのかは分からないが、大量の血が雨に流れて、辺りは真っ赤な海と化している。

「ええつ……」

どうしたらいいのか分からず、オロオロする。

そうしていると、少年の傍らで倒れていたもう一人が、ゆっくりと起き上がった。

長い黒髪の、中性的な感じの人物だった。男だろうか？ 女だろうか？ 性別は良く分からないが、少年よりは少し年上に見えた。

「あ、あのつ、事故ですか？ ひき逃げ？ あなたも怪我を？」

オロオロしながら訊くと、その人物はハツとしたように少年に飛びつき、そして、乃亜から彼を守るかのように前に出た。

「!」

その人物が何かをわめいた。

「…えつ？」

言葉が分からなかった。

「ええと……何て言ったの？」

「
」

その人物は何かを喋っているが、乃亜にはまったく分からない言葉だった。

（ええ…？ どうしよう…）

乃亜はスカート裾を握り、目を左右に動かしながら考える。すると、慌てすぎて忘れていたことを思い出した。

「あのっ、お医者さん！　すぐそこにいるから！　呼んで来るから待っててね！」

言葉の通じない相手に、そう言っても分かってはもらえないだろう。中性的なその人物は、警戒心丸出しの瞳で乃亜を睨んでいる。とにかく、ここは乃亜だけではどうにも出来ない。

丁度高倉家の隣には小さな医院があり、そこには腕がいいと評判の若い医師がいたのだ。

「待っててね！」

もう一度そう言うと、その医院に向かって走り出した。

傷を負った少年 2

午後五時四十分。

櫻井医院の若き院長、櫻井聖は椅子さくらいひじりに座りながら大きく伸びをした。まだ診療時間は終わっていないのだが、この大雨のせいか、待合室には人一人いなかった。窓の外を見ればそれは一目瞭然。

台風とさほど変わらない暴風雨の中、外に出るにはかなり勇気がいる。よほどの重症でもなければ家でおとなしくしていよう、ということなのだろう。

患者も少ないし、この嵐なので、つい先程2人いる看護師を帰したところだった。

診療時間が終わるまで後20分弱。もう患者は来ないだろう……と、かけていた眼鏡をはずし、もう一度伸びをして椅子から立ち上がった。

すると、そこに彼の妻である李苑りえんが現れた。

「お疲れ様。やっぱり患者さん少なかったわね」

「ああ、この嵐じゃあな……。もう今日は来ないかもな」

と、窓の外に目をやる。雨足は先程からどんどん強くなっている。風は恐ろしいくらいに強く、窓ガラスがガタガタと激しく音をたてた。

「お掃除しちやいましょうか？」

「そうだな……。じゃあモップだけかけてくれるか？ 機械類はその

ままでいいから」

「はい、分かりました」

李苑は奥にある掃除用具入れからモップを取り出し、長い髪を揺らしながら掃除を始めた。

「雛^{ひな}は寝たのか？」

机の上を整理しながら、まだ生まれて間もない娘のことを聞いてみる。

「ええ、ミルクを飲んでぐっすりよ」

掃除をしている手は止めずに、李苑は答える。

「じゃあ、起きたら遊んでやろうか」

綺麗に整った顔を僅かに歪め、聖は言った。その言葉に、李苑は「ふふっ」と短く笑う。

この小さな医院で幸せに暮らす三人家族。近所でも評判の美男美女夫婦と、二人の間に生まれたかわいい娘。

何事もなく平和に暮らしていたこの家族に、これから大変な事態が待ち受けていようとは誰が予想しただろうか…。

ボタン！ と激しく扉の開く音がして、聖と李苑は入り口の方に目をやった。

「あら、患者さんだわ」

李苑は素早くモップを影に隠す。そうする間に、患者だと思われた人物は診察室に飛び込んできた。

「大変っ、聖さんっ！」

飛び込んできたのは、頭から足までびしょ濡れになった、隣の家の女子中学生。

「乃亜ちゃん、どうしたんだ？」

「人が……男の子が、倒れてるのっ」

そう叫ぶ乃亜の白いセーラー服には、僅かに血がついていた。

「怪我したのかい？」

聖は乃亜もどこか怪我をしたのではないかと心配して訊いた。

「うん、あの、男の子が血だらけでっ」

「…分かった」

どうやら乃亜は怪我をしていないようだ判断し、聖は李苑に視線を投げた。彼女も医者なので、それだけで聖が何を言おうとしているのかを理解する。李苑が僅かに頷くのを見て、聖は乃亜とともに外に出た。

「こつち！」

乃亜に引つ張られてどしゃ降りの雨の中を進んでいくと、僅かに明かりを地面に届ける街灯の下、蹲る人影がふたつあるのが見えた。少年の元にたどり着くと、素早くその状態を観察する。

青白い顔、冷たくなった体、そこから流れる大量の血…。

一目で自分一人の手には負えないことが分かった。設備の整った総合病院に連れて行かなくては。

「大丈夫か！ しつかりしろ！」

声をかけても何の反応もない。かなり危険な状態だ。

「一旦、中に運びます。止血しますので」

聖は少年に寄り添う人物にそう言った。しかし睨まれるだけで、何の返事も返されない。

「あつ、聖さん、その人達日本人じゃないみたい。言葉が通じないの」

横から乃亜に説明される。

「成る程。とにかく、この子を運ぼう」

聖は着ていた白衣を道路に広げ、それに少年を乗せた。担架代わりにするのだ。

「足の方持って」

傷を負った少年 3

「はいっ」

乃亜は力一杯白衣を引っ張り、少年を持ち上げた。小さな乃亜にはかなりの重さで、今にも落としそうだったが、歯を食いしばって少年を運んだ。

医院の中では、李苑が診察の準備を整えていた。診察台に乗せられた少年は、すぐに衣服をハサミで切られ、傷を確認した後、止血が施されていった。

「救急車呼んで。すぐに医大に運ぶ」

「はい」

「それから血液型調べといて」

「分かりました」

手早く処置を施す二人の医師の姿を、乃亜は呆然としながら眺めていた。

ふと、一緒にいた人物に目をやると、その人はガタガタ震えながらその状況を見守っていた。

「あ……だ、大丈夫だよ。あの二人は凄いお医者さんなんだから。絶対助かるから、ね？」

言葉は通じていないが……乃亜の励まそうとする意思は伝わったよ

うだった。

聖と李苑の少年を助けようとしている姿を見て、悪い人達ではないと判断してくれたのだろうか…。その人は僅かに笑顔を作り、それを乃亜に向けてくれた。

「大丈夫だよ…」

乃亜は繰り返しそう言って聞かせた。

診察室では更に傷口との格闘が続いていた。

「……この傷」

はっきりとは言えないが、銃創のように見える。背中や太腿に貫通した痕。僅かに掠った痕は数え切れない。それが体中に何箇所も。それに、両脚の骨が折れている。明らかに異常だ。一体、どこでこんな怪我を……？

少年を助けようと必死になっているところへ、困惑顔で李苑が話しかけた。

「聖くん…」

「なんだ!？」

懸命になっているので、少し荒っぽく返事をする。

「…血液型が、分からないの…」

その言葉に、聖は治療する手を一瞬止めた。

「え？」

「よほど珍しい血液型かと思ったけれど……顕微鏡で見たの。こんな型見たことないわ」

「……」

李苑は大学で血液学を専攻していた。その彼女が見たことのない血液型……？ 今まで発見されたことのない血液型など、この世界にあるのだろうか……。

聖の目に、診察室の外で祈るようにして立っている人物が映った。

何か考えが浮かんだわけではなかった。ただ一瞬のひらめきだった。

「李苑、採血して」

と言いながら、その人物の手を引っ張り、診察室の椅子に座らせる。

「すまないが、君の血を採らせてくれ」

いきなり座らせられ、その人物は動揺している。

「！？」

何かをわめいているが、何を言っているのか分からない。しかしきくと、「何をするんだ」と言っているに違いない。

聖は暴れるその人を力づくで抑えた。

「ごめん、何言ってるか分からなくて怖いだろうけど、あの子を助けるためだ！」

「！！！！」

中性的な人物は、やはり性別の分からない高くも低くもない声で喚いた。

「ごめんなさい、チクツとしますよー」

注射器を構えた李苑は、素早くその人物に針を刺し、十秒足らずで採血は終了した。

「行き先変更だ。医大じゃなく……紫乃原医療センターに」

そこには、聖の最も信頼する医師がいた。その医師ならば、この少年を助けてくれる……。 “ 誰にも内緒で ”。

この少年達を、他に渡してはならない。聖は本能的にそう感じていたのだった。

「がんばれよ、絶対、助けてやるからな……！」

出血多量でショック症状を起こしかけている少年の手を力強く握り、励ました……。

目覚め 1

ふわり、ふわりとまるで水の中を漂っているような心地よい空間の中にレイはいた。

柔らかく、暖かい……まるで母体の中で眠る赤子のような安らぎを感じる。

『…レイ』

自分を呼ぶ声が聞こえる。

『レイ』

声は更に大きくなった。

この心地よいまどろみにいつまでも浸っていたが……そのまま眠ることを許さぬかのように、名を呼ぶ声はどんどん大きくなる。

レイは、面倒臭そうに重い瞼を開けた。

そこは白い空間だった。

ぼうつとする頭で、しばらくその白い空間を眺める。

そうしていると、カチャツと音がして、人が近づいてくる気配がした。

目だけを動かして気配のする方を見ると、黄色い色がパツと目についた。しかし目が霞んで、それが何なのかまでは分からない。

黄色い色だけを目で追っていると、軽やかな歌が聞こえてきた。

かわいらしい優しい声で、それを耳に入れるのはとても心地良い。しばらくその優しい声に耳を傾ける。そうしていると、目が次第に周りの景色を映し出してきた。

白い壁の狭い部屋に、窓にかけられた淡い黄色のカーテンが穏やかな風に揺れている。

あの黄色は……どうやら花のようだ。

大きな花びらが何枚もついた花は、やはり大きな花瓶に生けられていた。そして、それを重そうに持つ、短い黒髪の少女。

歌の主はこの少女のようだ。少女は歌いながら花瓶を窓際のテーブルの上に乗せようとしていた。

ドンツと鈍い音がして、花瓶はテーブルに乗せられる。少女は「ふーっ」と息を吐き、ニコツと笑った。

そして、レイの方に視線を投げ　目が合った。

「……………」

少女は笑顔のまま固まっている。

「あの……誰？」

そう訊いてみた。

何故かうまく声が出なくて、擦れた声になってしまったが……聞こえただろうか？

「うあっ、あああ、レイっ、あー、うー」

少女はかなり慌てた様子で、両手に握りこぶしを作って顔を百面相にしている。

「…あの…」

もう一度訊ねようとすると、少女が口を開いた。

「こ、コンニチハ。あー、オゲンキデスカ？」

何故かカタコトで喋る少女。

「あー、…マツ、イイ？」

「え？」

「マツ。マツ」

何を言っているのかがイマイチ良く分からないが　一生懸命手を動かしながら、少女は後ずさりし、先程入ってきたと思われるドアから出て行った。

（待ってるって言ったのかな…？）

少女の行動と言葉から推測すると、そのような感じだった。しかし、何故カタコトなのだろう？　少し知能の足りない子だったのだろうか…。

少女が出て行ってから、自分がベッドに横になっていることに気付いた。

左手を持ち上げてみると、そこから半透明の細い管が伸びていた。それを目で追っていくと、天井から下げられた透明な袋に繋がって

いるのが分かった。
腕を動かしたせいか、袋が揺れて、中の透明な液体がとぶん、と揺れた。

（何だこれ…）

どうやら点滴をつけているようだが、何故それをしているのかが分からない。

さらに、体を起こそうとして、全身に激しい痛みが走った。

「いつ…」

顔を歪めて、体をベッドに戻す。

この状況は一体何なのだろうか。レイにはさっぱり分からない。

もう一度、ゆっくりと体を起こしてみる。痛みは感じたものの、先程のような激痛はなく、何とか起き上がった。

ハア、と息をつき、頭に手をやる。すると、何か布が巻かれている感触。体の方に視線を落とすと、白いシャツの下にも布　包帯が、肩から胸にかけて巻かれていた。

目覚め 2

(怪我……したのか?)

ぼんやりと考えていると、バタバタと足音が聞こえてきて、レイのいる部屋に勢い良く人が飛び込んできた。

「レイっ!」

長い黒髪をひとつに束ねた、大柄な美しい女は、入り口から少し入ったところで足を止めた。そして、目を潤ませてレイを見つめる。

「…レイ…」

顔をくしゃくしゃに歪め、ゆっくりとした動きでレイに抱きついた。

「レイ、目が覚めたのね……良かった……本当に良かった……」

レイは抱きついていている人物を、不思議そうに眺めた。……この人が誰なのか、まったく分からぬ。更に部屋に人が駆け込んできた。

白衣を着た背の高い男と、薄い茶色の長い髪の女、そして最後に先程の少女が入ってきた。

「あの…」

まったく見知らぬ顔ぶれに、だんだん不安になってきた。誰か知っている者はいないのか…。

「レイ？」

抱きついていた女がレイの異変に気付き、顔を上げた。

「どっしたの？」

女の瞳はレイを気遣っているようだったが、何だか怖くて、その視線から逃げた。

「…レイ？」

女は立ち上がる。

「…レイ、アタシのこと、分かる…？」

ひどく弱々しい口調だった。レイはその女のすぐるような瞳に申し訳ないと思いつつも、首を横に振った。

「そんなっ…」

女は助けを求めるような瞳で後ろにいる白衣の男を見た。白衣を着た男はレイに近づき、

「本当にこの人が分からない？」

と聞いてきた。レイはもう一度、しっかりと頷いた。

「自分の名前は分かる？」

「レイ……だと、思う」

「友達とか、兄弟とか、親の名前は？」

「……」

考えてみてもまったく浮かんでこない。軽く首を振る。白衣の男は軽くため息をついて、何か言葉を発した。その言葉が聞き取れない。しかし、男が言葉を発してから、目の前にいる女の顔はみるみる蒼白になり、後ろにいた茶髪の女や、黒髪の少女も顔を曇らせた。

(…何?)

何を言われているのか解らなくて、不安になる。それに気付いたのか、目の前の女がゆっくりとした口調で訊ねてきた。

「本当に……解らないのね？」

「…はい」

小さく返事をする。

「…記憶を…失ってしまったのね？」

「え……」

(記憶喪失?)

そう言われて、少し考えてみる。

……確かにそうだ。自分の名前以外、何も分からない。まったく思い出せない……。

「ねえレイ、本当に何も分からない？ アタシよ、ヒオウよ、分からない？」

「……………」

レイは首を振る。

「何か、何かない？ 覚えていること！」

「覚えていること……………」

ゆっくりと頭を巡らせる。

覚えているのは……………そう、あの嵐の中立っていたこと。体中が痛くて、とても悲しくて、涙が溢れてきて、そして……………。

「女の子が……………短い黒髪の、女の子がいた。それから、もう1人……………」

そこでレイは、一番後ろにいた黒髪の少女に気付く。

「…あの子だ。あの子が……………いた」

「うんうん、そうね、いたわね」

女は何度も頷きながら、次のレイの言葉を待つ。

「もう1人……………」

レイは茶色の長い髪の子を視界に入れた。そして、少しだけ首を傾

ける。

「髪の毛の長い女の人がいた……けど、あの人じゃない……と思う。髪の毛の色が……確か、銀色で……」

その言葉を聞いた周りの者皆、揃ってレイを凝視した。

(…?)

皆の視線を浴びて、レイは縮こまる。

それに気付いたのが、長い髪の毛の女がスッと前に出てきた。

「お腹、空かない？」

優しい微笑みに、萎縮した体が解される思いがした。

「あ……はい」

レイは素直に頷くことが出来た。

目覚め 3

「じゃあ、何か暖かいもの持ってくるね」

その人の穏やかな笑みで、少し安心することが出来た。自分ばかりでなく、周りの者たちもピリピリと張り詰めた空気を醸し出していたのが、それで解き放たれる。

茶色の髪の女が部屋を出て行くと、他の3人の顔も穏やかになった。

「ごめんね、レイ、アタシびっくりしちゃって。レイの方がびっくりしちゃったわよね。何も分からないんだもの」

女の語りかけてくる口調も柔らかくなった。

「アタシ、ヒオウ。レイのお兄ちゃんよ」

「…………え!？」

その言葉に、レイは目を丸くした。それに気付いた女 いや、男は、くすつと笑った。

「アタシ、男よ。だから、お兄ちゃん」

ヒオウと名乗る兄は、綺麗な顔立ちをしていて、とても男には見えなかった。

本当に男なのだろうか……疑いを抱くが、その疑問を口にする前にヒオウは言葉を繋げた。

「それでね、この人が聖くん。レイを助けてくれたお医者様よ」

ヒオウに紹介されると、聖は軽く頭を下げた。随分若いという印象を受けるが、二十代前半くらいだろうか。

「それから…」

ヒオウが振り返った時、先程部屋を出て行った女がスプらしき皿を持って現れた。

「この人が李苑ちゃん。聖くんの奥さんなの」

李苑は病床用のテーブルの上にスプ皿を乗せ、レイに微笑みかけた。

「どうぞ」

レイは李苑にペコリと頭を下げた。

「それで、あっちにいるのが乃亜ちゃん。アタシたちを見つけてくれた人よ」

「のあ…」

黒髪の少女の名を呟く。
どこかで聞いたような気がして、頭を巡らせた。だが、どこで聞いたのかは思い出せない。

「乃亜…」

もう一度、その名を呟く。

「レイ？」

ヒオウが顔を覗き込んでくる。

「あ、いや……いい名前だな、と思って……」

そう言って微笑む。本当に、何故だかは良く分からないが、乃亜という名前はとても良い響きだった。

乃亜に視線を転じると、彼女はこちらを向いてニコニコしていた。小さな体から溢れんばかりの元気いっぱいな笑顔。

「よろしく、レイ」

レイにはその笑顔が、とてもうれしかった…。

レイの正体 1

あの嵐の日からレイが目覚めるまで、三ヶ月が経っていた。その為体力や筋力が衰え、やせ細った足では歩くこともままならない状態になっていた。

レイを助けてくれたという医者、聖の指導のもと徐々にリハビリが行われ、食事も口から取れるようになったことから、二週間後には日常生活に支障がなくなりに回復した。

そうして体が健康になってきたら、今度は自分のことについて考えるようになった。

リハビリをしている間は体を回復させることで精一杯だったが、余裕が出てきたのか、記憶にない以前の自分のことを、知りたいと思うようになった。

「レイ、ちょっといい？」

そんな時、兄であるヒオウが改まった顔をしてレイの病室を訪れた。

「うん」

レイはベッドの横に置いてある丸椅子をヒオウに差し出す。ヒオウは礼を言ってからそれに座った。そして、一呼吸置いてから話を切り出した。

「あのね、体も大分回復したみたいだし……そろそろ、レイのこと、

話そうかと思つて。あ、話を聞きたくないなら、そう言ってもらつていいのよ。まだ心の準備が整つてないっていうなら……」

「えっ……ううん、大丈夫！」

レイは少し身を乗り出してそう言った。何といいタイミングだろう。自分がそろそろ過去のことを知りたいと思つた時に丁度良く話を切り出してくれた。

「俺も……そろそろ知りたいと思つてたんだ」

「そう……分かったわ。じゃあ、順を追つて話すわね。まず、アタシ達……宇宙人なの」

「……は？」

レイは間抜けな顔をして聞き返した。あまりにも突拍子なことを言われた気がして。

「まあ、アタシ達からすれば、聖くん達の方が宇宙人なんだけど、ここ、地球という星では、アタシ達が宇宙人ってことね」

信じがたい話ではあつたが、ヒオウの真剣な顔を見てみると、とても嘘を言っているようには見えなかった。

(信じてても……いいのかな?)

そう思つても、レイにはヒオウを信じる以外、道はないのだ。

「宇宙人って……じゃあ、何でここに？」

半信半疑で、訊ねてみる。

「それはね……」

ヒオウの話のを要約すると、こういうことだった。

レイとヒオウはこの星、地球から何億光年も離れたところにある「リトウナ」という星に住んでいた。

そこでとある機械の起動実験をしていたところ、それが爆発を起し、その爆発で何らかの力が働いて、偶然にもこの地球に瞬間移動のような形で飛ばされてきたらしい。

レイの大怪我はその時に負ったもので、記憶がなくなったのはそのせいなのだろうということだった。

そして、地球に飛ばされてきた2人を発見したのが乃亜という少女で、その少女が助けを求めたのが櫻井医院の医師、聖。

彼の判断でレイは大きな病院に搬送され、そこで手術を行い、無事に成功。

その成功の影には、無理やり採血され、更には死ぬ思いで輸血のための血を提供したヒオウがいた。ヒオウはそこを一番強調して説明した。

レイの容態は一ヶ月ほどで安定し、櫻井医院で経過観察することになった。

レイが眠っている間に、言葉の分からない者同士の悪戦苦闘が続いた。

毎日お互いの言葉をジェスチャーつきで言い合っていた結果、何とか日常会話は理解できるようになり、互いの言葉も喋れるようになった……というわけだ。

そして、丁度意思の疎通が図られるようになったころ、レイが目覚めました。

「…とまあ、こんな感じよ」

一通り話し終えたヒオウは、レイの顔色を覗うように彼を見た。

「リトウナには知り合いも、家族もいたけど……たぶん、あの爆発の規模じゃあ、生き残っている人はいないと思う……」

レイの正体 2

それを聞いても、悲しみや不安だという感情が沸いてこなかった。レイにはまるで雲の上の話で、それが本当に自分の身に起こったことだという実感が無い。

けれど、もし本当にヒオウ以外の何もかもを失ったのだとしたら。今頃、自分は泣き叫んだり、パニックに陥ったりしなくてはならないのだろうか。

……そう思うと、何の感情も持てない自分が、ひどく冷徹な人間に思えてきた。

「……ごめん」

気が付いたら、ヒオウに謝っていた。

「なあに、どうしたの？」

「きつと……辛いことがたくさんあったんだよね。でも、何も覚えてなくて……大切な人のことか、全然、思い出せなくて……ごめんなさい……」

あまり表情に変化はないが、その面差しには明らかに悲しみが浮かんでいた。

「レイが謝ることはないわ。記憶をなくしたのはあなたのせいじゃないもの」

丸椅子から立ち上がり、ベッドに腰を下ろしてヒオウは言った。

「確かに、リトウナみんなのことを忘れてしまったのは悲しいことだけれど、でも、記憶をなくしたのは、みんながあなたに『過去に捕らわれないで前をしつかり見て生きていきなさい』ってことを伝えたかったからなのかもしれないって思うの」

「……でも」

反論しようとするレイを押さえつけ、ヒオウは明るく言った。

「はいはい、そんな悲しそうな顔をしない！ 元気出して、ねっ」

と、レイの頬にぶちゅっ、と熱いベレーゼを送った。

「うわああっ」

兄にキスをされ、叫ぶレイ。それを見てヒオウは更に笑った。

「ほら、元気出たでしょう？」

「う、うん……」

ウインクをしてみせる兄に、レイは苦笑した。
と、そこへ、黒髪の少女が入ってくる。
その顔は少し強張っていた。

「あー……」

少女、乃亜はレイには解らない言葉　この地球の言葉で、日本語

というらしい　で喋る。それを聞いたヒオウは大笑いした。

「あっはははっ、見ちゃいけないもの見ちゃった、だって」

どうやら、先程の熱い口付けを見られていたらしい。

「えっ、違うよ、そんなんじゃない……」

レイは慌てて否定する。その言葉が通じたのか、乃亜はフツと顔を崩して、レイに近づいてきた。

「レイ、外、いこう」

と、手を差し出す。

「えっ、外？」

「外、きもちいい、天気、いい」

乃亜はまだうまくリトウナ語を話せないらしく、単語での会話が主だった。目が覚めたときにカタコトの言葉だったのは、リトウナ語を上手く話せなかったから、のようだ。

「確かに今日はいいい天気ね。ジメジメした感じもなくなってきて、空気が清々しくなったわ」

ヒオウがそう言うと、乃亜はにっこり笑った。

「そう、……んー、暑くない、涼しい。んんー……」

乃亜は何かを言いたいらしいのだが、言葉が出てこないのか、難しい顔をして唸っている。
しかしすぐにパツと笑顔を作り、レイに手を伸ばした。……言葉を伝えるのは諦めたらしい。

「いこう、レイ、ヒオウ」

「アタシも？」

「うん」

レイとヒオウは、乃亜に引っ張られて外へと出て行った。

その様子を診察室の窓から眺めていた聖は、思わず顔を綻ばせた。

大の男二人が背の低い少女にグイグイ引っ張られて道を歩いている。その姿のおかしいこと…。

「先生、次の患者さん入れますよ」

看護師に声をかけられ、慌てて窓から視線をはずす。

「はい、お願いします」

カルテを手にし、看護師に声をかける。

このまま何事もなければいいが…。

聖には、彼らに確かめなければならなかった。しかし、ど

うしてもそれを、訊く気にはなれないでいた…。

レイの正体 3

外の景色は確かに気持ち良かった。

晴れ渡る空はどこまでも高く続いていて、そこからは柔らかな太陽の光が降り注ぎ、少し涼しいくらいの風を心地よいものにしていった。

乃亜が二人を引っ張って連れてきたのは、櫻井医院から少し坂を上ったところにある、小さな公園だった。

公園と言っても、ベンチが2つほどあるだけの、ただの休憩所、といった感じの場所ではあるが。

「きて」

乃亜は2人を、公園の奥へと連れて行く。

深い緑色の木々を眺めながら進んでいくと、急に視界が開けた。ザアアツと風が通り過ぎ、レイの長めの前髪をかきあげる。

「わあっ」

目の前に広がる景色に、レイは歓声を上げた。

眼下には大きな川が流れていた。

悠々とした流れの中、そこから生まれた風が丘を駆け上がり、レイに水の香りを届ける。

「…これが、川…」

隣でヒオウはあっけに取られてその景色を見ていた。

「川？ 水の流れる場所…」

レイも呟く。

川面が太陽の光を受けてキラキラと輝くのが眩しい。少し目を細めて、その流れを観察する。

流れの早い場所、緩やかな場所。

流れの側には白く見える石の河原。それに沿って生い茂る木々と、緑が映える土手。

青い空を見上げると、点のように見えていた何羽かの鳥が徐々に近づいてきて、滑るように水の中に着水した。

こういう景色を見たのは初めてなような気がする…。何となくそう思った。

食い入るように川を見つめる二人に、乃亜は満足そうに微笑む。

「すごい？ きもちいい？」

「あ、うん…」

レイは応える。

「…みる、はじめて？」

その乃亜の質問には、ヒオウが答えた。

「ええ、リトウナにはなかったわ」

「ほんと？ ……うみ？ うみある？」

「うみ？ ああ、海？ 海もないわ。こんな大きな水源、リトウナには存在しなかった」

「ほんとー？」

乃亜は目を丸くする。

「海って、この川より大きいの？」

レイが質問すると、乃亜は大きく頷いた。

「おおきい、おおきい、おーおきい！」

両手をいっぱいいっぱいに広げ、乃亜は説明した。…その説明では良くわからないが…。

「うみ、いこう。あー、あついなったら」

「え、海って暑かったり寒かったりするの？」

「…たぶん気温のことでしょう。ここは一年を通して気温差があるようだから」

横からヒオウがそう説明してくれた。

「ふうん…。いいね、暑くなったら海に行こう」

乃亜に向かって微笑むと、彼女は何度も頷いてくれた。
そんな乃亜を見て、心が穏やかになっていくのを感じるレイ。

リハビリをしている間も、毎日のように顔を見せに来てくれて、片言の言葉で励ましてくれて…。何度この笑顔に助けられたことだろう…。

「あ、こっちもいい。こっちもきれい」

乃亜は別方向へと歩き出した。レイはうれしそうに、その後を付いていった。

そしてそれを、複雑そうな笑みで見送るヒオウ。

「…これで、良かったのよね…」

そう呟く姿は、どこか寂しげであった…。

優しい時間 1

それから、二年の歳月が流れた。

まだ陽が昇ったばかりの早朝。

少し霧のかかった肌寒い空気の中、黎^{れい} ここで生活をするために、
聖と李苑がつけてくれた名前だ は、庭にある花壇の前に座り、
丁寧^{ていねい}に土を掘っていた。

「ええと……三十センチくらい掘って……と、肥料、肥料を入れて
……」

手元にある小さな袋に入った肥料を、今掘ったばかりの穴に、ザラ
ザラと流し込む。

「球根の上部が地表から十センチになるように土を入れる……」

少しばかり考え込んだ後、軽く何度も頷きながら土を入れ、球根を
入れ、更に土をかけた。

「よし、次っ」

今球根を植えたところの隣に、また穴を掘っていく。そういう作業
を20回ほど繰り返すと、黎は立ち上がった。

「よし、この花壇は終わりっ」

パンパンと洋服についた土を払い立ち上がると、すぐ目の前にあるリビングの窓を開けた。

「李苑ちゃん、この花壇は終わったよーっ」

キッチンで朝食の準備をしている李苑に声をかける。

李苑は身重の体をゆっくりと黎の方へ向けた。

「あら、早いわね。もう終わったの？」

「うん。ちゃんと李苑ちゃんの言う通りにやったから大丈夫だと思っよ」

「そう、ありがとう。それじゃあ今日はこれくらいにして…」

「うん、着替えたら雛、起こしてくるよ」

「ありがとう、お願いね」

「うんっ」

幼い子供のように素直な返事を返し、リビングの窓を閉めると、玄関わきの水道の蛇口をひねった。

中秋のこの季節、早朝の水は凍えるほど冷たい。

身を縮こめながら手を洗うと、ブンブンと手を振って水気を飛ばしてからズボンで軽く拭いた。

そして家の中に入ると、自分の部屋のある3階（屋根裏部屋ともい

うへ上がっていった。

この部屋を、兄である陽央ひょうおう これも聖たちがつけてくれた名前だと一緒に使わせてもらっている。

ベッドの横にかけられた白いシャツ、赤いネクタイをすばやく身につけ、紺色のブレザーを羽織ながら階下の寝室の扉を開けた。

「雛ー、朝だよー」

声をかけると、ふたつ並んだセミダブルベッドの真ん中で、布団がもぞもぞと動いた。

「んんー、あさー？」

まだ寝ぼけ顔で、布団からかわいらしい少女が顔を覗かせる。

「おはよう、雛」

「ふうん……おはようございまして……」

小さな手でゴシゴシ目をこすりながら、雛は起き上がった。

「今日はこの服でいいのかな」

李苑が用意したのであろう、雛の洋服はいつも通りに三段あるチェストの上に乗っていた。

「はあい……」

雛はまだ眠そうな様子で、黎が渡した洋服に着替え始める。

「んしょ、んしょ…」

白いタイツを履くのに少し手間取っているが、李苑から「手を出さないように」と言われているので、黙って見守る黎。

「できたー」

着替えが終わる頃には目が覚めたらしく、雛は元気良くそう言った。しかし、良く見るとトレーナーが前後ろ逆になっている…。

「うーん、雛、ちょっと間違ってるよ」

「えー？」

雛は今着たトレーナーをつまんで眺める。

「逆だよ、逆。ほら、ばんざーい」

「あいー」

トレーナーをスポン、と脱がせると、ちゃんと前を確認してから、また着せてやった。

「はい、出来たー」

「できたー」

2人でニカッと笑うと、手をつないで部屋を出た。

優しい時間 2

「今日のご飯は何かな？」

鼻歌交じりに階段を下りると、丁度聖が通りかかった。

「おとーしゃん、おはようございまーしゅ」

雛のかわいらしい挨拶に、聖は滅多に見せない柔らかな笑みを浮かべた。

「おはよう」

と、雛を抱き上げる。

「聖くんおはよう」

黎も挨拶する。

「ああ、おはよう」

雛に向けた笑顔、そのままでも挨拶された。

「なんかさー」

黎が話しかける。

「聖くん笑顔で挨拶されると照れるよー」

本当に照れた表情で、黎は頭をかいた。

「は？」

怪訝そうな顔をする聖。

「だってかつこいいんだもん」

その台詞に、聖は頭を痛めた。

「何故そういうことを言う……陽央といい、お前たちおかしい……」

「あら、アタシがどうかした？」

そこへ、いきなり陽央が登場する。

「あ、黎、聖くん、おはよう。雛ちゃんもおはよう」

「おはよう」

「ひおーくん、おはようございまーしゅ」

皆の挨拶が終わると、陽央はにっこり笑った。

「今日も一段と格好良いわね、聖くん」

そう言って、リビングへと入っていった。

「……だからお前たちおかしいって……」

聖はそう呟きながら、陽央の後に続いた。

(だってかっこいいじゃないか)

黎はそう思ったが、さらに聖を困惑させるだけなので、その言葉は胸の内に留めた。

「李苑ちゃん、お掃除終わったからね」

陽央はそう報告しながら、ダイニングのテーブルにつく。

「あ、洗濯も終わったからな」

聖は雛を椅子に座らせながら言う。

「いつもありがとう。……私の仕事がなくなっちゃうわね」

サラダの入ったボウルをテーブルに置き、李苑は苦笑した。

「李苑ちゃんはおとなしくしてなきゃ駄目よ。少しゆっくりするよ
うに、お医者様に言われたんでしょう？」

と、陽央は李苑のお腹に目をやる。もう大分目立つ大きさになっていた。待望の赤ちゃんは、この冬にやってくる。

「そっだよ。座っててよ。俺運ぶから」

黎はキッチンに戻ろうとする李苑を無理やり座らせ、全員分のご飯を装う。

「でもね…。あんまり大事にすると、難産になるんだけど…」

更に李苑は苦笑した。

家族全員がそろったところで、食事が始まる。

黎、陽央がこの世界に来てからすでに2年。

最初は言葉も分からず、戸惑うことばかりだったが、兄弟として生活を共にすることになった櫻井夫婦のおかげで、何の不自由もない、平和で楽しい生活を送ることが出来ていた。

社会で生きていくために、色々な『資格』も取らせてもらい、本当にお世話になっている。

本来ならば、きっとこんな風には暮らせない。自分たちは、いわば『異端者』なのだ。

それを誰にも知らせることなく、匿ってくれている。並大抵のことでは出来ないことだ。本当に……どれだけ感謝しても足りない……。

明るい日差しの中、楽しく会話しながらの食事。

黎は、箸を持ったまま、独り笑った。

「何、黎、どうしたの？」

陽央の問いかけに、黎は更に顔を歪ませた。

「あのね………すげえ、幸せって思って」

全員が、黎に注目する。

「かっこいいお兄さんがいてさー」

と、聖を見る。

「優しくて綺麗なお姉さんもいるだろー?」

今度は李苑に視線を転じる。

優しい時間 3

「めっちゃめっちゃかわいい女の子はいるしー」

口の周りにご飯粒をつけている雛を見て、にやける。

「ちょっと変わり者のお兄さんもいるけど……」

「ちょっと、何でアタシだけそんな表現なのよ」

陽央に突っ込まれるが、それは気にせず、話を続ける。

「こんな幸せな環境、他にないよなー」

心からの本音。

記憶がないことの不安や恐怖など、この大きな幸せに包み込まれてしまっている。きつと、本当の家族だって、こんな幸せは感じない……そう、思う。

「ひな、かわいいー？」

皆が微妙に照れている中、雛だけは無邪気に喜んだ。

「うん、かわいいよー。世界ーだよ」

「えへへー」

雛が喜んでいるのを見て、

「あんだ、純粹無垢な少女まで惑わすような男にはならないでちょうだいね」

と、陽央が釘を刺した…。

食事が終わって後片付けをしていると、玄関のチャイムが鳴った。

「あっ」

皿を拭いていた黎は振り返る。

「黎くん、もういいから行ってらっしゃい」

「うんっ」

李苑に言われ、黎は皿を置くと、鞆を持って玄関へと走った。

「お弁当、靴箱の上にあるからねー」

「はいー!」

元気良く返事をし、靴を履いてお弁当を持ち、扉を開ける。そこには、黎と同じ制服を着た乃亜が笑顔で立っていた。

「おはよう、黎!」

二十センチ下からの元気いっぱい笑顔に、黎も最高の笑顔を浮かべた。

「おはよう、乃亜！」

2人は挨拶を交わすと、互いの手が触れそうで触れない、微妙な距離を空けて歩き出した。

「行ってきたーす！」

いつものように元気良く学校へと向かう弟を見送り、陽央は軽くため息をついた。

「本当、うれしそうね、あの子は……」

黎の代わりに李苑の片付けを手伝いながら、そう呟く。

「黎はもう大検取ったんだから、わざわざ学校なんて通わなくてもいいのに……学費だって馬鹿にならないんだから」

「あら、気にしないで、それは大丈夫よ。奨学金貰ってるんだものキユツと水道の蛇口を止め、李苑は微笑む。

「……迷惑かけるわね」

「大丈夫よ」

本当に申し訳なさそうな陽央に対し、彼が気を使わないようにと柔らかに微笑む李苑。

「ホント……。学校なんて楽しいのかしら」

「黎を見ていれば分かるだろう？」

リビングにいた聖が声をかけてくる。

「…確かにね」

毎朝乃亜が迎えに来ると、まるで子犬がご主人様を見つけて駆け寄る様を見ているようだ。

「少し複雑ね…」

陽央はそう呟くと、キッチンを出て自室へと戻っていった。

「何か事情があるんだな…」

雛を膝の上で遊ばせながら、聖が言った。

陽央は、大体のいきさつは話してくれたが、全てを語ってくれたわけではない。

聖が聞きたいと思っていることも、おそらくその語られていない部分にあるのだろう…。

彼が嘘をついているようには見えない。

しかし『機械の爆発』では、あんな銃創は出来ない。

自分達には想像も出来ない『何か』があるのではないか……そう思わざるを得ないのだ。

「もう少し……待ちましよう？」

李苑の言葉に、聖は軽く頷いた。

そこへ、電話のベルが鳴る。

「はい、櫻井です……」

受話器を取った李苑は、少し顔を曇らせた。そして、聖を振り返る。

「聖くん、早乙女さんから……」

その言葉を聞くと、聖の表情も一瞬だけ曇った。

「……それでね、お父さんったら、あたしの大好きなシュークリーム、全部食べちゃうんだもん。もう絶対口聞いてやらないっ！ って言っちゃった」

「あああー、乃亜にそんなこと言われたら、お父さんがっかりだよ」

学校へ向かう途中、そんな他愛も無い話をしながら、黎はまた幸せをかみ締めていた。

乃亜の表情はクルクルまわる。

笑っていたかと思うと怒り出し、そしてまたケラケラ笑い出す。同じ表情でいることがないので、見ていて飽きない。

「あつ、奈津子ー、おはよーっ」

遠くの方に友人を見つけた乃亜は、パタパタと駆けていく。その後ろ姿を見守りながら、黎は思うのだった。

この幸せが、いつまでも続きますように…。

そして、願わくば…。

あの子とずっと一緒にいられますように…と…と。

それぞれの気持ち 1

都会の喧騒を遮るようにに生い茂る、背の高い樹木の森。

その中心に、三階建ての白く大きな建物が建っていた。建物の上部には、銀の文字でこう記されている。

『紫乃原医療センター』

長期療養を必要とする患者を受け入れるサナトリウムとして機能しているが、実は様々な医療研究がなされている施設でもある。

だからこそ、黎の治療も秘密裏に行うことが出来、そして成功した。

一般の病院とは違うため、訪れる人も少なく、ひっそりとした施設内。

駐車場に車を止め、下り立った聖は、重苦しい表情でその建物を見上げた。そして、ひとつため息をつく、建物の中に入っていった。

中に入りロビーを過ぎると、すぐに目的の人物に会うことが出来た。

「やあ、久しぶりだね」

スラリと背の高い眼鏡をかけた男が、優しそうな笑顔で出迎えてくれる。

「はい……。早乙女さんもお元気そうですね」

聖は、早乙女の優しい笑顔に苦笑しながら答えた。

「まあまあ、そんな顔をしないでくださいよ」

早乙女は変わらず優しい笑顔で、聖を誰も居ない部屋へと案内した。パタン、と扉を閉めた後、早乙女はかけていた眼鏡を人差し指で上げ、そして言った。

「お互い忙しい身ですからね。さっそく本題に入りましょう。…彼らは、その後どうですか？」

彼ら。

それは黎と陽央のことだ。先日の早乙女からの電話で、ここで話し合うべき内容は分かっていたので、聖は冷静に答える。

「何も問題はありませんよ。二人ともとても優秀ですから、もう言葉に不自由することもありません。普通に、平和に暮らしています」平和、という言葉を少し強調して言う。それに対し、早乙女は笑顔のままため息をついた。

「…彼らを然るべき機関に預ける気はないのですね？」

「もちろんですよ。あいつらはもう、俺の弟ですから」

きっぱりと言う聖に、早乙女は笑顔を消した。

「危険はないというのですね。しかしその保障はどこにもない。もし彼らが……」

「心配いりません」

更にきつぱりと言いつつ。

「これでも……人を見る目には自信があります。あいつらが悪い人間だとは思いません」

初めて会った時の陽央の顔は、今でも忘れない。黎を守ろうと必死な顔をしていた。片時も離れず看病をし、目覚めた後もそれは変わらず……。今の様子を見ても、二人とも互いを思いやっているの分かる。

そんな二人が、『何かの目的で』ここに来たなど、思いたくなかった。そして、本当にただ事件に巻き込まれてここに来てしまったのなら……いたずらに好奇の目に晒すものでもないと思ったのだ。

「もしそれが間違いであつたら？」

「俺が責任を取ります」

暫く二人は睨みあっていた。

僅かな沈黙の後、早乙女は大きくため息をついた。

「今日はここまでです……。君の頑固さには呆れる限りですよ」

「すみません」

聖は笑顔で謝る。今度は早乙女が苦笑する番だった。

「けれど……彼らの正体がはっきりするまでは、こちらも監視させてもらいますからね」

「分かってます。…ありがとうございます。貴方がいなかったら、今頃黎は生きていなかった」

二年前のあの日、大怪我を負った黎の手術をしてくれたのはこの早乙女である。聖は助手としてその手伝いをした。

「目の前に消えそうな命がある…。それを助けるのは医療従事者の務めです」

早乙女はいつものように優しい笑顔で言った。

何だかんだ言っても、この早乙女も黎達を悪い者達だとは思っていないのだろう。しかし、そうとは言い切れない部分もあると、警告してくれているのだ。

「…ありがとうございます」

聖はもう一度、礼を述べた。

「いいえ。…それから、会長から伝言です。『娘と孫に何かあったら、ぶっとばすぞ、この野郎め』」

悪戯っぽくそう言う早乙女に、聖は目をパチクリさせた後、眉尻を下げて情けない顔で頷いた。

「…はい。お義父さんにも宜しくお伝え下さい」

「伝えておきますよ。それから、これは僕から。…李苑さんに危険があるようならば…僕は君も…彼らも、許しませんからね」

その言葉には、聖は鋭い瞳を早乙女に向ける。

「妻と子供達の安全は、俺が守ります」

それぞれの気持ち 2

それは、尊敬する先輩医師に向かって言うような口調ではなかった。ぶつかる視線は一瞬だけ火花を散らす。

しかし、すぐに互いに笑顔を見せ、軽く会釈すると聖は部屋を出た。後ろ手にドアを閉め、軽く溜息をひとつ。

早乙女に関して心が波立つのは、黎と陽央のせいばかりではない。妻の元婚約者という立場にある彼が、まだ独身である事が最大の理由である。

「…心が狭いな」

人間としての器がまだまだ成っていない。そう心の中で呟きながら、医療センターを後にした…。

その日、黎はとても元気がなかった。

いつもは朝から明るい笑顔で動き回り、ハキハキと受け答えするのに、今日はどうしたことか、どんよりとした暗い表情で、朝食の準備を手伝っていた。

「…どうしたの？」

心配になった李苑が訊く。

「えっ、うつん、何でもないよ」

と返事を返すものの、やはり暗い表情は変わらなかった。

「行って来ます…」

いつものように弁当を持ち、玄関を出て行く。

パタン、と扉が閉まってから、見送った李苑と陽央はその理由が分かり、「ああ」と声を漏らした。

「乃亜ちゃん、週番なのね…」

いつも迎えに来る乃亜が来ない。そういえば先週末、「来週週番で迎えに来れないからね」と乃亜が言っていた。

「…分かりやすい子」

陽央は呆れてそう言った。

一人寂しく登校した黎は、暗い表情のまま昇降口で靴を履き替えた。

「おはようー、あれ、今日一人か？」

後ろから同じクラスの男子生徒に声をかけられる。

「うん、乃亜は週番だから」

「あーそうなんだ」

そこでその生徒との会話は終わる。
教室に入ると、乃亜の友人が近づいてきた。

「あー櫻井、乃亜は？」

「週番だから先に来てるはずだけど…」

「あーそっか、どうもー」

黎に軽く手を振り、乃亜の友人は去っていく。
それを見送り、自分の席につくと、

「今日は高倉さんと一緒じゃないの？」

と、後ろの席の男子生徒に声をかけられた。

「今日は週番だから…」

今朝三度目の同じ答えを返す。

「ああ、そっか」

その男子生徒も、他の者達同様、同じ反応を示した。

「なんか、お前ら一緒にいないと変な感じするよな」

「えっ？ そっ？」

「だって四六時中べったりくっついてんじゃん。いくら付き合ってるからって、そこまで見せ付けなくてもいいよなって感じ？」

「えっ？」

意外な言葉に、黎は少し驚いた。

「俺達……付き合ってないよ」

「はー？ 何言っつてんの、そんなこと誰も信じないって。皆分かってるから、今更隠さなくていいから」

「いや、ホントだっ……」

付き合っているというのは事実には反するので、黎は否定する。

丁度そこへ、乃亜が仕事を終えて教室に戻ってきた。

その姿を見つけた途端、黎の表情はパツと明るくなる。

「あ、黎ー」

乃亜の方もすぐに黎を見つけ、やってくる。

「ちゃんと一人で来れた？ 怪我とかしなかった？」

大きな瞳を更に見開いて、黎に話しかけてくる。

「大丈夫だよ。乃亜は心配性だなあ」

黎は乃亜に会えたうれしさを隠すことが出来ず、満面の笑みで答えた。

「だって心配だったんだもん。黎、一人で学校来たことないし、怪

我したら大変だし…」

輸血を必要とする大怪我の出来ない黎を、本気で、真剣に心配する
乃亜。しかし、黎はにこにこ笑顔を止められない。

「…何笑ってんの？」

話を聞いていない風な黎に、少し怒りを感じる乃亜。

それぞれの気持ち 3

「え？ いやー、乃亜のかわいさを噛み締めてた」

その言葉に、乃亜は一瞬きよとした後、耳まで真っ赤になった。

「そおいうことはっ、公衆の面前では言わないのっ！」

「二人きりなら言ってもいいわけ？」

「だっ……駄目駄目！ 無駄に乙女をトキメかさないのっ！」

何て叫ぶ乃亜に、周りが大爆笑する。

「あっははは、お前らおかしいよなーっ」

「ほんとほんとー」

皆が笑う中、乃亜の友人の一人はほそりと呟いた。

「付き合ってないって言ったって、それじゃあ誰も信じないって」

その呟きを聞いた乃亜は、顔を赤くしたまま怒鳴る。

「違うもんっ、付き合ってないもんっ」

しかし、その叫びも空しく、誰も真実を理解してはくれなかった。

(あんなに力一杯否定しなくてもいいのになあ…)

学校からの帰り道。いつものように乃亜と二人で歩きながら、黎はそう思っていた。

自分も「付き合っていない」と否定はするけれど…。本当は、「そうなんだ、こんなにかわいい彼女でうらやましいだろう!」と声を大にして言いたい。

しかし、どちらかが告白したわけでもなく、ただいつも一緒にいるだけ。

雰囲気的には「恋人」に近いような気もするが、手をつないだこともないのが現状。

(…付き合っていない、よな)

しかし、どこから付き合っていて、どこまでが付き合っていないのか。…難しいところだ。

「黎? 何ボーツとしてんの?」

「はへっ?」

急に乃亜に顔を覗き込まれ、黎は間抜けな声を出す。

「何でもないよー、あははー」

引きつった笑いを見せると、乃亜は怪訝そうな顔をしたが、「ふうん」と呟いてまた歩き出した。

そんな乃亜の横顔を見て、黎は決心を固めた。

(告白しよう！)

何度そう思ったか分からないが、今までは勇気が足りなくて言えなかった。しかし、今日こそは！

この中途半端な関係から一歩前進したい。

「乃亜っ」

「んー？」

乃亜が振り返る。

「あ、あのさ…」

乃亜は大きな瞳で黎を見つめ、言葉を待つ。

「あー……」

黎は口をパクパクさせるが、喉の奥が詰まって、中々言葉が出てこない。

(言え！ 黎！)

心の中で自分を叱咤する。

(今だ、言うんだっ！)

ゴクン、と唾を飲み込み、真剣な眼差しを乃亜に向けた。

「俺っ、乃亜のことっ……」

言葉を告げようとした時。

ふわりと、柔らかな風が吹いた。

それは黎の、乃亜の髪を優しく揺らし、そして通り過ぎていった。

「……」

黎は、言葉が続けることが出来なかった。

「……なに？」

そこから言葉を発しない黎に、乃亜は首を傾げた。

「あ……いや、……乃亜、かわいいよなっ」

ニカツと笑って言うと、乃亜は口を尖らせた。

「またそついうこと言っー！」

「だってかわいいもん」

「ぶー！」

ちよっぴり頬を膨らませ、早足で歩いていく乃亜を、黎は笑顔で追いかける。

言えなかった。

また勇気が足りなかった？

いや…。

この気持ちを告げてはいけないような、そんな気がしてしまったのだ。

何故…？

それぞれの気持ち 4

その日の夜。

陽央が欠伸をしながら部屋に戻ると、ベッドに転がっていた黎は勢い良く起き上がった。

「わっ、びっくりした。寝てたんじゃなかったの？」

「うん……。ちょっと、陽央に聞きたいことがあって……」

「え、アタシに聞きたいこと？」

「うん……」

「やだ〜、何よ、何？ 聞きたいことって〜」

陽央はとても嬉しそうだ。黎はいつも聖の方を頼るので、本当の兄として少し寂しい思いをしていたから。

「いや…陽央なら、恋愛について詳しいかな〜と思って……」

「まあ。そんなこと思ってたくれたなんて光荣……」

「男の気持ちも女の気持ちも解りそうだから……」

「……」

ピキッと陽央の笑顔が固まった。

「テメエはアタシを何だと思ってるのよ！」

と、黎の首を絞める。黎は苦痛に顔を歪めながらも、

「お、オカマ？」

と勇気ある発言をした。

当然ながら、しばらく陽央にプロレス技をかけられる黎だった…。

「で？ 何があつたのよ？」

しばらくして黎を解放した陽央は、やや不機嫌さを残しつつ聞いてみた。

「う、うん…。あのさ…」

中々話し出さない黎に少しイラついていた陽央は…ふと、ある考えが浮かんだ。

「アンタまさか……乃亜を妊娠させちゃったとか言うんじゃないわよね！？」

その言葉に、黎はベッドから激しく転がり落ちた。

「いやあゝ！ 何てことしてくれるのよ！ この世界では未成年の結婚は大変なことなのよ！ 聖くん達にこれ以上迷惑かけないで頂戴よ〜！」

「い、いや、そうじゃなくて…」

「えっ、違うの?」

「そんな話じゃないんだ…」

「じゃあ、何の話?」

「あ……こ、告白出来ないから、どうにかしたいなあ……と」

「……」

黎のその台詞に、今度は陽央が驚く番だった。

「そ、そんな話なの!?!」

「そ、そう……」

黎は少し照れながら頷く。

「そ、そうね、今のアンタはとていい子だものね……」

陽央がそう言うので、黎は「昔の自分って?」と聞きそうになった。しかし今の陽央の勘違い振りから、聞かない方がいいような気がした……。

「アンタ達仲がいいから、てっきりもう付き合っているものだと思っっていたわ」

「うん……。皆にそう言われるんだけど、そうじゃないんだ。だから、

ちゃんと言おうと思ったんだけど……」

「言えないの？」

「うん。言いたんだけど……。何だろう、うまく言えないんだけどさ、こっつ……言っちゃいけないような気持ちになるんだ」

黎の言葉に、陽央の顔色がサツと変わった。しかしそれには気付かず、言葉を続ける。

「何でかなあ……。乃亜はかわいいから、早く言わないと他の奴に取られちゃうかもしれないから、焦ってるんだけど……」

「そっ……」

それから陽央はしばらく黙ってしまった。

「……陽央？」

黎の呼びかけに、陽央は曖昧に笑う。

「ああ、そっ、ね……。時期が来ればちゃんと言えるようになるんじゃない？」

「そうかなあ……」

「そっよ。……もう寝なさい。明日になったらまたチャンスが来るわよ」

「うん……そうかな。分かった。ありがとう、陽央。おやすみ」

と、黎は布団を被る。

「おやすみ……」

兄に相談して気が晴れたのか、黎はすぐに寝息を立て始めた。そんな弟を見つめ、陽央は呟く。

「すべてを忘れたわけじゃ……ないのね……」

静かに目を閉じ、故郷の風景を思い出す。

その中にいる人達の中心には、銀色の長い髪の少女がいた。

記憶 1

綺麗な花畑の中にいた。

黄色や赤、青の目の覚めるような美しい色彩に囲まれて。

『黎』

花畑を駆け抜ける短い黒髪の少女。

『乃亜』

黎は笑顔で前を行く乃亜を追いかける。

しかし、追いかけても追いかけても乃亜に追いつくことはなかった。
徐々に不安が心に広がっていく。

乃亜の姿は消え、花畑も消え、辺りには何もなくなった。残ったのは、恐ろしいくらいに“黒”。必死になって明かりを探しても、あ
るのは吸い込まれそうな暗黒ばかり。

『乃亜？』

暗闇を走り、必死になって彼女を探す。

突如、全身に痛みが走った。

激痛のあまり立っていられなくなり、身体を地面に横たえる。

苦痛に顔を歪めていると、目の前に青白い明かりが灯った。

痛む身体を押さえながら、その明かりに顔を上げる。

青白い光が、人型に陰っている。……誰か、いる？

『…乃亜？』

人影が、振り返った。

心臓を凍てつく刃で貫かれたかのような衝撃が走る。

『！』

ハツと目を開けると、見慣れた天井が視界に飛び込んできた。はあっと一息ついて、それから大きく深呼吸する。額にはじんわりと汗が滲んでいた。

「…なんか、嫌な夢見た…」

ぼんやりとしか覚えていないが、胸に苦いものが残っている。黎はしばらく天井を眺め、そしてゆっくりと起き上がった。

リビングに下りていくと、いつものように李苑が朝食の準備をしていた。そのうちに聖がやってきて、陽央もやってくる。

いつものように雛を起こし、和やかな朝食が始まる。

朝の光が窓から差し込み、冷たいくらいだった空気を温めていく。

「おいしーねー」

ニコニコ笑顔で食事をする雛に、皆が笑顔で応える。

笑い声の絶えない食卓。

いつもの光景なのに…。

何故か黎は違和感を感じていた。

まだ夢の中にいるような感覚。胸の奥に残った苦いものが、徐々に体を蝕んでいくかのようなようだった。

「黎？」

表情の暗い黎に気付いて、陽央が声をかけてきた。

「えっ？」

「何暗い顔してるの。今日はちゃんと乃亜が迎えに来るんでしょ？」

「うん…そうだね…」

やはり暗い顔の黎に、全員が顔を見合わせた。

「今度は何よ、困った子ねえ」

呆れるように言う陽央に、黎は「うん…」と歯切れ悪く応えただけだった。

(なんだろう、ぼうつとしてるな…)

皆の音がワンワンと響いて聞こえてくる。目の前の景色も霧がかかったようにはつきりしない。頭もぼうつとしていて、眠りの中に誘われそんな感覚だ。

「…ねえ黎、あんたおかしいわよ？ どこか具合でも悪いの？」

そう陽央に訊ねられると、黎はぼうつとしたままで気だるそうに応

えた。

「うるせえな……放っとけよ……」

まるで別人の物言いに、全員が黎を凝視した。

「……あれ？」

それからすぐに霧がかった景色が晴れ、いつもの感覚が戻ってきた。

「あー……ごめん陽央、俺何言ってるんだろ……」

暴言を吐いてしまったことに対して謝る。

記憶 2

すると、ハツとしたように陽央は笑った。

「別にいいわよ。ごめんなさい、うるさかったかしら」

「ううん、違うんだ。心配して言うてもらってるのに、変なこと言
つてごめん」

そう謝る黎は、いつもの穏やかな黎だった。

「早く食べないと乃亜が来ちゃうね」

ぼうつとしていたため、まったく手をつけていなかった朝食を急いで掻っ込む。

そんな黎を陽央は不安そうな目で、聖は厳しい目で、李苑は心配そ
うな目で見つめた。

『その時』が、近づいているのかもしれない……と。

そしてその不安は、現実のものになってゆく…。

朝食の片付けをしていると、いつものように乃亜が迎えに来てくれ
た。

「おはよう」

いつもの明るい笑顔に、黎はニンマリと笑った。

「おはようっ！」

元気よく挨拶を返し、乃亜に続いて玄関を出ようとした時だった。乃亜の後ろ姿が、一瞬だけ揺らめいた。

(…あれ?)

揺らめいて、揺らめいて、塵気楼のように薄れていく…。

「ノア!!」

叫んで、乃亜の手を思い切り掴んだ。

乃亜は驚いて、目を見開いて黎を振り返った。

一瞬の沈黙。

「あ……れっ? ごめん、何やってんだろ……」

静かに乃亜の手を離す。すると、乃亜の瞳がじんわりと潤んできた。

「うわっ、ごめん! 痛かった!?!」

黎が慌てて訊くと、乃亜は顔を歪めて頷いた。

「心臓口から出そうだった……」

よほど驚いたらしい。

黎が掴んだ手は、徐々に赤くなってきた。

「あー、ごめん！　こんなに強く引つ張って……痛いかな？」

「んもー、痛いよー。呼び止めるなら静かにやってよー」

涙目で頬をぶくつと膨らませる乃亜。黎は必死に謝りながら、家を出て行った。

それを見送った陽央は、リビングに戻り、ソファに腰掛けている聖に向かつて、言った。

「話があるの」

その瞳は、真剣そのものだった。

「今、話しておいた方がいいと思うの。……アタシ達が、ここに来た本当の理由を」

それを聞き、聖はゆっくりと頷いた。

「俺も、聞かなきゃならないと思ってた。……陽央から言ってきたくれて良かったよ」

そして、陽央の口から真実が語られる……。

学校へ行ってからは今朝の変な感覚はまったく現れることなく、いつも通りに過ごすことが出来た。

（なんだっただんたろうなあ、あれ……）

ポーツとしていたせいで陽央には暴言を吐き、乃亜にも痛い思いをさせてしまった。

(あああ、ごめんなさい…)

頭を抱え込み、胸の中でひたすら反省する黎であった。

放課後。

部活動をしていない黎と乃亜は、のんびりと帰路につく。

「今朝はごめんね」

黎は今日何度目かの謝罪の言葉を口にした。

「もういいよー。もう痛くないし」

と、乃亜は手をブラブラさせる。

しかしまだ黎がしょ気返っているので、乃亜は鞆を持つ手を思いっきり振り、

「ていつー!」

ガツン。

黎の頭に直撃させた。

「いつ…」

痛みのがあまり、少し涙目になる黎。そんな彼を見て、乃亜は二カツと笑う。

「これでおあいこっ」

その笑顔に、自然に笑みがこぼれる。

(やっぱ、いいな)

彼女の笑顔は心を癒してくれる。

(乃亜が一番、好きだ…)

自分の中にある大きな想いを、改めて感じる。

この想いを伝えたい。

乃亜に、この想いを…。

「じゃあ黎、また明日ね」

その声にハツとすると、もう高倉家の家の前に来ていた。乃亜は軽く手を振り、玄関の方へと小走りに走っていく。

「あ…」

今、言わなくては。

そんな衝動にかられた。

乃亜は靴から家の鍵を取り出し、鍵穴にそれを差し込んでいる。

黎は名前を呼ぼつと短く息を吸い込んだ。すると。

「あれっ？」

乃亜が小さく声を上げた。

黎は開きかけた口を閉じ、一呼吸置いてから乃亜に駆け寄った。

「どうかした？」

「…鍵、開いてる…」

乃亜は不安そうな目で黎を見上げた。

「えっ？ 誰か帰ってきたんじゃないの？」

「ううん、今日はお父さんもお母さんも残業だって言ってたし…。それに、今朝お母さんと一緒に出て、ちゃんと鍵かけたの、覚えてる…」

「……………」

二人の脳裏には、おそらく同じことが過ぎったのだろう。

黎は乃亜を押しのけると、そっと玄関のドアを開けてみた。

中はしんと静まり返っている。どこにも異常はなさそうだったが……ただ一つ、リビングのドアが開けっぱなしになっていた。

乃亜を振り返り、そのドアを指差す。乃亜は首を振った。

「……ちゃんと閉めたはず」

その顔からは徐々に血の気が失われていった。

黎はここで待っているように目で合図すると、静かに中へと入っていき、開け放たれたリビングのドアから、そっと中を覗いてみた。

中は荒れていた。

リビングのサイドボードの引き出しはほとんどが開けられ、中の物が散乱していた。何度かこの家に遊びに来たことはあるけれどこのように散らかった状態の家ではなかった。

（泥棒！？）

明らかに異常な状態に、推測されることはただ一つ。

カタン……。

その時、階上で物音が聞こえた。

瞬間、黎は何も考えずに廊下に飛び出し、階段を駆け上がった。た。

「黎っ!?!」

玄関先からの乃亜の声に振り向きもせず、物音が聞こえたであろう部屋に勢い良く飛び込んだ。部屋の西側の窓が開いていて、白いレースのカーテンが揺れている。その向こう側に人影が見えた。

（泥棒!）

瞬時にそう判断し、窓から飛び降りようとしている泥棒に飛びついた。

渾身の力を込めて泥棒を引き倒すと、一緒に掴んだカーテンがブチブチと音をたてて引き千切られた。

ドスン、と大きな音をたてて、泥棒と一緒に床に転がる。

はずみで力が緩み、泥棒はまた逃げようと立ち上がったが、すぐにタックルし、押さえつけた。

「乃亜っ! 警察! 警察呼んでっ!」

大声で叫ぶと、ドンドンと階段を駆け上がってくる足音が聞こえてきた。おそらくは乃亜だ。

すると、急に泥棒から力が抜け、おとなしくなった。

（観念したのかな?）

そう思ったが その考えが甘かった。

一瞬だけ出来た隙を泥棒は逃さなかった。
胸ポケットに忍ばせていた小型ナイフを素早く切りつけてくる。
反射的にそれを避ける。しかし、次に飛んできた蹴りは避けること
が出来なかった。

みぞおちに蹴りを喰らい、ダァンツと床に叩きつけられる。そこで
おとなしく倒れていれば良かったのだが、つい条件反射で身を起こ
してしまった。

「黎っ！」

乃亜の悲鳴が耳に飛び込んできた。次の瞬間、頭に鈍い痛みが走っ
た。鈍器で殴られたのだ。
目の前が真っ暗になる。

「黎っ!!！」

警察に連絡を入れた携帯電話を放り投げ、乃亜は黎に駆け寄った。

「黎！ 大丈夫!? ねえっ!!！」

すぐ傍で乃亜の声がする。目を凝らしてその声の方を見た。霞んだ
目に人影が映る。

「……………のあ?」

そう、呟くと。

パァツと視界が開けた。

(え…?)

目の前にいたのは乃亜ではなかった。

美しい顔に穏やかな笑みを浮かべ、サラサラの銀の髪を揺らし、黎に向かつて手を差し伸べたその人は。

「…ノア」

『ノア』だった。

誰よりも美しく、誰よりも強く、そして
誰よりも愛しい。

『ノア』

「黎っ！」

ハッと我に返ると、銀色の髪の女性は消えていた。代わりに、大きな瞳いっぱい涙を溜めた乃亜がいた。

「 乃亜……」

「大丈夫…? ごめんね……」

溜まっていた涙が頬を伝っていく。それが黎の頬に落ちる。

暖かい……涙。

それを感じ取ると黎は……乃亜を突き飛ばし、ヨロヨロと立ち上が

った。

突き飛ばされてよろけ、床に尻餅をついた乃亜は、突然の出来事にただ驚くばかりで……。黎を見上げていることしか出来なかった。

「…俺は…」

よろけて、壁にドンツとぶつかる。

「俺はっ…！」

黎の視界はまた真っ暗になっていった。

それは頭を打った衝撃のためか、それとも…。

倒れゆく黎を眺め、乃亜は静かに涙を流し続けた…。

リトウナ 1

真っ白な空間に、ぽつんと立っていた。

しばらく何も考えることなくそこに立っていると、徐々に周りの景色が黄色に染まりだした。

ゴウゴウと風の音が耳を劈き、砂混じりの風が体を弄る。砂の上に立つ足は不安定で、しっかりと踏ん張らないと引っくり返りそうだ。

黎は、空を見上げた。

黄色い太陽が砂嵐に光を弱められ、悲しげに浮かんでいる。

しばらく太陽を眺めた後。

まっすぐに前を見据えた。

遠くに見える灰色の、低い建物の郡。

「リトウナ……」

見覚えのある景色、建物。それは遙か遠き故郷、リトウナ。

建物の方角から、微かに歌声が聞こえてくる。目を閉じてその声に耳を傾け、そして一歩、足を踏み出した。

スツと景色が変わる。

砂嵐から、静かな灰色の空間へ。

灰色の天井からは、柔らかかそうな白い布が吊り下げられている。…

…見たことのある景色だ。

以前は毎朝、これを眺めていた。

そして、この歌声…。

「あっさあっさあっさー、朝になりましたよー、起きる時間ですよー」

テンポも音程もはずれた、しかし耳に心地よい声。

「はーやく起きないーとチューしちゃうぞっ……」

バキッ。

鈍い音がして、歌は止んだ。自分の腕らしきものが握りこぶしを作っているのが目に映る。

『あれ…?』

不思議に思っていると。

「アンタ何すんのよ！ いきなり殴らないでよ！ 痛いじゃないの！」

視界に長い黒髪の女 いや、男が入ってきた。

『ヒオウ!』

黎は叫んだが、陽央は反応しない。

「うるせえなー…。耳元で変な歌歌ってるからだろー」

黎とは別の……しかし、同じ声が聞こえた。そして、黎の目の前にスツと人が現れる。

「変な歌とは何よ！　せつかく気持ちよく起こしてあげたのに！」

陽央の視線は黎の少し前にいる人物に向いている。

「なーにが気持ちよく、だよ……」

黎の目の前の人物が気だるそうに言った。

『…俺…？』

目の前で赤茶色の髪を気だるそうにかきあげている人物は、紛れも無く、自分であった。　少し前の。

陽央も現在よりは華奢な感じで、女言葉で喋っていると、本当に女に見えそうだった。

『俺は過去にいるのか…？』

そう結論が出るまでに時間はかからなかった。ここは夢の中か。記憶の中にも迷い込んだのか…。

夢の中の自分　レイは、天蓋付きのベッドから降りると、裸に上着を一枚纏っただけで歩き出した。数歩歩いたところで、陽央ヒオウを振り返る。

「そっぴやあ…。あれは？　隣に女いただろ」

その台詞に、ヒオウはニコツと笑い、

「あの女の子なら丁寧に追い払ってあげました。…いい加減、メイ

ド連れ込むのやめなさいよね。あの子、また違う子なんでしょうっ?」

最後の方は少しため息混じりに言った。

「他にやる事ねえんだよ」

と、レイはまた歩き出す。

「女の子は大切にしてよ。……数が少ないんだから」

「放射能の影響、か。別に俺には関係ない。むしろ、種の繁栄には貢献してるんじゃないかねえ?」

「レイ!」

リトウナ 2

ヒオウの咎める声を無視して、そのまま冷たい床を裸足で歩いていく。

眩しい光の降り注ぐ大きな両開きの窓を開け放ち、空を仰いだ。

黄色い太陽が高い位置に見えたが、その光が直接ここに届く事はない。

放射能や紫外線を防ぐための、透明な天井が街全体を覆っているからだ。

目の前に咲き誇る色とりどりの花や植物も、すべて人工に造られたもの。手を伸ばしてそれらに触れ、あまりの無機質さに吐き気がした。乱暴に耒り取り、地面に投げ捨てる。

レイが生まれた頃、ここリトウナでは戦争が勃発していた。

理由は土地の争い、経済摩擦、色々あるが 今いる地球の十分の一程しかない小さな星で、兵器を使った争いをすればどうなるか。

結果は解り切っていた筈なのに 。
人々は争いを止められなかった。

そして、当時一番権力を持っていた国の最高司令官であったレイの父、ヒューイにより、核爆弾が落とされた。

生物は死に絶え、自然は破壊され、大気は汚染された。

それで戦争は終結したが…。

今も人々は放射能汚染のため苦しんでいる。終戦から数年経った今

も、人口は減り続けている。

戦後世界は統一され、その王となったヒューイにより造られたこのドームの中で、生き残った人々は生活している。

王の息子であるレイやヒオウは、その中でも特に裕福な生活を与えられていた。

「ねえ、昨日どうして来なかったのよ」

「ああ？」

「アタシがどれだけヒューイに気を遣ったか、分かってる？」

「悪かったよ。…だって行きたくねえもん、あんなとこ」

「…気持ちは分かるけど…。あんたの誕生パーティーでしょう。主役がいなくてどうするの。顔ぐらい出さないとまたお兄様方に苛められるわよ」

「…めんどくせえ…」

重いため息をついてレイは室内に戻ってくる。そして着替えを始めた。

レイには異母兄弟が二十人くらいいた。

くらい、というのはレイ自身、何人いるのか把握出来ていないからだ。

父親でありこの国の国王であるヒューイには何人もの妻がいて、面

倒でいちいち把握していらなかった。

しかしこの兄弟たちは国王である父に気に入りたいがため、いがみ合いが凄かった。

レイは父にも権力にも興味がなかったが、何故か兄弟の中で一番父にかわいがられていたため、嫌でもその抗争の中に巻き込まれていた。

抵抗すら出来なかった幼い頃は、生傷が絶えなかったものだ…。

「あんたヒューイの唯一のお気に入りなんだから、もっと愛想振りまいときなさいよ。反抗するから痛い目に遭うのよ」

「面倒なんだよ。代わりにヒオウがやっつけよ」

「冗談でしょう。嫌よ」

「…てめえも嫌なんじゃねえかよ」

ヒオウもレイと同じく、父を嫌っているようだった。理由は聞いたことはないが、周りから聞こえてくる話によると、おそらく母親との関係ではないかと思われた。

その辺りもレイが父を嫌う理由と似ていて、更に親近感が沸いたものだった。

「…たく…。あいつが俺なんか構うから、他の奴らがうるせえんだよ。放つとけってんだ…」

それが、“本当の理由”のひとつ。

迷惑なだけのいざこざに巻き込まれて、嫌気がさしていた。

「仕方ないじゃない。ヒューイはレイのお母さんも特別扱いしてたみたいだから。その息子もかわいいんでしょ」

「……」

リトウナ 3

“母親”

それがもう一つの理由。

母のことは大嫌いだった。…そう、“だった”。

母は病気のため、レイが十歳の時に亡くなっている。

いつも何かの研究のため自分の傍にはいてくれず、いつの間にか死んでしまった母。レイは、その死体を確認したのが、初めての母との対面だった。

青白い寝顔を見ても、涙は出てこなかった。

ただ、僅かに、悔しさと憎しみと 寂しさを感じただけ。

レイの傍にはいなかったけれど、いつも父、ヒューイには寄り添っていたという母。

それは、子供染みた感情であると思った。

母を恋しがって寂しがるなんて、格好悪いことだと思った。そんなことを心の奥で思っているなんて自分でも認めなくなかったから…。今は両親のことは考えないようにしている。

「あー、くそっ、つまんねえっ！」

久々に母のことを思い出し、イライラして大声を上げた。

「急に大きな声出さないでよ、びっくりするじゃ…あああっ！」

大声を注意したヒオウであったが、遥かにそれを凌ぐ大声を上げた。

「な、なんだよ」

逆に驚かされたレイは、内心ビクビクしながら聞き返す。

「アタシはこんな説教しに来たわけじゃなかったわ。アンタのシケた顔見てたら思わず違う方向に行っちゃった」

「…うるせえ、オカマ」

「なによ、年中発情期男」

と、軽く言い合った後、ヒオウは言葉を続けた。

「昨日のパーティにヒューイが新しい奥さん連れてきたのよ！」

「…また」

別に珍しい話でもなかったもので、レイはその話に興味を示さなかった。年に一、二度はある話だ。女の数が極端に少ないので、一夫多婦制というわけではないが、気に入った女がいると手に入れずには済まないらしい。すぐに飽きてしまうくせに…。

「別にいいだろ、エロジジイの話なんか」

「良くないわよ」

ヒオウはレイの肩をガッチリ掴み、真剣な顔で言った。

「あれはもう犯罪よ。今度の嫁はアタシの一つ上よ」

「……は？」

レイは間抜けな顔で聞き返した。

「……だつてお前……」

と、ヒオウを指差す。

「十七よ」

「……はあっ!?! 何それ!?!」

「だから、凄い話でしょう? ヒューイはもう六十過ぎてんのよ! 信じられないと思わない!?!」

「マジでえ? ……その女の神経疑うぜ、俺は……」

「きつと無理やりなのよ、かわいい子だったもの。かわいそうに……」

「ふーん……」

さすがのレイにも、この話は驚きだった。果然興味が出てきた。

「おもしろえつ、その女見に行つて来る。こん中いるんだろ?」

「ええ、もう後宮に入つてるはずだけど……」

ヒオウが答えるや否や、レイは弾むように部屋を飛び出していった。

「ちょっと、待ちなさいってー」

その後をヒオウが追いかけていく。

その光景を見ていた黎は、猛然とその後を追った。

覚えのある会話だ。

この会話の後、レイはその人物と接触する。彼らの後を追いかければ、その人物に逢える！

しばらく走っていくと、前方から歩いてくる二つの影にぶつかつた。短い白髪交じりの髪に、精悍な顔つき。がっしりとした体躯はとも六十を過ぎた男とは思えない、父ヒューイ。そして、その横で銀色の長い髪を揺らし、優雅に微笑むその女性こそ。

『……！』

声にならない声を発し、黎はその女性に飛びついた。しかし、そのスラリとした美しい体は黎を受け止められることはなかった。あっさりとするり抜けて、勢い余って床の上を二度程転がる。……体に痛みは無かった。しかし、胸は……心は、張り裂けそうな程痛みを持ち、悲鳴を上げていた。

振り返ると、その女性の美しさに目を奪われている自分と、必死に昨日のフォローを入れるヒオウの姿が映った。

『あ……』

もう一度、黎は女性に手を伸ばした。今度はゆっくりと光を受けているわけでもないのにキラキラと輝く銀色の髪にそっと触れた。

しかし、やはりその手に触れることは叶わず、もう二度と彼女に触れることは出来ないのだという現実が黎の心臓を突き刺した。

銀色の髪が霞む。

涙で、見えなくなってしまう…。

触れられないことは分かっている。それでも、彼女を後ろから抱きしめるように包み込んだ。

『ノア…！』

叶うものならば、時間を巻き戻してほしい。それが出来ないのならば、せめてこのまま時を止めて欲しかった…。

美しい人 1

その人は美しかった。

顔が整っているのはもちろんのこと、スラッと伸びた手足、腰まである長い銀の髪、白い肌…。どれもこれも輝いて見えるほどだ。

思わず見とれていると、銀の髪の女性はその視線に気付き、優雅に微笑んだ。

パツと目を逸らすと、ヒューイと視線がぶつかった。

「レイ、昨日はどうしたんだ。折角お前のために皆さん来て下さったというのに」

穏やかな口調ではあるが 自分の顔を潰されて怒っていないはずがない。

隣にいるヒオウが、緊張して体を固まらせているのが分かる。

「…調子悪かったんだよ」

ボソツと呟く。そのレイの台詞に、更に緊張するヒオウ。

「そうなんですよねー、急にお腹壊しちゃったものでー。ホントにこの子ったら」

引きつった笑顔でそうフォローする。

しかしそんなヒオウには目もくれず、レイのみに視線を向けるヒューイ。

「…まあいい。丁度いい、新しい妻を紹介しよう」

と、女性の背中に手を回す。

「シオという。思わず見惚れる程美しいだろう？」

ニヤリと笑うヒューイに、カツとする。彼女に見惚れていた自分を嘲笑うかのような態度に。

「まあ、ヒューイ様…」

シオは恥じらい、少し俯く。

「何、本当のことだ。お前のような妻を持ってて鼻が高いよ。…これが昨日言っていた息子のレイだ。本当ならば昨日紹介出来るはずだったのだが…」

「いいえ、構いませんわ」

「すまないね、何分、まだ子供なもので」

その台詞に、更にカツとなる。今すぐにでも殴りかかりたい衝動を必死に堪える。

「他に用がないのなら、これで」

ヒューイ、シオの顔も見ずに足早にその場を立ち去る。

「それではワタシもこれで。失礼しまーす」

慌ててヒオウはレイの後を追う。

(くそっ、面白くねえっ！)

大股で歩きながら、途中にある造花の生けてある花瓶を蹴り上げた。ガチャン、と派手に割れる音がしたが、振り向きもせず更に歩いていく。

「ああ、ごめんなさいね、迷惑かけるわね」

近くにいたメイドたちにヒオウが代わりに謝っている。それも癪に障った。

「うるせえなお前！ ついてくんなよ！」

「何言ってるのよ！ あんたの短気で周りがどれだけ迷惑を被るか、考えなさいよ！」

「いちいち口出しすんじゃないわねえよ！ 親父に反抗も出来ねえくせに」
「！」

と、掴みかかる。

そのレイの言葉に、ヒオウは少し悲しそうなお顔をした。

「…そうね、それだけは出来ないわね。…まだ死にたくないもの」

勢いがなくなっただので、レイは掴みかかった手を思わず緩めた。す

ると。

今度はヒオウがレイに掴みかかった。

「でもそれはアンタも一緒にしよう！ 影では反抗出来ても目の前に来ると何も出来ないものね」

「…っんだとおっ！」

また手に力を入れ、互いに胸倉を掴み、睨み合う。

しばらくそのまま向き合っていたが、互いにそれが何の意味も成さない、時間の無駄な行為であることを悟り、ほぼ同時に手を離れた。

ヒューイには逆らう事が出来ない。

逆らえば命はない。

昔、正義感取りの兄弟とその母親が、ヒューイに国政について意見を申し立てた。結果は惨いもので…。

その親子は街の広場で獣にでも食い荒らされたような、見るも無残な姿で発見された。

それがヒューイの仕業であるとは誰も口にしない。

しないが…。皆分かっているのだ。

これは彼の所業であり、また、自分達に「決して逆らうな」と無言で圧力をかけているのだと…。

何をしてもつまらない。こんなところで生きていても仕方ない。

そうは思っていて、やはり「死」は恐ろしいのか…。中途半端な反抗しか出来ない、レイの苛立ち。

美しい人 2

悔しい。

まるで監獄の中にいるかのような生活。

絶対的支配者と、逆らうことの許されない奴隷のような関係。

もう嫌だ。限界だった。

ヒオウに背を向け、歩き出す。

中庭に面した廊下に出て、明るい空を見上げた。美しい晴天から降り注ぐ光は眩しく、思わず目を閉じる。

「つまんねえ…」

ぼつり、と呟く。

このまま、ヒューイの監視のもと生き続けなければならないのか…。

何も見出せないこの世界で。

それならば、いっそ…。

「あいつ、怒らせてやるのかな」

ゆっくり目を開き、振り向く。レイの後をついて来たヒオウが首を傾げる。

「あいつって……ヒューイ？」

「ああ、他に誰がいるんだよ」

太陽にやられた目を数回瞬きさせてから、レイはまた歩き出した。

「…ちよつと、何する気よ?」

青い顔をしてついてくるヒオウ。それを振り返り、レイは不敵な笑みを浮かべる。

「楽しみにしてるよ」

「ちよつとつ、アタシはあなたの死亡報告なんか聞きたくないわよーっ!」

ヒオウの怒鳴り声を無視し、レイは去っていった。

太陽が沈み、三日月が夜空に輝く頃。

レイは石造りの壁をヒョイ、ヒョイとよじ登り、バルコニーに降り立った。

後宮内は無数の監視カメラが作動しているが、死角となっている場所は知り尽くしていた。いつも後宮を抜け出す時に使うルートである。

バルコニーから部屋の中を覗き見る。中にはヒューイの新しい妻、シオがいた。

「おっし」

ニヤリと笑うと、窓に手をかけた。…が、開けるのは躊躇した。ソファに腰掛けるシオの隣には、ヒューイが座っていたのだ。ワイングラスを片手に、シオの美しい髪を優しく撫でている。

(エロジジイが…)

レイは顔をしかめる。

どうやら今日は作戦を実行出来そうにない。諦めて窓から離れようとした、その時。

ヒューイの部下らしき者が現れ、しばらく何かを話しているようだったが、やがてその者と一緒にヒューイも消えた。

思いがけずチャンスが巡ってきた。

レイは静かに窓を開ける。

部屋を出て行ったヒューイを見送ったシオは、まだこちらに背を向けていた。

どうやらレイが侵入してきたことに気付いていない様子。

足音を忍ばせて、シオから三メートルばかり離れたところに立つ。そこでシオが振り返った。

彼女はいるはずのない侵入者に驚いた様子だったが、それがレイであると認識すると、少し安堵の色を浮かべた。

「レイ様…。脅かさないで下さい。どちらからおいでに？ お父様に御用ですか？ でしたらたった今…。」

「いや、用があるのはあんただよ、“母上様”」

妙に含みのある言い回しで、レイはシオに詰め寄る。

「随分と寂しげなご様子。父上に置いていかれて寂しいのであれば、私が慰めてさしあげましようか」

と、銀の髪に手を伸ばす。その一瞬で身の危険を感じたのか、シオはくるりと背を向けた。

「いいえ、結構ですわ。どうぞお引取り下さい」

足早にドアに向かって歩き出したが、それをレイは許さなかった。彼女の細い手首を掴むと、先程シオ達が座っていたソファまで力任せに引っ張った。

「きゃっ」

小さく悲鳴を上げながら、シオはソファに倒される。

美しい人 3

「何を…」

言いかけるシオの上に覆いかぶさり、片方の腕を押さえつけた。

「あんたに恨みはないが…」

抵抗するもつ片方の腕を捕まえると、同じように強く押さえつけた。

「…悪いな」

一応謝罪の言葉を口にしてから、白い首筋に唇を押し当てた。

「やめっ……やめてくださいー！」

悲鳴に近い声で叫ぶシオ。押さえられた両腕はどんなに力を入れてもビクともしない。

レイは右手だけでシオの両手首を押さえると、衣の中へと手を這わせた。

「やめてっ……」

暴れるシオを無理やり押さえつける。

最初は大抵、暴れるものだ。そのうち、諦めて力を抜いてくれる。その方が女達にも優しいのだから…。

「やめてっ、やめっ………」

シオは更に暴れる。
そして……。

「やめ……ろつつつてんだろーが、このガキいつ!」

ドスッ!

一瞬、別人のような声が出たかと思ったたら……。思いつきり股間に蹴りを喰らっていた……。

「っ……」

思わず息が詰まる。

押さえていた手が緩むと、シオは思いつきりその手を振り払い、更に手の甲でレイの頬を殴りつけた。

ドスン、と分厚い絨毯の上に転がる。情けないことに、あまりの痛みにはしばらくそのまま転がっていた。

シオは勢い良くソファから起き上がると、絨毯に這い蹲るレイを見下ろし、舌打ちした。

「こんのクソガキ! 思わずボロが出ちまっただろーが!」

「……?」

恐る恐る顔を上げる。

大きく息をつきながら辺りを伺うが……いるのは目の前にいるシオだけ。他に人は見当たらない。

「あー、くそっ、今までの苦勞が水の泡だ、こんちくしょうっ」

長い銀の髪をかき上げ、そう毒づくのはまぎれもなく、目の前の美しい女性だ。

……おしとやかなイメージだった彼女から出た言葉とはとても思えない。一体何が起きたというのだ……。

混乱していると。

ガタンツ。

天井から物音がした。

次の瞬間。

「ぎゃあああっつっ!!」

バリバリバリッ!!

ドスンッ!!

激しい音と叫び声が同時に響き渡った。

驚いてレイとシオが目線を向けた先には……ヒオウが転がっていた。

「うっ……うっ」

しばらくしてヒオウは起き上がり、乱れた格好をしているシオを視界に入れた。そして、

「ぎゃあああっつっ!!」

まるでムンクの叫びのような顔つきで叫んだ。

「レイいいつつ!! 何てことをーつつ!!」

慌ててシオに近づく。

「ごめんなさいシオさん! これにはふかーい事情があるの! だからどうかヒューイにだけは言わないで頂戴! お願い!」

「…オメー、なんでここにいるんだよ」

まだ痛みで動けないレイが声をかける。

「アンタを止めに来たんじゃないのよ! アンタの単細胞な頭で考えそうなことなんてすぐに分かるわよ! あああ、本当にごめんなさい、許してやってくださいー!」

土下座までして謝るヒオウに、シオは思わず吹き出した。

「ったく、何なんだよお前ら。面白い奴らだなー」

あはははは、と軽快に笑い出すシオに、ヒオウは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

「え? ……え?」

シオとレイを交互に見比べ、困惑するヒオウ。しかしレイにもいまいち何が起きたのか分からなかった。

そこへ騒ぎに気付いた警備員達が駆けつけてきてしまったため、レイとヒオウはその場を立ち去ったが…。
謎だらけの襲撃となってしまった。

「一体、何がどうなってんのよ」

シオの豹変振りに混乱するヒオウに、

「分かんねえ……」

としか答えようがないレイであった。

新しい世界 1

その日の夜から、後宮内には戒厳令が敷かれた。もちろん、レイの起こした騒ぎのせいである。

朝になっても警備兵の警戒は続いている。

そんな中、襲われた本人、シオがレイの部屋を訪ねてきた。警備兵の目を盗んで遊びに来ていたヒオウと二人、ドアの向こうに立っている銀色の髪の美女を見て驚愕する。

そんな二人にっこりと笑いかけるシオ。

「こんにちは。お邪魔してもよろしいかしら？」

初めて会った時のようなおしとやかな雰囲気ですう言っ。

「あ…ああ…」

驚きながらも、レイは頷く。シオは頷くと、後ろに控えている数人のメイドを振り返る。

「ここでお待ちくださいね」

そう指示を出し、自分一人で部屋の中に入ってくる。

パタン、と扉を閉め、スタスタと部屋の中央まで歩いていくと、少し辺りを見回した後、大きく伸びをした。

「あー、肩こった。…ここは監視いないんだろ？」

がらりと態度を変えるシオに、ますます戸惑うレイとヒオウ。

「ああ、いねえよ……」

「そう、良かった。常に気取ってんのも疲れんだよね」

にかっ、と豪快な笑みを見せる。それでもその美しさに変わりは無いが……。

「さっそくだけど……。昨日の話をしに来たんだ」

そう言うと、たちまちヒオウの顔が青ざめた。

「お、お願い、ヒューイにだけは……」

「心配すんなって。絶対言わねえよ。こっちも知られたくないこと知られたからね」

と、レイを見る。

何となくシオの話が読めてきた。

「その性格……隠してんのか？」

「そういうこと。あたしもまだ追い出されたくないんでね。…取り引き、しよつぜ？」

「取り引き？」

「あたしは昨日のことを喋らない。あんたもあたしの本性を喋らな

い。喋ったところでお互いが損するだけだからな。…どっ?

「是非それをお願いします!」

返事をしたのはレイではなくヒオウだった。真剣な眼差しでシオの手を取る。

「あんな酷い目に遭わされたのになんて寛大な! ありがとう! ありがとう! アタシ達も何も喋らないわ。ねっ、レイ?」

ヒオウが振り返ると、レイはフイ、と目を逸らした。

「別に、俺のことは喋ったって構わねえよ…!」

呟くようにそう言う。

「何言ってるんよアンタは!」

ビシッと頭を叩かれるが、レイの表情は変わらなかった。

「バレたらヒューイに殺されるって言ってるじゃないの!」

「別に……そうして欲しいからあの女のとこに行ったんだろ」

「な、何言ってるんよーっ」

少し涙目になるヒオウ。

そんな二人の会話を聞いていたシオは、「ふうん」と呟いた。

「成る程。うわさ通りなんだね。やさぐれ息子にそれをフォローするオカマちゃん」

その言葉に、レイは少しだけムツとし、ヒオウは「ガン」とシヨックを受けた。

「何か事情があるようだけど…。自ら命を捨てるようなことをするのは感心しないな」

シオはキツとレイを睨む。

「何だよ、今度は説教かよ…」

面倒くさそうに溜息をつき、左手で髪をくしゃくしゃにする。そこへ。

コンコン。

部屋のドアをノックされた。

「シオ様、お時間でございます」

ドアの向こうからメイドの音がする。

「分かりました、すぐに行きます」

そうドアの向こうに声をかけると、シオは少し声を低くして言った。

「あんたのことは喋らないよ。代わりにまた遊びに来るから」

「えっ」という顔を見ると、シオはまたニカツと笑った。

「息抜きの場所が欲しかったんだ。じゃあ、またな」

ドアを開け、一礼して去っていくシオは、すでに王妃の気品を醸し出していた。

その後ろ姿を眺め、レイは軽く舌打ちするのであった…。

新しい世界 2

それから、シオは何度かレイの部屋を訊ねてきた。

いつもメイド達と一緒になので、長い間話すことは出来ないが、何度か顔を合わせるうちに、最初に感じていた気まずさや不快感は薄れていった。

女とは思えない口の悪さや態度には少々驚かされたが、慣れれば何と言うことはなく、かえってサバサバした物言いに好感を持てるようになった。

「あゝ、ホント、ここは落ち着くなあ」

と、革張りのソファに足を広げて座り、大きく伸びをするシオ。

「ああ、もう…。少しは女らしくしてちょうだいよ…。目のやり場に困るわ」

いつものようにレイの部屋に来ていたヒオウは、大きくスリットの入ったドレスから覗くシオの白い太腿に、少し顔を赤らめた。

「いいだろ、別に、気にすんなって」

「こっちは気にするのよ」

「何だよ、ヒオウの方が女々しいぞ。あはははは」

この二人の会話を聞いていると、どちらも性別を間違えたのではな

いかと思わせた。それが面白いので、レイは大抵聞き役に回っている。

「それより、あんた達に何かお礼しようと思ってただけだよ…」

「お礼？」

レイとヒオウは口を揃えて聞き返す。

「ああ。いつも世話になってるからな。何がいい考えたんだけど…。あんた達は内緒で外に出られんの？」

「内緒でって…。まあ、別に外出に制限があるわけじゃないけど…」

「まあ、夜中にこっそり街に出たりはするわね」

ヒオウと顔を合わせながらそう言うと、シオは笑って頷いた。

「分かった。今度、“本当の外”に連れてってやるよ。お坊ちゃん達にはちよっと刺激が強いかもしれないけど」

意地悪げな言い方をするので、レイもヒオウも興味をそそられた。

「なあに？ “本当の外”って、どういうこと？」

「うん…。そのままの意味さ。あんた達は知らないことが多いと思うよ」

「何だよ、それ」

だんだん詰め寄ってくる息子たちに、シオは更にいたずらな笑みを浮かべた。

「社会勉強さ。楽しみにしときな」

その日はそれだけ言って帰ってしまった。

“ 本当の外”。

これが、レイの人生を変える場所となる…。

数日後、変装するように言われ、レイとヒオウは黒っぽいフード付きのコートを着せられた。シオも頭にストールを被り、二人の前を歩いていく。

「喋んなよ」

そう忠告されたので、二人は黙ってシオの後を歩いていく。

エレベーターで地下に降り、着いたところは冷たい灰色のコンクリートに囲まれた、薄暗い通路だった。

このドーム内のことは大体知っているが、このような場所があるのは知らなかった。

少しばかり警戒してシオの後をついていくと、やがて行き止まりとなり、その前に黒っぽい服に身を包んだ者が二人、通路の両端に立っていた。

シオとその者達はほぼ同時に軽く会釈をする。そして、黒装束を着た一人が、何やら壁の中に手を入れた。

ガコン。

重い音が響き、目の前を塞いでいた壁が、ゴゴゴゴと音をたてて両脇に開き出した。

「！？」

思わず声を上げそうになるのをこらえ、前方に見えてくる同じように薄暗い通路の奥を見据える。

扉が開ききると、シオは無言で歩き出す。

開いた扉の向こうには、同じく黒装束を纏った者が二人、立っていた。それを横目で確認すると、スタスタと歩いていくシオの後を追った。

少し歩いていくとまた扉があり、しかしそこには番人のような者はおらず、シオが自ら壁に開いた穴に手を入れ、何かのスイッチを押した。

ガコン。

ゴゴゴゴ…。

同じように扉は開く。

奥にはまた薄暗い通路…。

その工程を二度繰り返した後、シオはレイ達を振り返った。

「もう大丈夫だろ。ここから先には人も、監視カメラもないからね」

新しい世界 3

「…一体、どこにつながっているんだ？」

「言っただろう？ 外だよ。……ドームの外さ」

「えっ!？」

レイとヒオウは声を上げる。

「ちょ、ちょっと待って…。外って……放射能で汚染されていて出られないはずよ!？ そんなところに行ったら……」

青い顔で訴えるヒオウに、シオはニヤリと笑う。

「そう教えられて来たんだろう、お前たちは」

「どういふことだ？」

レイは怪訝な顔で訊く。

「そんな怖い顔すんなって。こう言えば少しは安心するか？ ……あたしは、ドームの外から来たんだ」

「…え？」

シオが何を言っているのか理解する前に、ゴゴゴと扉が開き出し、今度は眩しい光が見えてきた。

「お前たちに真実の国の姿を見せてやるよ」

眩しい光に手を翳す。

ほどなく扉は開ききり、目が明るさに慣れてくると、さほど光は強くないことに気付いた。

同じようなコンクリートの壁に囲まれた通路の少し先に、柔らかく光の注いでいる場所がある。

「ついてきな」

シオはまた先頭をきって歩き出す。ヒオウはかなり青い顔をしていて、シオについて行く気にはなれないようだ。

レイは二、三度シオとヒオウを見比べていたが、やがて意を決したかのように小走りに歩き出した。

「レイ、行くのっ!？」

ヒオウが小声で言う。

「ああ…」

レイは短く返事をする、更に足を速めた。その後姿を見て、ヒオウも恐々歩を進めた。

光の漏れていたところは広い階段だった。所々壊れたコンクリートの階段を、慎重に上っていく。

四階分ほど上がってきただろうか…。空気が更に清々しくなり、明かりが強まってきた。……出口のようだ。

建物の外に出ると、強い太陽の光が三人に降り注いだ。

「だ……大丈夫なの？」

ヒオウは深くフードを被り、弱々しく訊いてくる。

「平気さ。まあ、確かに紫外線は強いからな。フードは被っとけよ」

「放射能は……？」

「この辺りは心配ない。人体に影響が出る程残ってないよ。外に出られないっていうのは嘘の情報だからな」

シオは後ろを振り返る。

「ここが、爆心地からどれだけ離れてたと思う？」

シオの問いに、レイは一瞬間を置いた後、答えた。

「……二十キロ」

そう、教育を受けた。その答えに、シオはニッと笑う。

「七十、だ」

「七十……!？」

レイもヒオウも驚きの声を上げる。

「お前らは騙されているんだ。国に……親父に、な」

「……」

俄かには信じがたい話であった。頭の中の整理がつかない。

そんなレイとヒオウの心中を察したのか、シオは笑顔を見せ、また歩き出した。

「まずは見て歩くことだ。それから考えてみな」

歩き出したシオに、レイはゆっくりついていく。

何があるのかは分からない。ただ、自分が知らないことがここにある。それをこの目で確かめなければならぬ……そう、思った。

半壊したり、窓ガラスが飛び散ってしまったビル郡を見上げながら、砂の積もったアスファルトの上を歩いていくと、一際大きな建物が、あり、そこに入っていた。

中に入っただけ、銃を持った男が数人立っていた。

「おっす」

シオがストールを取り、手を挙げる。

「ノア！ 久しぶりだ、元気だったか？ 痛い目に遭っていないだろっな？」

皆、シオの周りに集まってくる。

(…ノア?)

シオが違つ名で呼ばれていることに疑問を持ちながらも、黙ってその様子を窺う。

「平気さ。いい暮らしをさせてもらってるよ。皆も元気かい?」

シオは満面の笑みで人々に語りかけている。

新しい世界 4

「元氣な姿を皆に見せてやれよ。皆お前を心配している」

「ああ、そうするよ」

会話が一段落したところで、シオは振り返る。

「行くよ」

と、奥へ進んでいく。

レイとヒオウは、銃を気にしながらシオの後を追った。

皆、銃を構える仕草は見せないが、警戒されているのが分かる。突き刺さる視線が痛い……。

もしかしたら発砲されるのではないかという恐怖を背中に感じながら、更に奥へ進んでいくと。

広く開けた場所に出て、そこにたくさんの人々が集まっていた。

「あつ、ノアだ!」

一人の小さな子供がその声を上げると、そこにいた人々の視線が一気にこちらへ向いた。

「ノア!」

「ノアだ!」

人々はみんな笑顔でシオの周りに集まってくる。

「よお、皆、元気だったか？」

シオも笑顔で人々に挨拶をする。

その後ろで、レイは人々の姿に目を奪われていた。

手や足のない人達。

目が不自由なのか、杖をつき、人の手を借りてシオのもとへ来ようとする者。

瞳はキラキラと輝いているのに、ガリガリに痩せた子供達…。

健常者もいるが、障害者の方が遥かに多かった。ドームの中では滅多に見ることのなかった、戦争の被害者達。

唯一同じなのは、やはり男の方が圧倒的に多い、ということか……。

しかし男女に関係なく、その一人一人とシオは触れ合っていた。皆、彼女をとても慕っているように見える。

「おばさんはいつものところかい？」

周りを見渡しながらシオが言う。

「ああ、顔を見せておいでよ」

近くに居た中年女性が答える。

「ありがとう」

シオはその場を離れ、もと来た道を引き返していく。レイ達が付いていこうか迷っていると、

「何やってんだ、行くぞ！」

その声をかけられ、慌てて後を追った。

先程入ってきたところまで戻り、逆方向に延びている通路を進んでいく。

たまに人とすれちがいながら歩いていき、たどり着いたところは温室らしいところだった。

むわつとした湿気のある暖かい空気がレイ達を包み込む。

広い室内にはたくさんの植物が栽培されており、そのほとんどは果物や野菜のようだった。

「…水があるのか！ …本物の植物！？」

野菜の葉に触れたレイは驚きの声を上げた。

ドームの中では滅多に見ることのない、生きた植物。その下、根の部分はゆったりと流れる水に浸かっていた。

「こんなに大量の水、どこから…」

「地下から汲み上げているのもあるけど、ほとんどはどこから流れてきているものを使ってる。

昔街のあった方から流れてきてるんだ。もしかしたらそのあたりに人がいるのかもしれないな。放射能の残っているところがあって、全部の地域と連絡がとれてないから、はっきり分からないんだけど

……」

「…この他にも人がいるのか」

「ああ。数は多くないけどね」

今までの情報では、生き残りは全てドームに集められたということだった。……植物にしたって、本物がこんなにあるなんて……。自分の中の知識と現実の差がありすぎて、レイの頭は混乱した。

生きている植物に触れると、まるで夢の中にいるような感覚に襲われた。

造られたものとは違う。

陽の光を受けて輝く姿。鼻をくすぐる甘い香り。触れた感触。水の音。

伝わってくる生命の鼓動……。それを目を閉じて、静かに感じ取る。

「あ、おばちゃん！」

シオの声に、ハツと目をあける。

奥の方に、ふくよかな色黒の中年女性がいるのが見えた。

「…ノアかい！」

女性はパツと目を輝かせ、シオのもとへとやっていった。

「ああ、ああ、ノア、元気だったかい？ 体は大丈夫かい？」

「ああ、元気だよ。おばちゃんも元気だった？」

「もちろんさ！ 元気そう良かった……」

ふと、女性がレイとヒオウに気付く。

「お供をここまで入れるなんて珍しいね…。友達かい？」

「ああ。一応、息子。あまりにも世間知らずなんで連れて来た」

シオがそう言うと、女性の顔がサッと変わった。

「…あの、ヒューイの息子かい」

シオに向けていた暖かいまなざしとはまるで違う、底冷えするような鋭い瞳を向けられる。

新しい世界 5

こんな、異形のものを見るような目で見られたことなんかない。思わず体が固まった。

「そんな怖い顔すんなって。いいヤツラだよ。親父と違ってね。それに…」

シオはチラリとレイを見た。

「レイ、フルネームで自己紹介してみな」

「えっ…?」

いきなりそう言われ、レイは戸惑いながらも、なるべく動揺しているところは見せないよう、キリツとした表情で名乗った。

「レイ＝ルヴァンニール、です…」

名乗ると、女性の顔からは徐々に怒りが消えていった。

「ルヴァンニール?」

「…はい」

苗字に反応している?

何故?

不思議に思ったのも束の間、女性の顔がまたパツと明るくなった。

「ルヴァンニール！ 博士の息子かい！？ そういえば面影がある！ そうかい、博士の息子かい！ 何だ、早く言っておくれよー」

女性はそう言いながらレイの背中をバンバン叩く。
何が何だか分からず、レイはただ叩かれた。

「そうかい……。あなたのお母さんには本当に世話になった。ありがとうね」

女性の言葉の意味がまったく分からない。

レイは母親のしていたことなど、まったく知らない。何をしていたのかのように死んだのかも……。何も知らない。死に顔しか、見たことがないのだから……。

ただ困惑顔で突っ立っていると、シオがそれに気付いた。

「やっぱり、お母さんのしてたこと知らなかったんだな。ドームの外のことも知らないみたいだったし……」

「シオは……。知ってるのか？」

「ああ、子供の頃に世話になったからね。ルヴァンニール博士はこの街の救世主さ」

「救世主……」

「そう。彼女は植物学者で、ここにたくさん知識を授けてくれた。それと同時に、妃という立場を利用して色々物資を送ってくれたり、病人の看護をしてくれたよ。」

ドームにここの存在を黙認されているのは、ここに水と食料が豊富にあるからさ。それも彼女のおかげだ」

そう聞いてもピンとこない。

どんな想いを抱いていいのか、それすら分からない。

複雑な心境でいると、シオが悪戯顔でレイにそつと耳打ちした。

「その救世主の息子に襲われるとは驚きだったけどな」

「あつ、あれは……」

口ごもると、シオは更に唇の端を上げた。

からかわれているのだろうか……。襲い掛かったはいいが、あっさりと殴られて終わった情けない出来事……。それを思い出し、レイは口を尖らせてそつぽを向いた。

と、そこへ二人の少女が駆け込んできた。

「ターラおばさん、大変！」

「産まれそつだよ！　すぐ来て！」

少女達はほぼ同時にそう叫んだ。

「産まれそつって……トモかい!？」

「そつだよ!！」

「早くー!！」

女性　ターラというらしい　は少女達にグイグイ手を引つ張られて温室を出て行く。

「大変だ…」

シオも慌てた様子でターラの後を追う。レイとヒオウは互いに顔を見合わせた。

「…どうする？」

「どうするったって…」

二人は少しの間見つめ合っていたが、やがて同時に走り出した。今はシオの後を付いて行くしかない。

温室を出て階段を上がっていくと、入り口に茶色っぽい布が下げられた部屋がいくつも並んでいた。シオはそのうちの一室に入っている。

ヒオウとともにそつと中を覗いてみると、何人かの女性が慌しく動き回り、その中心に、薄い布の上に横になり、苦しそうにもがいている女性がいた。

「トモ、しつかりするんだよ」

ターラは苦しんでいる女性に声をかけながら、彼女の腰をさすっている。

「布が足りないよ、誰か持ってきておくれ」

ターラがそう言うと、中に居た女性の一人が部屋を飛び出してきた。

レイ達は慌てて避ける。

「お前ら何やってんだ、邪魔だぞ！」

シオに怒鳴られる。

「いっ、いっめん…」

新しい世界 6

謝っている途中で、トモが更に苦しみ出した。すると、ターラがレイ達を手招きした。

「お前たち、おいで！」

そう言われ、戸惑いながらも中に入る。

「レイはこの子の手を握ってて。あんたは……」

「ヒオウだよ」

横からシオがヒオウの名を教える。

「ヒオウ、あんたはこれで扇いでやって」

言われるままにレイはトモの手を握り、ヒオウはダンボールのような紙で彼女の真っ赤になった顔に風を送った。

「リップルは？」

シオがターラに訊く。

「今日はE地区の見回りのはずだ。連絡はいったと思うけど……まだかねえ」

ターラは渋い顔をする。どうやらトモの夫がここにはいないらしい。

「ああ……そろそろだね。トモ、いいよ、いきんでみて！」

ターラがそう言うと、トモは更に真っ赤な顔をしてお腹に力を入れ始めた。

握られた手が千切れるほど痛い。

こんな細い腕の、どこにこんな力が……。レイは驚き、トモを見つめた。

トモの力がフツと緩み、レイの手は痛みから解放される。大きく息をつくトモの口からは、ヒューヒュー、と不思議な音がした。

なんだろう、そう思っていると、またトモの手に力が入った。思わずレイにも力が入る。

その時、彼女の喉にある大きな傷に気付いた。

また力が抜けて、「ヒューヒュー」と苦しそうな息遣いが聞こえてくる。

(声……出ないのか……)

おそらく声帯を傷つけられたのだろう。

「はい、トモ、もう少しだよ！」

また手に力が入る。

レイは無意識のうちにトモと一緒にになって体に入力を入れていた。

一緒に力を入れて、抜いて、また力を入れて。

何回かそれを繰り返して、一番強く手を握られた瞬間。赤ん坊が飛び出してきたのが見えた。

「やった……」

思わずもつ片方の手もトモの手に重ね、細く小さな手を包み込んだ。すぐに泣き声が聞こえてきて、部屋中に歓声が響き渡った。

真っ赤でしわくぢやな赤ん坊を胸に抱き、疲れた表情をしながらも愛しそうに微笑んでいるトモは、とても輝いて見えた。

命の誕生。

それを目の当たりにしたレイの心は震えていた。

眩しすぎて。

綺麗すぎて。

愛しさに溢れていて…。

トモはレイを見ると、優しく微笑みかけた。

口から漏れ出る風の音が、「ありがとう」と言っているように聞こえ、更に心は震えるのであった。

嬉しくて。

涙が出そうになった。

たまらず部屋の外に出ると、そこではヒオウが壁にもたれかかり、放心状態になっていた。

「…おい？」

声をかけると、目線だけをこちらに向け、また正面を向いた。

「…凄いわよね…」

それだけ、ぼつりと眩く。

「ああ…」

レイもそれだけ言って、同じように壁に持たれなかった。

出産の報せを聞いたのか、部屋の周りにはたくさんの方が集まってきた。

人々の嬉しそうな顔、小さな窓から漏れる明るい日差し、澄み渡る青空…。何もかもが眩しく感じられた。

「お疲れさん」

ポン、と肩を叩かれ振り返ると、少し涙ぐんだシオが立っていた。

「おかげで無事に産まれたよ。…最近、死産が続いていたから、皆大喜びさ。しかも女の子！」

「へえ…。良かったな」

「へへっ、ありがとう」

シオの笑顔。皆の笑顔。

本当に良かった…。そう、心から思う。

「これから病棟にいる人達にも報せて来るから…。お前達も来いよ」

「ああ」

レイ、ヒオウは素直にシオの後についていった。

まさか、あの感動の後にこんな光景を見ることがになるとは思いもせず…。

新しい世界 7

そこは、地下だった。上の方の窓から明かりが少し入ってくるだけで、大分薄暗い。

地下ということもあってか、空気が淀み、僅かながら異臭が漂っていた。

「お前らには刺激が強いかもしれないけど…。逃げんなよ」

扉の前で、シオがそう言った。

どういう意味なのかは、すぐに分かった。

両開きの扉を開けた瞬間、何とも言えない悪臭が鼻をついた。

「何、この匂い…」

ヒオウも顔をしかめている。しかし、その奥には想像を絶する光景が待っていた。

割と広い空間の中に、天井から僅かに注ぐ柔らかな太陽の光。

その下には、無数の塊が蠢いていた。その塊が何なのか、初めは分からなかった。

しかし良く目を凝らして見てみると…。

それは人であった。

全身が包帯に包まれ、その包帯も血が滲んでいるのか、赤黒く染まっている。

何人もの苦しそうな息遣いやうめき声が重なり、部屋中に低く響いていた。

その中に、その者達を看病しているらしい人が三人ほどいて、シオ

はその者達に声をかける。

すると、その三人は喜びの表情を浮かべた後、部屋を出て行った。
…おそらく、トモの出産の報せを聞いたのだろう…。

残されたシオは、代わりに病人の前に跪き、包帯の交換を始めた。
解かれたその下に現れたのは、赤黒くただれた皮膚。所々血も滲み、
ジクジク膿んでいた。

見るだけで気分が悪くなる光景だが、その上酷い悪臭がし、衛生環境も良くないのか、小さな虫が床の上や患者の体を這い回っていた。
目を逸らしても、同じような患者が視界に入ってくるだけ。どこにも逃げ場はない。

ふと、患者の一人と目が合った。

包帯の隙間から覗く目は、眼球が落ちるのではないかと思うほど大きく見開かれていた。

あまりの恐ろしさに目を逸らせずにいると、患者が苦しそうに声を発した。

「…恐ろしいか…」

擦れてはつきりとは聞き取れないが、確かにそう言っている。

「私達の姿は……恐ろしいか……」

視点が定まらないのか、眼球がピクピク動いている。それでも、懸命にレイを見つめていた。

身体の全てがその目に支配されそうな感覚。

恐ろしくて息をするのも忘れた。
ただ、小さく首を振るのが精一杯だった。

「ごめんな……痛いだろ？」

そう優しく語り掛けるシオの声が耳に響く。

「もうすぐ薬が届くからな。そうしたら少しは楽になるよ」

今にも崩れ落ちそうなただれた肌に触れる彼女。

信じられなかった。

この光景を見て物怖じするどころか、あんなに優しい顔で触れられることが。

『逃げんなよ』

そのシオの言葉がなければ、きっと外に逃げ出している。

背中や額にじんわりと汗を滲ませ、震えてくる手足をなんとか押さえ込むので精一杯だった…。

小一時間程で先程の看病人達が戻ってきて、レイ達はやっと部屋の外に出ることが出来た。

「……ごめんなさい」

ヒオウは顔を真っ青にして、階段を駆け上がっていく。

レイも、階段を上がりきつたところで座り込み、大きく息を吐いた。

反動で肺に雪崩れ込んでくる大量の空気はとても新鮮に感じられ、

思わず涙ぐんだ。

「良く逃げなかったな」

頭上からシオの声。

「何も知らないお坊ちゃんにはキツイと思っただけど…。お前もヒオウも偉かったよ」

誉められているのだろうか、まったくそんな気はしなかった。

皮膚病に苦しむ患者を目の前にして、恐怖や嫌悪感しか抱けなかった自分が、酷く情けなく、小さい人間に思えた。

「一人にしようとして」

小さくそう呟くと、シオは「ああ」と軽く返事をし、立ち去った。

それからしばらくそこに座っていたが、何となく立ち上がり、ブラリと歩き出した。

建物の入り口でキビキビと動いている見張りの者達。

広々とした室内で元気に走り回る子供達。

裁縫や食事の支度をしながら穏やかに会話を交わす大人達……。

155

しばらくその光景を壁にもたれながら眺める。

その後、また歩き出し、階段を上り始めた。

上りきって屋上に出ると、眩しい日差しに目がくらみ、思わず手を翳した。

目を細めて遠くの景色を眺める。

ここよりも少し低い建物が連なり、その屋上にはチラホラと人の姿が見えた。

銃を持っているのが見えたので、おそらくは見張りの者達なのだろう。

こんなに警戒するのは、何か攻めてくるから？

しかし、砂漠の途中には放射能が未だ残る地域があるらしい。行き

来は困難だ。

では……。

レイの目は、建物の向こうに見える透明なドームを捉えた。黙認しているとは言っても、友好的な関係でもない。そういうことか……。

（何も……知らなかったんだな）

ここは、ドームの中の居住区とは反対方向にあるため、今までこの存在に気付かないでいたのだろう。植えつけられる知識に疑問も持たず、この国の現状を知ろうともしなかったことが最大の原因だが。

ひとつ溜息をついて、ドームの向こうの景色に目をやる。

ドームからも見える景色……砂の平原。

この砂の向こうには何も無いのだと思っていた。けれど、僅かにではあるが、人がいるらしい……。

その人々も、ここにいる人々のように暮らしているのだろうか……。貧しく、病気に苦しみ、それでも力強く生きようとしている。

（俺は……何をしていたんだろう……）

真上にあった太陽が地平線近くに傾くまで、レイはそこに突っ立っていた。

「ここにいたのか」

ふと声をかけられ振り向くと、シオが隣に立っていた。

「もうすぐ帰るよ」

「ああ……」

そう返事を返したまま動こうとしないレイ。

「どうした？」

その問いにもしばらく答えず、ただ前を見据えていた。そして、ぽつりと呟く。

「また……連れて来てくれるか？」

「ん？ ああ、いいよ。あなたなら皆大歓迎さ」

「……博士の息子だから……か」

今までその存在を疎ましく思いながらも、どこか思い焦がれていた母親。

今は、どんな想いを抱いていいのかわからないけれど……。自分のこれからも含めて、ここで真実を見極めていけば、答えが出るのかもしれない……。

「ヒオウも待ってるし、行くぞ」

ポン、とレイの背中を叩き、シオは歩き出す。

「あ、そういえば……」

レイはある疑問を思い出す。

「ここではシオ、『ノア』って呼ばれてるだろう？ 何で？」

「あ？ ああ……まあ、ノアが本名なんだ」

シオは少し言葉を濁す。

「ふーん……。何で偽名使ってるの？」

「まあ……。色々あってな」

あまり答えたくないようだったので、それ以上追求はしなかった。ただ、こう言った。

「俺が『ノア』って呼ぶのは駄目？」

その言葉に、シオは振り返る。

「んー……。まあ、ここでならいいよ。ドーム内では『シオ』な」

「分かった」

理由は分からないけれど、レイはそれを了承した。

ここには、真実がある。

まだ知らないことがたくさん眠っている。

それを知っていくことで、道が開けるような気がした。

自分のこれから進むべき道。唯一の母親との接点。父親の本当の姿。

そして、シオのことも…。

愛しさ溢れて 1

約束通り、シオ ノアは、レイとヒオウを度々ドームの外に連れ出してくれた。

砂埃が舞い、太陽の光も突き刺さるように痛い。

オゾン層が破壊されているため紫外線が強く、帽子や外套は欠かせない。

僅かに残る放射能の影響が出ないように、外出した後は必ずシャワーを浴びなければならない。こうすることで、浴びた放射能が洗い流されるのだという。

決して、生物に優しい環境ではない。

だが……。

レイには、全てが暖かく感じられていた。

少なくとも……ドームにいた頃よりはよほど「生」を感じていた。

恵まれているとは言えないこの場所で、皆、生き生きしていた。そんな輝く人々を見ていると心が癒されるのだった。

人々を眺めた後に訪れるのは、決まって植物園。

レイの母が作ったという緑に溢れたこの施設……。

日の光を浴びて輝く緑。サラサラと心地よい音を響かせる水の流れ。静かに息をし、それらを感じ取った。

寝転んで何時間もそこにいた。

何度もそうしているうちに……何か、分かったような気がした。

今、自分は何をすべきなのか。
何が出来るのかを…。

「おや、またここにいたのかい」

声をかけてきたのはターラ。ノアの叔母であり、この植物園の管理者だ。

「ああ…」

植物の隙間から見える青空から視線を逸らさずに、返事をする。

「落ち着くだろうか？ あんたのお母さんの場所だからねえ」

ターラはそう言いながら、野菜の収穫を始める。
サクサクと音がするので、レイはそちらに目をやった。

「それは……この？ ドームの？」

「これはあたし達の方。ドームへは来週運ぶからね」

手を休めることなく、ターラは大きな葉を摘んでいく。

「…手伝う」

レイは起き上がり、ターラに習って葉を摘んだ。

「嬉しいねえ…。博士の息子とこうして肩を並べてここにいれるなんて」

ターラは本当に嬉しそうに顔を綻ばせる。

それはターラばかりではない。ここの人々は皆、レイに良くしてくれた。それは偉大なる母のおかげと、最初は嫌だったけれど…。今は、素直に嬉しいと感じる事が出来る。

「これで、ノアが帰ってきてくれたら、もっと嬉しいんだけどねえ…」

「え…」

「あのヒューイのところにいるなんて…惨すぎて」

「……」

それは、レイが不思議に思っていたことだった。

何故、ノアはヒューイのところにいるのだろう…。その疑問に、ターラは悲しげに答えてくれた。

「すべて、あたし達のためなんだよ……」

レイの母の死後、ここ、スラムとドームを繋ぐ人物がいなくなってしまう。

それまで互いに援助しあっていた関係は崩れ、双方緊迫した情勢が続いた。

それを阻止しようと立ち上がったのがノア。

自分がヒューイの元に行く代わりに、元の間係を続けていこうと。

関係の改善を望んでいたのか、ヒューイもそれに応え、「結婚」という形が取られたのだ…。

それを聞いたレイは、何かをしなければならぬ、という事を具体的に行動に移さなければならぬと思った。

ここの人々のために…。

自分の行くべき道を照らしてくれたノアの為に。

愛しさ溢れて 2

まずは、与えられても使い道が無く、たまりに貯まっていたお小遣いを援助物資に充てることにした。

ヒオウのお金を合わせると相当な金額になり、当分の間不自由しない物資を贈る事が出来た。

少しずつではあるが、人々と会話を交わし、子供達の遊び相手になつたりした。

まだ地下に居る病人の世話は怖くて出来ないが、衛生的なところに居て欲しいと、掃除等はするようにした。

そして、一番やりたいと思ったこと…。

レイは、母が生前勤めていたという研究所を訪れた。

他の研究員達はレイの登場に驚いていたようだったが、すぐに受け入れ態勢を整えてくれた。

母が自分を放つてまで没頭していたという緑を広げる研究。

憎いという気持ちももちろんあった。

しかし、それほどまでに母を夢中にさせたものを見てみたい……。

そういう気持ちも強かった。

研究員達に指導を受けながら、母のしてきたことを辿る毎日が続いた…。

「あの子、変わったわ」

ヒオウはノアにそう漏らした。

「貴女のおかげね……」

「そうかな。アイツのお母さんは、素直で優しい子だって言ってたけど。色々あつて捻くれたみたいだけど、元はいい子なんだろう」

「それでも、取り戻したのは貴女のおかげよ。…ありがとう」

「よせよ……。こっちこそ、色々やっつて貰ってありがとう」

ノアは、少し照れたように笑いながら言った。

「まだまだだよ。今こちらで提供できる抗癌剤では、いたずらに寿命を延ばすだけで、その苦しみを緩和させることが出来ない。医療チームに頼んで、研究を急がせてはいるけど……」

皮膚病患者が減る一方、癌患者が増え始めていた。

「…ありがとう」

微笑みながら笑うノア。そんな彼女を見て、ヒオウは思う。

「ねえ……。援助ならアタシ達ができるから……。貴女はヒューイの元を去った方がいいわ」

ノアが辛い思いをすることは無い……。そう伝えたかった。だが、ノアは笑って言う。

「直接橋渡しの出来る人間が必要だと思っただ。それはあんた達では役不足」

ノアはヒオウの額を小突く。

お姉さんにかかわれた感のあるヒオウは、少し口を尖らせた。

「でも…」

「大丈夫だって！ あんたに心配して貰うほようなへまはしないから」

明るくそう言うノアに、ヒオウは何故か不安を覚えずにはいられなかった…。

研究室にある植物の観察を終え、パソコンのモニターに向かったレイ。

「…あれ？」

いつもの画面とは違うものが出ていた。

「…『NOAH』プロジェクト？」

『ノア』という言葉に敏感に反応する。

「九十七年…二十一年前か。発案者ディージェールヴァンニール…。母さん…？」

母が発案したプロジェクトならば、緑に関するものだろうか…。操作してみるが、ロックがかかっているらしく、その先は見れなかった。

誰かに聞けば分かるのだろうか…。レイは研究室を出た。

長い廊下の先にあるラウンジに、いつも指導してくれている研究員二人の姿を見つけ、足早に近づく。

「…とは思わなかったな…」

「まったくだ…」

何の会話だろう、と足を止める。

「正直驚いているよ。まさか、ディージェ様があそこまで毛嫌いしていた息子が、同じ道に進むなんて」

「ああ。彼女、言ってただろう。全てはヒューイ様に取り入れるため…。息子なんか本当は欲しくなかったって…」

「それを思い出すと、レイ様が哀れでな…」

レイは後ずさりして、壁に背を預けた。

(なんだって…?)

心臓が、どくと波打った。

「産んでから、一度も会いに行っていないそうじゃないか…。彼女の功績は凄いけど、子供はかわいそうだよなあ」

研究員の自分を哀れむ台詞が、容赦なく身体を貫いた。
一気に冷たくなっていく手足。それを無理やり動かしてそこから立ち去った。

いつも母などどうでもいいと思っていた。
けれども、その言葉はショックだった。

憎んでいると思っていた。最初からいないものだと思い込んでいた。
それでも、いつも心のどこかで追い求めていた。

あの植物達を見た時に、もしかしたら母も同じ気持ちでいてくれた
のではないかと期待して、追い求めて、始めた研究。
ノアや皆のため、というのは建て前。やはり一番は自分のためにや
ったこと。

(馬鹿みてえ)

そんな自分が悲しくて堪らなかった…。

「ちくしょうっ!!」

目に留まった白い鳥の置物を乱暴に掴み、床に叩き付けた。
ガシャアン! と派手な音をたててそれは粉々に砕け散る。
女達の悲鳴が上がる。その中心に……ノアがいた。

「…レイ様、どうなさいました?」

付き人を従えているので、おしとやかモードのノア。
そんな彼女を一瞥すると、レイは走り出した。

「レイ様!？」

ノアの呼び止める声があるが、構わず走った。

しばらく走っていくと、また声がした。

「レイ！ どうしたんだ！」

いつもの口調。

ドームの中でいつもの姿を晒すのは不味いのではないのか……。しかし今のレイにはそれを気遣う余裕はなかった。

「レイっ」

やっとのことでレイを捕まえたノアは、暴れる彼の両肩を強く抑えつけた。

「おい、どうした？ 何かうまくいかないことでもあったのか？」

白衣姿のレイを見て、ノアはそう言った。

「何でもねえよ！」

「何でもなくはないだろ？ どうしたんだ」

「うるせえな、放っとけよ！」

「放っておけるか！」

ノアの手に入力が入る。指が肩に食い込んで、その痛みでレイは少し冷静になる。

「…どうでもいいんだ…」

静かに、言う。

「え？」

「俺なんか…。どうでもいいんだよ…」

首を項垂れるレイ。その気持ちを量りかねて、ノアは怪訝そうに眉をひそめた。

「何だよ…。話してみろよ」

ノアは肩を掴む手の力を緩め、レイの顔を覗き込む。

レイは、ポツリ、ポツリと話し始めた。

先程の研究員達の会話。

今まで抱いていた母親への気持ち。

赤裸々に、とまではいかないが、気持ちが伝わるには十分だった。

話を聞き終えたノアは、大きく嘆息した。

「馬鹿だなあ…。そんなん、信じるなって」

ポンポン、と頭を叩かれる。

「あなたのお母さんは、あたしにはこう言ってた。自分には息子が一人いる。会うことは出来ないけれど、遠くから見守ってるんだって。本当は今すぐにも会いに行つて、この手に抱きしめたいって

を」

ノアの言葉が信じられず、顔を強張らせたまましていると、ふわりと包み込まれた。

「こんな風にね…。抱きしめたかったって」

「……」

包み込まれた暖かさに、強張っていた顔も、身体も、みるみる解かされていく気がした。

「大丈夫、あなたは愛されてた。ただ、直接じゃないから伝わらなかつたんだね…」

「…本当に…?」

「ああ」

不思議なもので、今までの苛立ちは嘘のように消えていた。

まだそれを信じきれたわけではない。もしかしたらノアの嘘かもしれない。それでも、優しい言葉はレイを救ってくれた…。

自室に帰り、今日の出来事を反芻する。

自分はまだまだ子供なんだなと思うのと同時に、いつも毅然とし、道を開いてくれるノアに感謝の念を抱いた。

愛しさ溢れて 4

あんな風に強くいられたら…。

そう、思う。

徐に立ち上がると、一息ついて、外へと走り出した。今日中にもう一度ノアに会って、礼を言いたかった。

監視に引つかからないルートで、ノアの部屋を目指す。

(もう寝てるかな…)

遅い時間だったため、それも考えられた。その時は明日にするか…。そんなことを考えながら壁をよじ登り、ノアの部屋のバルコニーの上に出た。

飛び降りようとする、下のバルコニーにノアの姿を発見した。手摺りに両手を置き、暗い外を眺めている。

「ノア」

小声で名を呼んでから、レイはバルコニーに飛び降りる。

「レイ!?!」

ノアは振り返り、降りてきたレイに驚く。

「あんだ、こんな時間に何して…!」

そう言いながら、ノアは手の甲で頬を拭う。
拭いきれなかった涙が、部屋明かりに反射して煌いた。

(え…?)

ドキツとした。

「泣いてた…のか？」

「違う違う、欠伸しただけ」

ノアはヒラヒラと手を振った。

「そんな…」

「さあ、もう子供は寝る時間だよ、帰った、帰った」

「ノア！」

子供扱いされて少しムツとし、部屋に戻ろうとするノアの手を掴んで引き寄せた。

その瞬間、飛び込んだきたもの。

白い首筋にくつきりと残る、赤い印…。

レイの目線の先にあるものに気付いたノアは、さり気なく首に手をやり、レイから隠した。

「早く帰りな。また見つかったら大変だぞ」

背を向け、そう言う声は…。心なしか、震えていた。

「帰れるかよ…。だって、泣いてたんだろ？」

「泣いてないって」

「嘘だ」

「本当だよ」

「嘘だ！」

「ホントだって」

「ノア！」

強く名前を呼ぶと、ノアはキッとレイを睨んだ。

「その名前で呼ぶな！」

大きな声に少し驚く。それに気づき、ノアは小さく首を横に振る。

「…ごめん。ここでは、その名前は呼ぶなって言っただろ？ 二二二
では……シオだ」

「…何故？」

シオとノア。

二つの名前に拘る理由は？

ノアは俯き加減に、銀の髪を夜風に揺らしながら答えた。

「シオは…。ヒューイに大人しく付き従う、静かだけど強い人間…。
そういう設定」

「設定…？」

「ノアでは…。あたしそのままでは、弱さが出るから…。だからシオ
という強い人間に成り切ったの。あのジジイと対等に渡り合う為
に、弱いノアは置いてきたんだ」

溜息混じりにそう言うノア。

「ははっ、馬鹿みたいだろ？」

自嘲気味に笑う彼女からは、いつもの輝かしい青空のような明るさは
感じられなかった。

（ああ…俺は…）

レイは、そつと、ノアを後ろから抱きしめた。

「こら、何してんだ」

そう窘める声があるが…。それも力ないもので、レイは更に強く抱
きしめた。

（何で、強いなんて思ったんだろう…）

ノアの強さに憧れていた。

けれども…。

人はいつでも強くいられるわけではないのだ。そんな当たり前のこ

とを、今更ながら実感した。

人は弱いから強さに惹かれる。
弱いから、こうして触れ合う…。

「俺じゃ、駄目…?」

答えは解りきっていた。それでも、そう言わずにはいられなかった。
ノアは少し間を開けて、ゆっくりと言った。

「駄目…。あなたには頼らない」

思っていた通りの答え。

年下で、頼りなくて、迷惑をかけてばかりの自分では、やはり彼女の救いにはなれないのか…。

悔しかった。

惨めだった。

何も出来ない自分が。

ノアの肩に、首筋と同じような赤い痕があるのを見つける。このよ
うなものが体中に残されているのかと思うとザワザワした。

この痕を付けた者に対する怒りが込み上げる。

衝動のままに、その痕に新たな印を刻み付けた。

ノアはその軽い痛みに思わずレイの腕を掴んだが…。抗う事はしな
かった。

ゆっくりと目を閉じて、レイの腕を掴む手を緩める。

「…レイなら、良かったのにね…」

思わず出た本音に、ノア自身が驚く。
そんなことは言っても、思っても仕方ない事なのだ。それならば、
口にせず、この胸にしまっておいた方がいい…。

でも…。

ノアの静かな叫びは、レイを動かした。
もう二度と離してやらない…。そんな想いが腕から伝わってきた。
そしてノアはその力強さを受け入れる。
それが自分の弱さだと知りながら。

しん、と静まり返った広い室内。

大きな窓から差し込む橙の光が、僅かに細い線を作っているところから少し離れて、白髪混じりの短髪の男が、自分の顎鬚を撫でながら立っていた。

「やっと興味を示したか」

「はい」

男 ヒューイは、鋭い瞳で部屋の入り口に立つ中年の男を振り返った。

「それで、何か引き出せそうか？」

「いえ、やはり何もご存知でないようです。鍵を開けることは出来ませんでした。過去、デージ様とレイ様の接点があったことも確認されておりませんから、恐らく本当に何も知らないのだと思います」

その報告に、ヒューイはチツと舌打ちした。

「あの女め……」

ヒューイは親指の爪を強く噛んだ。

そして、大きな執務机の上に無造作に置かれていた写真を手にした。そこには、生まれたばかりの子供を抱いて、幸せそうに笑っている女性が写っていた。

赤みのかかった茶色の長い髪の女性は、どこかレイに似ている。

「さて……どこに隠したのだ？ もう随分待ったのだがね……」

写真をヒラヒラと弄んだ後、それをまた机の上に戻す。

ヒュツと空気が音を立てる。

ダン！

小さなナイフが、写真に写っている子供の顔に突き刺さった。

「さあ、亡者となって出て来い。さもないと……お前の大事なものが、壊れることになるぞ？ 最も……そんな姿で現れるとは思わんがね……」

自嘲気味に笑みを漏らすと、顔を上げた。

「デイージェエは例のプロジェクトに関するもの、すべてにロックをかけて死んだ。接点がなかったとはいえ、息子には何かしら残していると思っただが……」

「私どももそう考えております。しかし、今の所、何も出てきません……」

「スラムも調べたのであろうな？」

「もちろんです。しかし、あそこにも何もありません」

「ではどこにあるというのだ……」

あれ程のものをただ単に鍵をかけただけで命を落とすはずはない。きっと、破壊するためのプログラムがあるはずなのだ。同時に、起動させるためのプログラムも。

それは開発者であるディージェの息子、レイに受け継がれているはずだとヒューイは確信していた。

だからこそ、息子たちの中でも一番の待遇を与えてきたのだ。このドームの中で、おとなしくしてもらうために。

しかし、研究チームに入ったレイは、ディージェのプロジェクトを知っても、何らかの行動を起こす事はなかった。本当に何も知らないと見ていい。

では、起動プログラムは、どこに　。

「レイ様の指紋、声紋や遺伝子でも動きません。他に考えられるとしたら…」

「……直接触らせてみるか？」

「はい。ですが、それはすでにレイ様が子供の頃に検証済みです。あの時もまったく反応はありませんでした。……それでも、やってみる価値はあるかと」

「では、うまく誘き出せ」

「承知いたしました。それと、もう一つ、報告がございます」

「なんだ」

中年の男は、そっと、ヒューイに耳打ちした。

ヒューイはしばらく黙っていた。
そして、徐に笑いを堪えきれず、腹を抱えながら歩き出した。

「奴にそんな度胸があったとは！ はっはっはっ、愉快だ！ こんなに愉快なのは久しぶりだ！」

気でも違えたのかと思うくらい、ヒューイは笑い続けた。
そして。

鋭い瞳をキラリと光らせた。

「相応の償いをしてもらおうではないか。ククク、面白くなってきた。これで作業も捗るな」

そう語る瞳は、長い間仕えてきた部下でも背筋が凍りつくほど恐ろしいものだった。

「うん…」

レイはパソコンの前に座り、何度目かの溜息をついた。

「やっぱり分かんねえ…」

目の前にあるモニターに映っているのは、母であるデイジーが残したプロジェクトのものだった。

先日見つけてから指導者に聞いたり、自分で開けようと試みたが…
…一向に開く気配はなかった。

誰に聞いても分からない、謎のプロジェクト。

緑を広げる研究をしていた母が残したものだから、それに関するものだと思うのだが、研究室の誰も知らないというのが引っかけた。

無理にでも開けてやる、と意気込んでみだが 一向に開かない。フーツと息を吐き、上半身を後ろに倒して伸びをした。すると。

「お仕事頑張ってるっ？」

思い切り愛想のいい顔でヒオウが見下ろしていた。

「…ああ…」

ヒオウの登場に少々驚きつつ、レイは姿勢を戻した。

「お前いつも気配ねえんだよ。脅かすな」

「あら、お仕事の邪魔しちゃ悪いと思って、しのび足で来たのは優しいお兄ちゃん心なのに」

「うげえ〜」

レイはわざとらしく顔をしかめて見せた。

しかしそれもいつものことなので、ヒオウも気にすることなく、レイの隣に座った。

「ああ、これ？ レイのお母さんのヤツで分らないのがあるって
言ってたの」

そう言いながらパソコンのモニターを覗き込む。

「そう。何を入力しても受け付けない。いい加減疲れた。……まあ、
意地でも開けてやるけどな」

前向きな発言をするレイに、ヒオウはニマーっと笑った。

「最近良い子になったわねえ。それもこれも“あの人”のせいかし
ら〜」

「なっ…」

レイは真っ赤になって反論しようとしたが…。悔しそうにしながら
も言葉を飲み込んだ。

「ま、まあ、そうかもな」

「あらあら」

ヒオウは更にニマニマする。

「良い傾向ね。本来のあなたの性格が戻ってきたんじゃない？」

「…そんなこと、ねえけど…」

「んふふ。……でも、ね」

ヒオウは視線を動かし、監視カメラの位置を確認する。監視している者達は優秀だ。声が聞こえなくても口の動きだけで何を話したのか分かってしまう。カメラから顔を隠し、小さな声で囁いた。

「あんたがあの人を好きになるのは構わない。けれど、絶対にヒューイに知られては駄目よ。痛い目に合わされるのはあんなだけじゃないんだから」

レイは僅かにヒオウに視線を向けた後、小さく頷いた。解っている。

きっと彼女も、十分にそれを理解している。

一度だけ触れ合ったあの夜以来、再び肌を重ねる事はしていない。けれど、心の奥でしつかりと結びついていた。それはもしかしたら錯覚かもしれないけれど……。しかし、ノアも同じ気持ちでいると確信していた。

彼女をヒューイの元へ行かせるのは本当に辛いけれど。割り切るように努力している。

それは仕方のないこと。

ノアには、ノアの事情があるのだから。

彼女は辛い顔などしない。

だから、レイも苦しみに耐えた。

恐らく、ヒューイがこの国で権力を失うまでこの状態は続く。それまで、誰にも知られてはいけない。この想いは隠し通さねばならない。

ノアと、二人で生きていくために。

「本当に気をつけてね。あんたには……あんた達には幸せになって欲しいわ」

真剣な顔で言うヒオウを、レイは軽く叩いた。

「っーか、オメーもだろ？」

ニツと笑うレイに、ヒオウは穏やかに笑った。

こんなに穏やかな時間が来るとは思ってもみなかった。

周りに対する気持ちを変えただけで景色が違って見えることを、レイは痛感していた。

ノアに出会えたことを、心から感謝している…。

「明日、スラムに行く日よね。皆元気かしら」

「ああ。トモの息子も大きくなっただろうな」

「出産に立ち会ったの、つい昨日のことみたいなのにな」

カッン、カッン。

足音がして、二人は振り返った。

そこには、レイと同じ白衣を着た男が二人、立っていた。

「お話中失礼します。レイ様に是非ご覧になっていたいただきましたものがございまして」

「何だ？」

「デージェ様の残された遺品です」

「母さんの…？」

一瞬だけ考えたが、レイはすぐに立ち上がった。

「分かった。すぐ行く」

と、パソコンの電源を落とす。

「じゃあな、ヒオウ」

「はあい」

ヒオウは軽く手を振った。

それが、“レイ”の見たヒオウの最後の姿だった…。

「こちらです」

ゴウン、と低い音をたて、大きな灰色の自動扉が開く。足を踏み入れるとカツン、カツンと靴音が鳴った。

「ここは…？」

レイは辺りをグルッと眺めた。

直径百メートルはあるかと思われる広い円形状の内部は、全面冷たい灰色で覆われていた。温度も湿度も低く、ブルツと身震いする。

所々、赤や青の小さな光が漏れている。それが、ずっと下まで続いてきた。下を覗き込んでみたが、底は暗くて何も見えない。かなり深いと見た。

「ここは、ディージェ様の研究されていた、もう一つのもので眠っている場所です」

「…一体何だ？」

「…こちらに」

研究員は壁伝いにある狭い階段を下りていく。レイもそれに続いた。

しばらく下りていくと踊り場があり、壁側には大きな窓があった。中には白い壁に覆われた明るい部屋が見える。何かの研究室のようだ。

研究員はその部屋には入らず、更に下へと降りていった。

ずっと降りていくと、どうやら最下層まで降りてきたらしく、広く平らな床がどこまでも広がっていた。

周りには灰色のコンピュータが並んでいるが、動いている気配はない。

「何だ、ここ……」

正面に数段の階段があり、その上には、直径3メートル程の円盤が

見えた。

「レイ様、小さい頃に一度おいでいただいているのですよ。……覚えておられませんか」

「いや……」

まったくそんな記憶はない。

それもそのはず。その記憶は催眠術によって封じ込められていたのだ……。

研究員は咳払いをしてから、階段を上がった。

「これが、デイージエ様の残された物です」

そう言われ、レイも階段を上がる。ただ丸い、黒っぽい円盤。

「これが？」

一体、これは何だ？

それに、母の研究していたもう一つのものとは？

そんな疑問を頭の中で並べながら、恐る恐る円盤の中に足を踏み入れた。

「母さんが研究してたことって、何なんだ？ 緑を広げる研究の他に、機械でも開発してたのか？」

研究員達は、ジツとレイを見守った。

何も起こらない。

彼らの期待していたことは、何も起こらなかった。そこへ、やってきたのは。

「当たらずも遠からずだな」

その声に、レイは勢い良く振り返った。
ヒューイだ。

今最も顔を見たくない相手の登場に、体中が怒りに震えるのを感じた。

「何であんたがここに…」

「いては悪いかね？　ここは愛しい妻の研究所だ」

「っ」

レイは殴りたい衝動をグツと堪えた。

「これはディージェエの最も大切にしていたものだ。お前に譲ろうと思っただけ」

「…それはどうも」

両手に握りこぶしを作り必死に怒りを抑えるレイを、白髪混じりの顎鬚を撫で、不敵な笑みを浮かべながら眺めるヒューイ。

「ふむ…。やはりタダでは発動しないか」

ボソリと呟く。

しばらく思索した後、ヒューイは階段を登ってきて、レイを見下ろした。

「これの名は『NOAH』という。お前の母が名付けたのだよ」

「……え」

レイは、その名前に反応した。

『NOAH』？

まさか、研究室で見た『NOAHプロジェクト』というのは、これのことか？

「ある星に伝わる物語から取ったそうだ。どのような話かは分からないが……」

ヒューイの話をまるで聞かず、レイは暗い上部を見上げた後、円盤に目を落とした。

「…ノア…」

その、瞬間。

ブウウウン。

足元から低いモーター音がした。

見ると、レイの足元だけが、丸い光で囲まれていた。

「なんっ……」

言葉を発する前に、体全部が光に飲み込まれた。

そして次の瞬間には、レイの姿はどこにもなかった。

そこにいた者が呆気にとられる中、ヒューイだけは大きく目を見開いて嬉々とした表情を浮かべていた。

そして、辺りを見回す。

灰色だった壁が、次々と白い明かりを照らし出していった。

「…やっと、動いたか…クククク…」

次々に明るくなっていくのを感慨深げに眺めていたヒューイは、チラリと後ろを見やった。すぐに、何人かの部下がやってくる。

「後は予定通りに。奴を連れて来い。…丁重にな」

「はっ」

部下が去っていくのを、声を押し殺して笑いながら見送る。

「よくもまあ、こんな手の込んだ鍵を用意したものだ」

煌々と光を照らす円盤を見下ろし、喉を詰まらせて笑う。

「デージェエよ……」

かつて妻であった者の名前。

その名を呟く一瞬だけ。

ギラリとした瞳の輝きを沈黙させた……。

レイは、いきなり白い空間に放り出された。

あまりに真白なので、平衡感覚がおかしくなる。まっすぐ立ってられない。気分が悪くなってくる。

(なんだ、ここは…)

つい先程まで、薄暗い灰色の壁に囲まれていたのに…。

フォン、と軽い音を立て、何かが通り過ぎていった。

その方向に顔を向けると、青や白や黒の色が交じり合って、物凄い速さで去っていった。

不思議に思う間もなく、色んな色が次々に通り過ぎていく。

軽く吹く風が徐々に強くなっていくのと同時に、色がどんどん深くなる。

息を呑んでその光景を眺めていると、直径30センチくらいの球体が目の前に飛び込んできて、止まった。

深い青に包まれた球体。

ところどころに白い筋があり、茶色や緑、黄色などの色をした形を隠したり、覗かせたり…。

「…これ、は…」

レイは、それにゆっくりと手を伸ばした。

触れるギリギリのところまで手を止め、球体を眺める。

これは、惑星だ。

しかしリトウナではない。

リトウナはこんなに鮮やかな色をしていない。

本でしか見たことはないが、海の面積が極端に少ないのだ。圧倒的に砂の地が多く、薄い茶色の……破滅へ向かう色をしていた。

では、この星はどこか……。

球体が、消えた。

そこから暴風が吹き荒れ、目も開けていられないような状態になる。

翳した手の隙間から薄く目を開けて辺りを覗くと、レイの周りを生き生きとした森や、キラキラ光る青い海や、様々な形をした建物等が光速で通り過ぎていった。

見たこともない景色。

だが、そこが先程の青い惑星であることを漠然と感じていた。みるみる景色は通り過ぎ、風はいっそう強まった。もう目は開けていられない。

もう目は開けていられない。
手足までもぎ取られそうな勢いだ。

(くっ…)

苦痛に顔を歪めた。

すると、フツ、と風が止み、体が開放された。前につんのめって転びそうになるのを何とか止める。

薄く目を開けてみる。

白い色が見えた。

また最初に戻ったのか……と、レイはゆっくり顔を上げた。白いものしかなかったはずの空間。

しかし、今度はそうでなかった。

少し離れたところに、一人の女性が静かに佇んでいた。

赤みかかった長い髪に、白い白衣を着た女性。

レイは、ハツとした。

見たことがある。

この人は、見たことがある。

遠い昔、一度……いや、二度。

色あせた古い写真の中、生まれたばかりの自分を抱いていた、女性。青い顔をして、やつれた顔で固く目を閉じていた、女性……。

心が震えた。

まさか、こうして目の前に現れるなんて。

「…か、あさん…」

震える声で、呼びかける。

憎くて、憎くて、でも心の奥で求めていた存在を目の前にして、どんな顔をしたらいいのか、どんな言葉を出したらいいのか、分からない。

『レイ、ですね』

写真で見た笑顔そのままの母が語りかけてきた。

『私はデイージェェルヴァンニール。……貴方の母です』

「っ…！」

何か言いたい。けれど、言葉が出てこない。

もどかしく思っていると、デイージェェは言葉を続けた。

『貴方が私を見ているということは、『NOAH』が起動してしまっただけのことです』

『NOAH』。

その言葉を聞いて、レイは自分が置かれている状況を思い出す。

「ここは一体？ 何で死んだだけであんたがここに？ それに、あ

の『NOAH』というのは」

レイは疑問を一気にぶつけた。しかし、ディージェはレイの言葉を遮り、淡々と話し始めた。

『良く聞いてください。今、貴方が見た星……あの星の人は自分達の星を『地球』と呼んでいました。『NOAH』は、地球に飛ぶことの出来る転移装置なのです』

「ちょっと待ってくれ、俺の話を……」

『何十年も研究を続け、やっと完成させました。この装置を巡って、色んな争いが起きました……』

「……」

レイは、気付いた。

ディージェはレイのいる方向を見てはいるが、自分を見ているのではないのだと。

『この星を放射能で汚染してしまった先の大戦も、『NOAH』を巡る争いなのです……。これのために、多くの命を犠牲にしてみました……』

話し続けるディージェに手を伸ばし、触れてみる。

触れなかった。

ジジジ、と体が揺れる。

立体映像だ。

(…そうだよな…。確かに、この人は死んだんだ)

この目で、その死を確認したのだ。

『私は、この装置を壊そうとしました。けれど、出来なかった。長年かけて作り上げたものを、この手にかけることが出来なかったのです』

目を伏せる母の姿に、レイは同じく顔を歪めた。

彼女の話は耳に入れていた。しかし、その驚愕の事実よりも、この人は本当に死んだのだ、ということの方がレイには重い現実だった。

『レイ、これを動かしたのはヒューイですか？ それとも、貴方が自分の手でパスワードを見つけたのですか？』

それは恐らく、ヒューイに嵌められたのだ……と、レイは心の中で答える。

『もし前者なら、『NOAH』は破壊してください。ヒューイに渡すと危険です。彼は恐ろしい事を考えているのです。』

……あの星を侵略しようとしています。そんなことは避けねばなりません。

……でも、もし、貴方が自分で起動させたのなら……これを使って、リトウナの再生の手伝いを、してください……。地球のデータは貴重です。きつと役に立ちます』

「……………」

デイージエは、リトウナ再生のために『NOAH』を開発したのか

∴。漠然とそう思った。

砂漠を緑で埋め尽くすための研究をしていた母。

『NOAH』開発は恐らくその延長で…。他の惑星のデータを採るため、『NOAH』を使っていたのだろう。

しかしヒューイは…。

あの星を侵略しようと考え、そして…。

母を手にかけた。恐らく、そうだろう…。

両手をギュッと握り、ギリリと奥歯を鳴らした。

(ヒューイ…!!)

『…レイ。母を許してくださいね。貴方の傍にいられない、母を…』

「…かあ、さん…」

『レイ…。大きくなったのでしょうか。『NOAH』を起動させるには、成人した貴方のデータが必要だから…』

(大人ってほど大人にはなっってねえけどな)

声が出ない。

『ごめんなさい。貴方を巻き込んでしまっ…。貴方が、今、幸せなら……良い、のだけれど…』

(どうだろうな…)

泣きじゃくる母。

（ヤバイ事態になりそうだ…。あんたは分かってるんだろう？ 何も知らなかった俺が、自力で起動させることなんて不可能だと）

滝のように涙を流す母につられ、レイも涙を流す。

（分かっているから、泣いてんだろ…？）

自分の息子がこれから辿る運命を、分かっているから。

『パスワードを、教えます…』

その言葉を聞くと、ディージェエの姿は消えてしまった。そして、グツと体に重力がかかる。

「うっ…？」

気が付くと、煌々と白く輝く円盤の上に立っていた。

「…戻った…のか」

母への想いの余韻を消すように、グイッと涙の痕を拭いた。

「お帰り。早かったな」

その声に振り向くと、憎々しい初老の男が部下を従えて立っていた。

デイージエのこともあり、レイは一層鋭い瞳をヒューイに向けた。

「さて、何を見てきた？ まだ完全に作動したわけではないから、『P - A R - 3』には行っていないのだろうか？」

ヒューイの言葉が少しの間理解できなかったが、すぐにそれは『地球』のことだと解った。

『NOAH』は完全に作動したわけではなく、転移装置は稼働していないことも悟った。

デイージエは破壊のパスワードとともに、装置を動かすためのパスワードも遺した。母の言っていた事と、今の状況が徐々に糸で繋がってくる。

「私としてはすぐにでもこれを動かし、『P - A R - 3』とここを繋いで欲しいのだが」

「…嫌だ」

きっぱりと言い放つと、ヒューイはクツと喉を鳴らした。

「その様子だとこれが何なのか理解しているようだが…。デイージエに逢ったか？」

レイは答えなかった。

しかし、微妙な表情の変化で答えは覺られた。

「成る程。では聞いたはずだ。これを完全に復活させるパスワードを」

「……」

「言いたくないか？」

レイは、ただ睨み返した。

すると、ヒューイは不気味な程にこやかに笑った。

「お前はすぐに動かしてくれるさ。父に逆らったことのない、いい子どもだな」

「なっ……」

レイは言い返そうとしたが 出来なかった。

ヒューイの後方にいる部下たちの間に、銀の髪を見つけて。

「…ノア!!」

レイはすぐに駆け寄ろうとするが、周りにいた者に押さえつけられ、それは叶わなかった。

「フン？ ノアと言ったのか？」

ヒューイはノアを振り返る。

「面白い。お前の周りには『ノア』が“二人”か」

「なっ……なんでそこにいる？ あんたの嫁だ。俺には関係ない！」

無駄だと知りつつも、知らん振りをする。

「…だ、そうだ。可愛そうになあ」

ヒューイはノアに近寄り、長い銀の髪をさも愛しそうに撫でてやった。

そして、次には鋭いナイフの刃を、白い頬にピタリと張り付けた。ハッと息を呑む。

その表情を見て、ヒューイは高らかに笑う。

「愚かな息子よ。お前には罰を与えねばならん。…しかし、だ。お前は私にとって大事な息子だ。ここは、パスワードと引き換えに、お前の命を助けてやるわ」

「何っ…」

「取り引きに応じるだろうか？」

ニヤリ、と笑いながら、ノアの頬に刃を食い込ませる。ノアの顔が恐怖に引きつった。

母の遺言は。

『NOAH』の破壊だ。
しかし。

今、目の前で愛しいものに危機が迫っている。
選択肢はふたつ。

『地球』を救うか。『ノア』を救うか。

「駄目だ、レイ！ 言いなりになるんじゃない！」

ノアが必死の形相で叫んだ。

ヒューイはそれを一瞥すると、ヒュツとナイフを振り上げた。
小さな悲鳴が上がる。
白い肌から、鮮血が飛び散った…。

「…やめる！」

レイは叫んだ。

その時点で、もう答えは決まっていた。

「分かった。パスワードは教える」

「いい子だ」

ヒューイは勝ち誇ったように笑った。

「すぐに準備を」

研究員達に指示を出し、部下達にはノアを連れて行くよう命令する。

「ノア！ 待て！」

追いかけてようにも、未だ開放されない。ノアは僅かに振り返り、悲しそうな瞳をレイに向ける。そしてそのまま、連れ去られてしまった…。

「パスワードは教える！ だからノアは離せ！」

「そうはいかんよ。私は、彼女にも罰を与えなければならないのだから」

それを聞いたレイは、頭に血が逆流しそうだった。

「約束が違う！」

「何を約束したのだね？ 私はお前の命を助ける、と言ったのだよ。お前への罰と彼女への罰は別だからな」

その言葉に愕然とする。

自分の甘さに腹が立った。

同時に、何とかしてノアを助け出さねばと頭を巡らす。

「…ノアを助けられないのなら、パスワードは教えない！」

「別に構わんよ。ではシオを殺す。…それでいいか？」

「『NOAH』が動かなくて困るのはあんただろ！？」

「シオが死んで困るのはお前だろう？ …ああ、目の前で死に顔が

見たいと言つならば、今すぐにここに連れて来るぞ?」

ヒューイは……やる。

恐ろしく平気な顔で、人の命を奪える男だ。レイのような子供が取り引き出来るような相手ではない。

「お前がどうしてもと言つなら、命までは奪わんさ。少し折檻する程度にしてやるう」

「……」

命までは奪わない……。

どこまで信じたらいいのだろう。

しかし、可能性が少しでもあるのなら、それに賭けたかった。

(でもタダじゃ教えねえ)

隙が出来るチャンスを作らなくては。

「…分かった。…言う通りにする。ノアを助けると言つならな」

「懸命だな」

「だけど! …少し時間をくれ。母さんが言っていたパスワードは、ただ入力するだけじゃ動かない。複雑なプログラムが組まれているんだ。数日か……それ以上の時間が欲しい」

時間をかければ、ヒオウあたりが異変に気付いて自分達を捜索してくれるかもしれない。

ほんの僅かな可能性だが、それに賭けてみるしかノアを助ける方法

が思いつかなかった。

「良かるう」

その言葉を聞いて、一先ずホッとする。

だが…。

レイは解っていなかった。この男が、どれだけ恐ろしい人物なのかを。

「しかしな、レイ」

ヒューイの言葉に顔を上げる。

「なるべく急いだ方が良いぞ。長引けばそれだけシオが痛い目を見ることになるからな」

これ以上、何をするつもりなのか…。レイはヒューイを凝視した。

「ここ、『NOAH』内部は起動していなかったとはいえ、維持させるにはたくさんの方が必要だね。昼夜を問わず働いてもらっているのだよ。その褒美に、極上の雌鹿を与えてやるうと思ってね」

「…?」

ヒューイの言わんとするところが解らず、レイは眉を顰めた。

「飢えた猛獣の群れの中で、雌鹿はいつまで正気でいられるか…。私は非常にに楽しみだよ。しかしお前にとってはどうかかな?」

その言葉の意味を理解した途端、レイの体は震えだした。

「てめえっ…！」

過去、こんなに憎いと思ったことがあっただろうか。

母の存在とともに、ずっと憎んできた父。

けれどそれは、良くある父への反抗心だった。

でも、今は…。

本当に、心の底から憎しみが沸き上がってきた。

レイを押さえている腕を力一杯振り払い、ヒューイに勢い良く飛びついた。

「殺してやる！！ 殺してやるっ！！」

感情のままに拳を振り上げる。

しかし、そんなことで命を奪う事など出来るはずもなく…。あっけなく従者に押さえつけられてしまった。

床に這い蹲る息子の姿を見て、嘲笑する父。

「殺してやるか。楽しみなことだ。しかし今は早く『NOAH』を動かす事だ。シオの命はお前が握っているのだからな」

高笑いをしながら去っていく父を、何とか捕まえようともがくが、どうにも動く事が出来なかった。

「くそっ、離せ！ 待て！ ヒューイ！ てめえは俺が、殺すっ…
！！」

「レイ様」

押さえつけている従者が耳元で囁いた。

「申し訳ありませんが、足を折らせていただきます」

ヒューイへの憎悪があまりにも激しかったため、何を言われているのか分からなかった。
分からないうちに。

右足に激しい痛みが走った。

「っ!?!」

息が詰まった。

痛みは足だけに留まらず、体中を電流のように駆け巡った。

「あっ…!?!? あっ…あああああ!?!」

暴れようとするが、押さえられてしまっていて、のたうち回ることも許されない。

「もう一本、いきます」

「やめっ…!?!」

レイの絶叫が、『NOAH』内部に響き渡った。

壁から溢れる白い光が、悲しげにそれを照らしていた…。

それから、何時間経過しただろうか…。
レイは鬼気迫る勢いでパソコンのキーボードを叩いていた。

『NOAH』の転移装置へ向かう途中で見た白い研究室で、ヒューイの部下達と研究員達数名に監視されながら、折られた両足はきつちりと手当てがしてあり、痛み止めの点滴も受けていた。すぐにも作業に取り掛かれるようにと ヒューイの配慮から。

ただ、黙々と作業を進めるしかなかった。
少しでも早くノアを助けるために。

彼の頭の中には『地球』という星の存在など微塵もなかった。母の遺した言葉も、遙か昔の出来事。

今は、ただ。

ノアに逢いたい…。

一昼夜が過ぎ、異変に気付いた者がいた。
ヒオウである。

「…おかしいわね…」

研究室に来てもしレイの姿がない。いつも傍に随っていた研究員達の姿もない。いるのは、見慣れない顔ばかりだ。

聞いても誰もレイの所在を知らない。

そして、ノアもどこにもいない。今日は一緒にスラムに行く約束していたのに。

「まさか」

嫌な予感がした。

二人が同時にいなくなった…。これはただの偶然か？ いや、そうでない可能性の方が高い。どこからか二人の情報が漏れたのだ…。

「くそっ…」

ヒオウは確かな情報を集めるべく、奔走する…。

三日後。

レイは不眠のまま作業を続けていた。しん、と静まり返った部屋の中、カタカタカタとキーボードを叩く音だけが響く。

カタ…。

音が止んだ。

研究員がそれに気づき、レイの顔を覗き込む。同時に、レイの体は椅子から転げ落ち、そのまま床で動かなくなった。

「…眠ったようだ。少し熱もあるようだ。抗生剤の用意を」

レイの様子を診た医師がそう指示を出し、何人かの手を借りて、部屋の隅にある簡易ベッドにレイを放り投げた。

その横で、研究員達がモニターと、窓の外の『NOAH』の様子を

眺めた。

「まだ終わってはいないな」

「そのようだ」

淡々と会話が成される中、レイはしばし眠りにつく。

夢の中では、自分の隣で穏やかに笑うノアがいて、生き生きとした植物に囲まれて、幸せそうに笑っていた。

こんな風に、ただ、隣に居てくれるだけでいい。

ただ、笑顔を見せてくれればいい。

多くは望まない。

ただ、ノアがいてくれれば……。

そんな願望が見せる、短く儚い夢。

ヒオウは、ドームの外を目指していた。

いつもの正規ルートはノアがいなければ通れないと思い、スラムの人々に教えてもらった隠れルートを通っていた。

下水道を通るので匂いはキツイし汚いが、見張りがいないので好都合だ。

そうして外に出て、鬼のような形相で、大股に歩きながらある人物を探した。

「ターラー！」

例により植物園にいた小太りの女性の名を呼ぶ。

「おや、ヒオウ、この間はどうしたんだい？ 皆楽しみに待っていたのに…」

言いながら、彼の表情がいつもと大分違う事に気付いた。

「…何かあったのかい？」

「リップルはどこ！？」

「えっ？ リップルかい？」

藪から棒に言われ、少し面食らうターラ。

リップルとは、レイヤヒオウが出産に立ち会ったトモの夫である。

その人を、ヒオウは探していた。

「今の時間だと……見回りから帰って、トモと息子のところにいると思うけど……」

「そう」

それを聞いたヒオウは、夫婦の住居である部屋へと向かった。異変を感じたターラは、ヒオウの後を追った。

入り口にかけてある布を思い切りめくり、部屋の中に入る。リップル、そして子供を抱いていたトモが顔を上げた。

「やあ、ヒオウ、どうし……」

リップルが話し終わらないうちに、ヒオウは勢い良く彼の胸倉を掴んだ。

「あんた！ あんたが……レイとノアを……！」

激しい憎悪の目で睨みつける。

「一体どうしたってんだい！」

ターラが止めに入り、トモも何かを訴えるような瞳でヒオウを見た。

しかし、リップルの顔がサッと青ざめるのを見たヒオウは、思い切り彼の頬を殴りつけた。リップルは後ろによるめく。

「ヒオウ！」

「黙ってる！」

ヒオウの一喝に、ターラは思わず身を怯ませる。その隙にもう一度リップルに掴みかかった。

「何でこんなことをした！ あんたにとってもノアは大事な仲間のはずだ！ その仲間をどうして裏切ったんだよ！」

リップルは青ざめるばかりで、何も答えない。それがヒオウを苛立たせた。

「ヒューイに捕まったらどうなるか！ 今頃あの二人がどうなってるか…!!！」

激しくリップルを揺さぶる。

ヒオウの言葉に、リップルは徐々に表情を崩していった。そして。

「すまないっ…！ すまないっ…！」

首を項垂れ、必死に謝った。そんな夫の姿に、トモはオロオロするばかり。

ターラは話が見えたのか、青ざめながらリップルに飛びついた。

「リップル、お前、一体何をしたんだい！」

「ああ、ターラ……本当にすまない……！」

「何をしたんだよ！」

「ヒューイに……この情報を色々流したんだ……。最近は……。ルヴァンニール博士が遺したものについてや……。ノアと、レイの関係を、聞かれた……」

「……なんで、そんなことをしたんだい！！ あの子のことを、妹のように想っていたお前が……！」

声を震わせるターラ。

それに、リップルは涙ながらに答えた。

「トモの……声を、取り戻してやるから……。子供の面倒も見ると、言われて……」

「……ああ……」

ターラは天井を仰ぎ見た。そして、体を震わせながら涙を流す。

「あなたは馬鹿だ」

ヒオウが冷たく言い放つ。

「ヒューイがそんな約束、守るはずない」

その言葉に、リップルは深く頷いた。

「そうだ…。そう、思うよ…。本当に、すまない…」

震えるリップルに、トモはそっと寄り添い、泣きながら彼を抱きしめた。過ちを許すように、優しく。

ヒオウとしても、リップルの気持ちが分からないわけではなかった。しかし、許す事は出来ない。

「…アタシは、ドームに戻ってレイ達を探すわ。ヒューイに利用されそうになっているみたいだから」

「どういうことだい？」

「詳しくは分からない。ただ、ヒューイがどこかの国を侵略しようとしているとは聞いたわ。その鍵を持っているのが何故かレイみたいで…。ヒューイならきつと、レイとノアの関係に付け入って、無理やり協力させられてるに決まってるもの」

「もしかしたら、それは博士の研究に関係が？ だから博士の遺したものを今頃探して…」

リップルの推測に、ターラは頷く。

「そうだろうね。ヒオウ、あなたはドームに戻らない方がいい。レイと一番仲のいいあなたは、何か情報を持っていると思われるかもしれない」

「…でもそれじゃあ…」

誰がレイ達を助けると言うのか…。

ウウ〜……ウウ〜……。

その時、辺りに警報が鳴り響いた。同時に、遠くの方から爆発音と人々の悲鳴が聞こえてきた。

「何!?!」

急いで窓の外を見る。あちこちで黒煙が上がっていた。どこからか奇襲を受けている。

「…ヒューイだね」

ターラはフーツと息を吐いた。

「どうして……まさか、アタシを狙って…?」

「さあ、どうだろうね。だとしても、こんなやり方はしないさ。恐らく………ここが不要になったんだろうよ」

「どっぴいっことっ」

「さあね。意味など教えず、こうやって攻撃を仕掛けてくるのが独裁者ってもんだ」

ターラはリップルに目配せすると、彼は頷いて絨毯を捲り、石の床を力を込めてずらし始めた。出てきたのは浅くて広い窪み。そこに数え切れないほどの銃器がズラリと並んでいた。

「いつかこんな時が来るだろうと思っていただけ……。腹をくくる時が来たようだ」

と、次々に銃を手取る。

「あんだ、使えるのかい？」

「まあ、護身用くらいなら」

「ほらよ」

ターラはハンドガン二丁をヒオウに放った。それを受け取ったヒオウは、思いの他ずっしりとした重みを感じた。

「リップルはトモと一緒に子供達を地下に隠しておくね。…出来るね？」

「ああ…。もう裏切ったりしない」

「オーケー。ヒオウはあたしと一緒においで。弾に当たるんじゃないよ」

「無茶言わないでよ」

言いながら、ターラとともに部屋を出る。他の部屋からも武装した

者たちが次々に飛び出してきた。

いつでも戦える準備があつたのか……。ヒオウは密かに感心する。大きく息を吐き出し覚悟を決めると、皆と一緒に外へ飛び出した……。

幸せな夢から冷め、レイは再びパソコンに向かった。
あれから何日経ったのか。

こんな真白な空間の中では時間の感覚が掴めない。

彼女は　　生きているのか。

恐ろしい場所に放り込まれて……身も心もズタズタにされて……それでも、生きていて欲しいと願うのは単なるエゴだろうか。

逢いたい。

責められてもいい。罵られてもいい。何を言われてもいいから……逢いたい……。

「　　」

バン、とキーボードを叩きつける。ピー、とエラー音が響いた。

「どうした」

「…ノアに会わせる」

「映像で無事な姿を確認出来るようにしてあります。ご覧になりますか？」

ヒューイの部下はリモコンで白い天井からモニターを出す。

「そんなの、いくらだって誤魔化せるだろう。本人を、目の前で確

認させる！ …でないとこれ以上プログラムの入力はいらない！」

部下達は目配せをする。

「…少しお待ち下さい」

溜息しながら一人が部屋を出て行く。
しばらくして。

「ヒューイ様の許可が下りました。こちらへどうぞ」

レイは顔を強張らせたまま、松葉杖をついて付いて行く。何度となく騙されたおかげで、すぐには信用できなかったのだ。

「面会は五分とさせていただきます」

部屋を見渡していると、奥にある扉が開いて、銀の髪の女性が、大男によって中に投げ込まれた。

「ノア！」

すぐに近寄ろうとしたが、部屋は透明な硝子で仕切られており、ノアの下へは行けなかった。

ノアは、暫く頂垂れていた。
美しかった髪はボサボサになり、身につけているものもボロボロで、白い肌が露になっている。その白い肌には……紫色の痣が、いくつもつけられていた。

どんなに酷い目に遭ったのだろう…。

それを思うだけで涙が出た。

「ノア……」

そつと名を呼ぶと、それに反応するかのようにノアがゆっくり顔を上げた。

レイの顔を目にしたノアは、パツと顔を背けた。

そうだろう……。自分のせいでこんな目に遭って……。憎まれているに
違いない……。レイはそう思った。

「……ごめん、ノア……」

硝子の壁に手をつき、謝る。

「俺の、せいで……こんな……」

涙が溢れてきて言葉が続かない。

なんて情けないんだろつ。愛しい者を助けられないどころか、謝る
事も出来ないなんて。情けなくて、更に涙が零れた。

コツン、と硝子を叩く音がして、顔を上げる。

そこには、優しい笑顔でこちらを見ているノアがいた。

『レイのせいじゃない』

硝子越しなので、声がかくぐもって聞こえる。

『……こんな格好、見せたくなかったな、と違って……』

その言葉に、顔が歪む。

『ほら。泣くだろ、レイは…』

「だって、俺のせいじゃ…」

『あんたのせいじゃない。…あたしの、弱さだから…』

あの時、レイを突き放していれば恐らくこんなことにはならなかった。それが出来なかったのは自分の弱さだと、ノアは思っている。

『大丈夫だよ。あたしは、大丈夫』

「あんた…どこまで強いんだよ…」

(それとも、弱い俺がそうさせてんのか)

護るどころか護られて。助けるどころか助けられている。本当に情けない。思わず苦笑してしまった。

硝子越しに両手を重ね合わせて。

コツン、と額を合わせた。少しでも互いの体温を感じたくて…。

『レイこそ、その足大丈夫か？ あいつらにやられたのか？』

「ああ…。でも痛み止め効いてるから…。ゆっくりなら歩けるよ」

『そっか。…ちゃんと寝てる？』

「うん、そっちは？」

『寝てるよ。大丈夫』

「そっか…。…逢いたかった」

『…うん、逢いたかった』

「すげえ、逢いたかった」

『うん…』

額を硝子につけたまま、穏やかな顔で語り合う二人。

Drop 4

「もうすぐ、自由にしてやるからな。もうすぐ、終わるから……」

『…レイ』

ノアは硝子から顔を離した。

『何をやらされてる？ とんでもないことしてるんじゃないのか？』

「…いや……」

『ヒューイの言い成りにはなっっちゃ駄目だ』

「……………」

ノアの力強い瞳に、レイは今やっていることを手短かに伝えた。

『博士がそんなものを……』

ノアは驚く。

『…レイ、あたしは……』

ノアの方の扉がボタンと開き、大男が現れた。ノアは細い腕を捕ま
れ、引きずられていく。

「ノア！」

ノアが振り返る。

『あたしは、博士と同意見だ!』

去り際、そう叫ぶ。

「レイ様、戻りますよ」

レイも、ヒューイの部下に連れられ、部屋を出る。

(母さんと同意見…)

つまり。

『NOAH』は破壊しろ、ということだ…。

椅子に座って、モニターを見つめる。

ノアの力強い瞳が浮かんできた。希望の明りの灯った、清らかな瞳が。

(…やれるか?)

チラリと研究員達を見る。

この者達に悟られる事なく、ディージェエの破壊のプログラムを作成するのは困難だ。それ以上に複雑なものでないといけない。

(やるしかねえだろ!)

仮にも、自分はこの巨大なコンピュータを造り上げた博士の息子なのだ。こんなヤツラとは頭の出来が違う！　そう、自分に言い聞かせる。

再び、キーボードを打つ。
今度は希望を胸にして。

一方、ヒオウは。

壁に身を預け、ハンドガンを持った手をダラリと地面に投げた。
激しい銃撃戦のため、体は傷だらけで息も上がっていた。苦しいけれど……それが自分はまだ生きていると認識させてくれる。

良く、銃弾を受けずに生き残れたものだ……。銃に関しては素人も同然なのに。

辺りはしん、と静まり返っていた。

砂埃が風に舞って、青い空が黄色に隠れてしまう。

ヒオウの周りには何人もの人々が地面に倒れていた。

スラムの仲間達、ドームからの刺客、ごちゃ混ぜになって折り重なっている。

最後に起こった爆発により、吹き飛ばされた人達だ。ヒオウは、

これを何とか逃れていた。

「アタシって運がいいのね。これも日頃の行いがいいおかげね」

なんて呟き。

死者達にそつと手を合わせた。

「ヒオウ！ ああ、良かった、生きてたね！」

ガランガランと瓦礫を乗り越え、ターラがやってくる。

「ターラ！ 良かった、貴女も無事だったのね」

「ああ。…酷いね、ここは…」

ターラは仲間達の軀に、しばらく祈りを捧げる。

「一息ついてる時間はないよ。これでヒューイが退くとは思えないからね。次が来る前に態勢を立て直さないと」

「そうね。子供達は無事かしら？」

「多分ね。一旦戻ろう」

「うん」

二人は急いで、子供達や病人の待つ住居地へと向かう。

病人や、手足がなくて十分に動けない人達、そして子供達は、無事に地下から出てきた。

「良かった、皆、無事だったね」

「おばさん！ おばさん！」

ターラは子供達から抱擁を受ける。その中から、リップルが飛び出してきた。

「ヒオウ、これを！」

と、茶色に変色した小さな紙切れを渡される。

「何？」

ヒオウは紙を広げる。

そこに書かれている内容を見て、ヒオウは驚愕した。

「どこにこんなもの……！」

「地下の……皮膚病患者の一人が、博士から預かっていたらしい。自分の、体の中に隠してたんだ……」

「体の……中？」

ヒオウはゴクリと唾を飲み込んだ。

「ああ。小さなビンに入れて、腹の中に埋め込んでたんだ。さすがにそこまでは俺も調べなかったから……俺が言うのも何だけど……ヒューイに渡さないで良かった……」

「その方は、これを取り出せって言って……今、亡くなったんだ」

別の者が、そう教えてくれた。

「そう……」

爆弾のような情報を、自らの体で護って逝ったその者に、静かに黙禱を捧げる。

随分と乱雑な文体で文字が綴られている、その内容は。

ヒューイがある星を侵略しようとしている事。

そのための転移装置がある事。

その装置が作動すれば、恐らくスラムは攻撃され、人々は抹殺されるであろうから、出来るだけ遠くに逃げて欲しい……という事等が、詳しく書かれていた。

装置を起動させるには、「レイ」が必要だとも。

「成る程…。レイを思うように動かすために、あの子を捕まえたんだね。そして、装置が起動すれば新しい星を手に入れられるから、このこと契約を結んでいる必要はないわけだ…」

ターラは怒りに身を震わせた。

「自分の野心のために世界をこんなにしたのか…！ 拳句、他の惑星を支配するだって…？ 冗談じゃない！」

スラムの人々は、事実を知って怒りを露にした。

「許せないね…。自分の言う通りにならない人間は全部切り捨てるつもりなんだ。自分だけ、いい思いをしようだなんて…」

「ふざけてる！」

「許せない！」

激しい怒号が響いた。

人々は皆、同じ想いを抱き始める。

「ヒオウ…。一緒にドームへ行こう！」

皆の視線がヒオウに集まる。

「あたし達はね…。家族を失って、仲間を失って、自分の体さえ不自由にして生きてきた…。辛かったさ…。悲しかったさ…。そんな

な想いを、もう誰にも味わって欲しくないんだよ。見ず知らずの星の住人でも、それは同じさ……」

「ターラ……」

「いいね？ 皆」

ターラの声に、人々は腕を掲げて応えた。

「打倒！ ヒューイ！！」

「オオオオ！！」

地が揺れるほどの喚声が起こる。

「でも……それじゃ、アンタ達、死んじゃうわよ……」

ヒオウは呟く。ヒューイはそれ程甘い男ではない。歯向かったところで押さえ込まれるのがオチだ。

しかし、そんなことは皆承知しているようだった。覚悟を決めた、力強い瞳をしている……。

それからすぐに、スラムの人々の進軍は始まった。

そして、ヒューイ軍の反撃も開始される……。

「……終わった……」

レイは椅子を後ろに倒す勢いで立ち上がる。

「プログラムは完成した。ノアを解放しろ！」

「まだ装置は動いていないようですが」

「ノアが先だ！」

「ヒューイ様に伺います」

その言葉に、レイは舌打ちする。

ヒューイの命令がなければ自ら動く事も出来ない人形たち。

「早くしてくれ…」

苛立ちながら言う。

しばらくして、ヒューイ本人が現れた。

「プログラムが完成したそうだな。何故動かさない？」

「ノアの無事を確認してからだ」

「困った奴だな…。早くした方がいいと言ったはずだが？」

「ノアを解放するまで動かさないからな。これを動かせるのは俺だけだ。言う通りにした方がいいぞ」

「ほう？ 言うようになったな」

ヒューイはしばらくレイを見つめていた。そして、“飴”をくれてやらないと絶対に動きそうにない、と判断した。

「シオをここに」

「はっ」

すぐにノアは連れてこられた。

しかしここで安心してはいけない。最後まで、気を抜いてはいけない。

「ノアを放せ」

「起動させるのが先だ」

「ノアが先だ」

「……」

ヒューイは軽く溜息すると、顎を杓った。ノアが離される。

『NOAH』全起動を目の前にして焦ったのか…。これが彼の初めての誤算、だった。

よろけながらレイに倒れこんでくるノアを、しっかりと抱きしめる。

「レイ……」

「ノア……」

きつく抱きしめた後、レイはそっと彼女を離す。

「満足か？ 早くしろ」

ヒューイが少し苛立ちながら言う。

「分かったよ…。動かしてやるよ」

レイは、パスワードをゆっくりと打ち込んだ。

ヴン、と音がして、窓の外が明るくなる。ヒューイはゆっくりと部屋を出て、転移盤のある下層に目を落とした。

「ヒューイ様！ 転移装置、作動しています！」

部下からの報告の声を聞いたヒューイは、ニヤリと笑った。

そして部屋に戻り、レイ、ノアと対峙する。

「ご苦労…。今まで辛い思いをさせたな。ゆっくりと休むがいい…」

スツと銃を構える。

「愛する者と一緒だ。きつと良い夢が見れるだろう。デージーエに逢ったらよろしく伝えてくれよ」

「貴様…！」

ノアが叫ぼうとする。しかし、レイはそれを制し、ノアの手をギュッと握った。

「そつくると思ったぜ…」

余裕の表情でそう言うレイに、ヒューイは眉を吊り上げる。

「あんたは約束を守る様な奴じゃない…。だから、俺はこつする」

「何…?」

ヒューイが怪訝な顔をしていると。

部屋の外からバン、と激しい音がした。次いでけたたましい警告音が鳴り響く。

Drop 6

「…何だ！」

少々苛立った様子で外に出るヒューイ。

「ヒューイ様！ 『NOAH』が……破壊されています！」

「何だと……！？」

白い光を放つ壁が、次々に小さな爆発を起こしている。急いでレイの元に戻る。

「一体何をしていたのだ！」

研究員達が責められる。彼らは困惑していた。

「そんな……破壊プログラムらしき物はどこにも……」

別のパソコンでチェックしていたが、そのようなものは見当たらなかった。きちんと見張っていたはずなのに。

「お前らみたいな馬鹿にバレるようなことはしていない」

本当は内心ヒヤヒヤしていたのだが、最後までバレなかった。レイは自信たっぷりと言ってやった。

「レイ……！」

「俺は、約束は守ったぜ？」

ニヤリ、と笑う。

「『NOAH』はちゃんと起動させた。……その後で壊するとは言
つてなかったけどな」

「成る程」

ヒューイは嘆息すると、銃を打ち鳴らした。

白衣を着た研究員達、全員がそれを深紅に染めてバタバタと倒れて
いった。

「役立たずめが」

「…！」

予想外の銃弾に、レイは驚く。まさか、仲間をも簡単に殺してしま
うとは…。いや、それがヒューイなのだ…。

ギョツと、ノアの手を握り締める。すると、ノアも握り返してきた。

「偉いよあんた。最高」

いつもの勝気な笑顔。こんな場面で、そんなことを言えてしまうノ
アに、少し苦笑する。

「これで、思い残す事はないな」

「…！」

思わず振り返る。

「…覚悟、してたんだろ？ レイも…」

「ノア…」

「レイと一緒になら……怖くないよ」

そう言うノアの顔は、とても綺麗だった。

今この状況で逃げる事は不可能……。それは解っていた。

やるべきことはやった…。

『NOAH』が破壊されれば、母の遺言を果たしたことになる、レイはその宿業から逃れる事が出来る。

ここで潔く散るのもいいだろう…。

出来るなら……ノアと二人で、生きていきたくったけれど……。

ノアの冷たい手。

怖くないわけではない。震えそうになるその手に指を絡め、ギュッと握り締める。

「レイ…」

ノアもその手を握り返す。

本当は……。

本当は、まだ、生きていたかった。

レイと二人で、ずっと。

生きて、いたかった……。

「ヒューイ様」

少し慌てた様子の部下が部屋に入ってくる。

「何だ」

「実は…」

部下はヒューイに何かを耳打ちする。それを聞いたヒューイは険しい顔になった。

「何故制圧出来ない。十分な武力を与えたはずだぞ」

「はっ、それが予想以上の抵抗でして…。ヒューイ様、何卒お力を」

「まったく…。どいつもこいつも使えん！」

ヒューイは憤慨しながら部屋を出て行こうとした。

だが、出口のところまで一旦止まり。くるりと振り返った。

振り向き際に、銃を発射させる。

避ける暇はなかった。

赤い血が目の前を点々と飛び散る。

「フン…。少しは気が紛れたな。…いい質が手に入ったと思ったが、かえって邪魔だったか…」

そう言いながらヒューイは早足で部屋を出て行く。

「……」

レイは、ゆっくりと振り返った。

ノアが、レイに視線を送る。唇を震わせて……何か言いかけて。倒れた。

「ノア!!」

ノアの白い服が、胸の辺りから勢い良く紅に染まっていく。

「ノア……ノア! ノア!!」

叫んでも、ノアはピクリともしない。しかし、かすかに息をしているのが分かる。まだ生きている!

着ていた白衣をビリビリ破り、銃弾を受けたところを押さえる。

「ノア……死ぬな……」

一緒になら、死んでもいいと思った。けれど、いざ愛する者が死に直面した時、あっさりとその考えは消え去った。助けたい。何としてでも、助けたい。

「無駄だ、このままでは一時間と保たないだろう」

レイについていた医師がそう告げる。

「うるせえ! だったら何とかしろ!」

「生憎、私はヒューイ様付きの医者ですので」

今にも天に召されそうな患者を目の前に、そんなことを言う医者がいるなんて！

レイは医師を突き飛ばすと、ノアを抱えて立ち上がるうとした。しかし折れた足ではノアを抱えて歩く事も出来ない。

「くっ…」

痛みがないのが幸이었다。座ったままの格好で、ズルズルと部屋の外に出て行く。残っていた部下達は何をするつもりだと、それを見守る。

レイは、『NOAH』の転移盤に向かっていた。

何度も階段を転げ落ちそうになりながら、必死にノアを運ぶ。

（まだ、間に合う…）

左足が変な曲がり方をする。痛みがないとはいえ、さすがに違和感がする。しかし、それに構っている暇はなかった。

（まだ、地球への道は閉ざされていない…！）

完全に破壊するまでには時間がかかる。今ならまだ地球へ飛べるはずだった。

同じ進化を辿っているという地球人。そこなら、きっとノアを助けられる…。かすかな希望を抱いて、転移盤の前に立った。

スラムの人々の進軍は止まらなかった。押し寄せてくる人々と、外から撃ちこまれる大砲。

国王軍は徐々に後退し、ついにはドームの政治の中核である建物にまで侵入を許した。

何故ここまで力に差がついたのか。圧倒的に国王軍の方が有利な立場にいたはずなのに。

……恐らくは、心根の問題だったのだろう。ただ力で抑えられている者と、はつきりとした目的を持ち、命を懸けて戦いに挑んでいる者の差。

「レイとノアがいるとしたら、アタシの入った事のないところだわ。きつと、あそこよ」

ヒオウは研究棟と呼ばれる白い建物の一角を指差す。

「よし、ヒオウは先行して！ あたし達はここを片付けてから向かう！」

「分かった！」

数人の共を連れ、研究棟の敷地内に入る。正面からではあっさり捕まってしまう。こっそり入れそうな裏口を探す。

「待つてなさいよ、レイ、ノア……！」

スラムの人々の快進撃を、ヒューイは大きなモニターで眺めていた。

「ここまでとは…。ヒューイ様、如何いたしましたしょう？」

部下が語りかけても、ヒューイは何も答えなかった。瞬きもせず、ただジッとモニターを見ていた。そして。

フツと表情を崩した。

「…核を落とせ」

「はっ？ …はい、どこと…」

「ここにだ」

当然、というようにヒューイは言う。

「し、しかし…」

「聞こえなかったか？」

「それでは私達は…」

「………」

ヒューイは面倒くさそうに片手を挙げると、銃を発射させた。

「ヒュ、ヒューイ様！」

周りがどよめく。

「誰か、スイッチを押して来い。座標はここだ。間違えるな」

「……」

誰も、返事をする者はいなかった。『NOAH』を失った以上、ここから逃れられる所などないのだから。

「う……うわああー!!」

ダアン、ダアン、と銃声が鳴った。それを合図に、そこにいた者全員が銃の引き金を引く。今まで抑圧されていた者に対しての、反撃を試みたのだ。
だが。

ヒューイはクツと笑った。

「馬鹿が」

血まみれになって倒れる部下たちを冷たい瞳で見下す。
こんなこともあるのかと、いつも防弾装備はしていた。それに、やられる前にやり返す腕前は持っている。

結局核爆弾のスイッチは自らの手で押す事になり、その足で研究棟へ向かった。

先程、連絡が入ったのだ。

レイがシオ ノアを連れて『NOAH』転移盤に向かったと。

その報告を受けた時、彼の中で消えかかっていた野心が再燃した。
恐らく、まだ『NOAH』は転移機能を失っていない。レイとノア、

二人とも苦しむようと、ワザと急所をはずしておいて正解だった。

部下にはレイ達を足止めするように通達した。そして、自らも急ぎ、『NOAH』に向かう。

「……」

ふと、急いでいた足を緩める。何かの気配が頭上でした。

歩きながら『足音』を確認する。

トランシーバーを手に取り、近くにいる部下に命令を下す。

「通風孔に鼠が入り込んでいる。始末しろ」

そして更に足を速めた。急いだ方がいい。余計な邪魔が入る前に、「新世界”へと飛び出すのだ…」。

身がかがめて狭い通風孔の中を突き進んでいたヒオウは、タラリと汗を流した。

「まずい、見つかった」

極力音を出さないように歩いていたので、気付かれないと思っていたが……甘かった。

「あのジジイ、サイボーグなんじゃないの？」

なんて言いながら、焦燥感が襲ってくる。どうすれば…。

「ヒオウ！」

仲間の一人が声を上げる。後方から煙が物凄い勢いで迫ってきた。

「燻り出す気ね」

ヒオウは急いで前に進む。しかし、前方からも煙が迫ってきた。

「……………」

仲間達は無言で視線を交わすと、ヒオウに防護マスクを渡した。

「俺たちは劣りになる。ヒオウは先に進んでくれ」

「で、でも……」

「頼んだぞ」

ポン、と肩を叩いて、四人が次々に下へ降りていく。

ここで迷っている暇は無い。皆が敵を引きつけている間に、ヒオウは前へ進まなければならない……………。

レイとノアは、銃を持った者達に囲まれていた。

目の前に転移盤があるというのに、一歩でも動けば撃たれてしまう。

（くそっ……！）

ノアの胸からは今もドクドクと血が流れ出ている。一刻を争うといふの下……！

蒼白の美しい顔。

彼女だけでも、助けられないか…？

ノアを抱く腕に力を込める。

「ノア……どうか、生きてくれ……」

レイはノアに覆いかぶさるようにしながら、また前へと進み出した。

キーンッ！

銃弾が目の前で弾かれる。

「レイ様、次は威嚇では済みませんよ」

しかし、レイは止まらない。

仕方ない、といった風に、部下たちは銃を構えた。

シュン。シュン。

レイの肩を、腕を、腹を、足を、弾が掠めていった。それでもレイは何事もなかったかのようにズルズルと前に進んでいく。それはもう、執念であった。

「無様だな」

ヒューイの声がした。そして、背中に燃える様な痛みが走った。レイはついに倒れる。

「っ……」

振り返った先には、銃を構えたヒューイがいた。

「レイよ、もう破壊は止める事が出来んのか？」

「……ああ」

喘ぎながら、何とか答える。

「もう、お仕舞いだ……。あなたの野望も、ここで……」

「フン。では何故ここにいる」

「……」

「それはまだ、これが動くということだろう？」

「……」

レイはギリリ、と唇を噛んだ。あのまま諦めてくれていたら、今頃地球に飛んでいたのに……。

「では先に失礼するよ。お前の甘さに感謝するぞ」

ヒューイは笑いながらレイの横を通り過ぎようとした。が、レイはその足にがっちりとしがみ付いた。

「……最後まで足掻くか。愚か者め」

ヒューイはレイの頭を何度も何度も蹴ったり踏みつけたりした。しかし、レイは離れなかった。

「てめえだけは……行かせるかつ……」

「レイ……！」

ヒューイは銃を撃ち鳴らした。太腿に激痛が走る。

「うああっ……」

声を上げながらもなお、食い下がる。

「チツ……仕方ない」

ヒューイはレイの頭に銃を突きつけた。躊躇することなく、引き金を引く。瞬間。

ガシツと、手首を掴まれた。

「な……に？」

ヒューイは驚く。今まさに引き金を引こうとしていた手を止めたのは、今死の淵を彷徨っているであろう、ノアだった。動く事など出来ないはずだ。一体、何故……！

ノアは、銀の髪の間から、鋭い瞳をヒューイに向けていた。

「貴様……！？」

どこにこんな力があるのかと思うくらい、強い力で掴まれていた。

振りほどく事が出来ない。

そうしていると、カン、と音がした。何か筒のような物が落ちてきたのだ。それが何か認識する前に、辺りに白煙が広がる。

「これは!？」

「敵襲! 敵襲!」

部下たちが慌てているところに、銃弾が飛んでくる。部下たちは次々に倒れていった。

「くそ! さっきの鼠か!」

そう叫ぶヒューイの声。

(…止まった?)

騒ぎの中、ようやくヒューイの蹴りが止まったことに気付く。

ヒューイが腰に差していた短剣が目の前に見えた。

反射的にそれを引き抜く。そして、思い切り上体を起こし、全体重をかけてヒューイの体に突き刺した。

ヒューイはそれに気付き、銃を持っていない方の手で制そうとした。だが…。

彼は、一瞬、躊躇した。

「デュー……」

ヒューイが、息を呑む。

そこに、レイの短剣が深く刺さってきた。

「はっ……………」

それは腹部に、ズブズブと入り込んでいく。息が、出来なかった。それを見届けるかのように、ノアは床に崩れ落ちる。

「グ…………ぐあああっ！！！」

ヒューイが咆哮する。

「何故だ…………何故、お前たち親子は…………私の邪魔をするのだ…………何故…………デージエよ！ 何故お前が私を滅ぼすのだ！！！」

レイは髪の毛を掴まれ、グイ、と顔を上げさせられる。

口から大量に血を流し、苦痛に顔を歪める父の顔が目の前にあった。望んでいた光景が、今、目の前にあった…。

「ぐっ…………はあ…………レイ、よ……………」

ヒューイは苦しそうに喘ぎながら、語りかけてきた。レイもヒューイ同様、大きく肩を揺らし、全身を駆け巡る痛みに身体を振るわせていた。

それでも互いに目を見開いて、しっかりと相手の姿を捉えた。息遣いが重なる、距離で。

ヒューイは、ニヤリ、と笑った。

「お前は甘い……。こんな刺し方では死なん……」

と、今にも短剣から手を離してしまいそうなレイの手を掴み、しっかりと握らせた。

「もっと……。上に、引き上げる……。右の方、だ……」

レイは持てる力の全てで、短剣を上引き上げた。

ズブズブと肉に食い込む感触が伝わってきた。

それだけでもう倒れそうだったが……。ヒューイの小さな呻き声を耳にすると身体の中から力が沸いてきて、更に食い込ませた。

ヒューイは、倒れた。

そして、レイも倒れた。

「こ、この、愚か者が……」

短剣はヒューイの急所まで達しなかったようだ。まだ生きている。

「私を、苦しめるとは……。デージエ、め……。ゴフツ……」

吐き出される多量の血。もう生きていても苦しいだけだろう。

ヒューイはもう動けないと覚ったレイは、ノアを探した。

「…ノア…」

何とか身体を起こし、這い蹲ってノアの下へ行く。

「いき、るんだ…」

彼女の手を取り、強く握り締める。

何とか、何とか転移盤へ……そう思うのだが、もう動く事は出来なかった。

レイはノアに寄り添うようにして倒れ、そのまま意識を手放した…。

ドオン、ドオン…。

壁が爆発によりどんどん崩れ落ちていく。

「レイ！」

ヒオウが階段から下に飛び降りてきた。消えかかった白煙の中、倒れている者達の中からレイとノアを見つける。

「レイ！ ノア！」

二人とも瀕死の状態だとすぐに解った。

「ああ、どうすればっ……………」

今の状況で二人を助けるのは難しい。ヒオウは焦る。

「しっかりして！ こんなところで死ぬんじゃないわよ！」

「…ヒ、オウ…」

僅かに、ノアが反応した。

「ノア！ 大丈夫よ、今助けるからね！ 今っ……………」

「……………」

ノアは薄っすらと目を開けると、ゆっくりと手を挙げた。そして、ヒオウの後方を指差す。

「何？」

振り返ると、白く光る円形の床があった。

「あれは？ ……もしかして、レイのお母さんが造ったっていう転移装置？」

ノアは応えなかった。いや、応えられなかったと言った方が正しい……………。

「……………」

「何？ どうしたの？」

ヒオウはノアの口に耳を近づけた。

「……………た、すけ、て……………」

消え入りそうな声で、確かにそう言った。

「分かってるわ、大丈夫よ……」

ヒオウは彼女の手を取ろうとしたが、ノアはその手を動かして、レイの額に乗せた。そして、目を閉じた。

「……ノア？」

ヒオウは名を呼んだ。しかし、返事は返らない。

「ノア！」

彼女の手を取り、脈をみる。

「……ノア……」

ヒオウの目から涙が溢れ出した。彼女は、もう、旅立ってしまった……いた……。

「……分かったわ。アンタの遺言、護るから」

ヒオウは溢れ出てくる涙を手の甲でグイ、と拭い、レイを担いだ。レイはまだ生きている。それを助ける事が、ノアの最期の望みだ。ヒオウは転移盤に足を踏み入れた。二人は白い光に包まれる。

「……ノア」

レイが、呟いた。

それを聞いたヒオウは、また涙を流す。

ブウウン…。

『NOAH』は最後の転送を開始した。レイ、ヒオウの姿は一瞬の内に消え去る。

それから数分もしないうちに、リトウナには三つの核爆弾が落とされた。

外で激しい戦闘を繰り広げていた者達も、それを知らず必死に生きていた者達も、『NOAH』の中でただ苦しんでいたヒューイも、みんな、光に飲み込まれていった。

黎は、止める事が出来なかった。

ここで起こったこと、全て解っていたのに。

触れることも叶わない、叫んでも自分の言葉は届かない。ただ傍観しているだけが、こんなにも苦しいなんて。

ただ泣きじゃくりながら、消えていった愛しい者の命を見送ることしか、出来なかった……。

景色が変わる。

暗雲が立ち込め、冷たい雨の降り注ぐ街。

身体中が痛みに悲鳴を上げていたレイがそこで目にした者は、短い黒髪の少女だった。

大きく目を見開いた彼女を見て、レイは微笑みかける。
愛しい者が目の前にいる……。
そう、思っ

『…錯覚、だっただ…』

黎は、薄れ行く意識の中、そう呟いた。

現実 1

黎が倒れてから一週間。

外傷はほとんどなく、念のために精密検査もしたが何の異常も見られなかった。しかし、一向に彼が目覚める気配は見られない。

「聖さん、どうしよう、このまま黎が起きなかったら…」

乃亜は毎日毎日、眠り続ける黎を見ては泣きそうな顔でそう訊いてきた。

「大丈夫、じきに目を覚ますよ」

聖や李苑は、その度に優しい笑顔で励ますのであった。実際は、彼らにもこれからどうなるのか予想できなかったけれど…。

陽央から全てを聞いてから、聖はまず早乙女に連絡を取った。「彼らの潔白が明らかになった」と。

地球の危機を救おうとしてくれていた彼らは危険ではないと、報せたのだ。

そして、乃亜にも全てが報された。

陽央が話している途中から号泣し、時々「大丈夫？」と声をかけられながら、最後まで、きちんと話を聞いた。

その後しばらく黙った後。

「そっか…。うん、分かった…。良く、分かった…」

泣きながらも、何故か納得した様子だった。

「何が、分かったの？」

陽央は訊いた。

すると、肩を竦めながら、こう言ったのだ。

「黎が見ていたのは私じゃなかったんだよね」

その言葉に、陽央はハツとしたのだった。

以前、黎が乃亜に告白したいけれど出来ない、と悩んでいた。確かにそれは、潜在的に残るノアへの強い想いからなのだと思った。

「…でもね、乃亜…」

「あゝあ、私、黎のこと好きだったのに…」

陽央の言葉を遮り、今にも泣きそうな笑顔で乃亜は吐き出すように言った。

「でも、解っちゃったんだあ…。黎が倒れる前に、『ノア』って言ったの聞いて……。違和感感じたの。陽央の話聞いて……。納得……。ああ、この人、私のこと見てなかったんだ……。私じゃない“ノア”を見てたんだって……」

大きな目から、ボロボロと涙が溢れ出してきた。

「うえ〜……。ねえ、陽央、私、どう、したら、いいの……？ 解んない……」

「乃亜…」

どうしたらいいのだろう。

それは、誰にも解らなかった。ただ、涙を流す乃亜の頭を、そっと撫でてやった。

それから数日。

相変わらず眠り続ける黎の元へ、乃亜は学校帰りにやってきた。簡素な造りの病室。最初に黎を発見してから、ずっと眠り続けていた所と同じ病室。彼はまたそこに寝かされていた。

「黎…」

静かに呼んでみる。しかし返事はなかった。

コトン、と丸椅子を置き、それに座る。まったく反応しない寝顔を眺めていると、また涙が出そうになった。

「うっ…」

乃亜はギュツと目を閉じて、泣きそうになるのを我慢した。

「好き」という気持ちはどうにもならない。

記憶を取り戻したら恐らく別人のようになる、と聞かされた今でも、その気持ちはなくなることは無かった。たとえ、その瞳に映るのが自分ではないのだとしても…。

急に気持ちを变える事など出来なかった。

今はただ、黎が無事に目覚めてくれるのを待つだけ…。

「…また、来るね、黎…」

目に滲んだ涙を拭い、乃亜は病室を出て行った。

静かにドアが閉められた後。

何かに導かれるように、黎の目が開いた。

「……………」

真白な天井に、今までいた世界の景色が映る。

「ノア…」

自然に涙が溢れ、ポタリと枕に落ちた。

ゆっくりと現実の世界が見えてきて、黎はムクリと起き上がった。

静かな空間。

窓の外には陽の光溢れる美しい景色。かすかに聞こえる子供達のは

しゃぐ声。

体が震えてきた。

この美しい世界に彼女はいない。その現実。

「う…う…うあああつ…!!」

気が付いたら、傍にあった丸椅子を掴み、振り上げていた。

ガシヤアアアンツ！

凄まじい音に、診察中だった聖は顔を上げた。

「せ、先生、今のは!？」

看護師が驚いて音のした方を見る。今呼び入れようとしていた患者のカルテが、ヒラリと落ちる。

「すみません、ちょっと待っていてもらえますか？」

そう言い、聖は黎の病室へと向かった。

現実 2

黎のいる病室へ飛び込むと、ヒュウ、と風が舞い込んできた。

バタバタと揺れるカーテン。

下半分割られた窓。

床に散乱する硝子の破片。

丸椅子を持ち、立っている黎。

その光景を見た聖は、全てを理解した。

黎は記憶を取り戻した。そして、愛する者を失ったことで錯乱しているのだということ。

「うわあああ！」

更に椅子を振り上げる黎を、止めに入る。

「黎！ 落ち着け！」

腕を掴み、椅子を取り上げる。

「放せ！」

黎は抵抗するが、聖の力の方が上だった。あっさりと押さえつけられ、ベッドに座らせられる。

しばらく抵抗したが まったく歯が立たなかった。黎はフツと力を抜き、今度はまったく動かなくなった。

そこへ、先程まで病室にいた乃亜、そして自宅の方にいた陽央が駆け込んできた。

「黎……！」

黎の目覚めに、乃亜は一瞬だけ笑みを浮かべたが、その様子に表情が曇った。陽央も同様だ。

陽央はゆっくりと黎のもとへ行き、膝をついた。

「黎、良かったわ目が覚めて。…気分はどう？」

「……………」

黎は何も答えなかった。

それを見た乃亜も、黎のもとにやってきた。

「…黎？ 頭……大丈夫？ ごめんね、私のせいで怪我しちゃって……………」

そつと、包帯の巻いてある額に触れた。

黎の体がビクツと震える。

「…触るな」

黎は乃亜を睨みつけ、小さなその手を払いのけた。

「黎……」

陽央が非難の声を上げる。しかしそれを無視して黎は立ち上がった。

「…もう、俺に、関わるな……」

と、足早に病室を出て行く。

「アタシ、追いかけるわ」

陽央は聖に目配せする。聖は軽く頷いた。

「頼む」

陽央が出て行ってから、乃亜へと視線を転じる。

彼女は、固まったまま動かなかつた。黎の座つてたベッドを見つめたまま。

相当シヨックだったのだろう……と、聖は何かいい言葉はないかと頭を巡らせた。すると、聖が口を開く前に乃亜が言葉を発した。

「…ねえ、聖さん。黎、別人になっちゃったのかな…？」

答えかねていると、乃亜は更に続けた。

「私、そうは思わないよ…」

「…え？」

その言葉は意外だった。

その真意を伺ってみる。

「だって、手が、震えてた。…ああすることが、辛そうだった」

乃亜は聖を振り返り、僅かに笑みを漏らす。

「ねえ、私、まだ頑張ってもいいかな？」

その言葉に、聖も笑みを返した。

「ああ、こっちがお願いしたいくらいだよ」

そう言う聖に、乃亜は大きく頷いた。

黎は外に出ると、早足に緩やかな坂道を登っていった。

当てがあつたわけではなく、ただこちらに足が向いたのだ。そして、行き着いたのは 大きな川が見渡せる、小さな公園だった。少し肌寒い風が優しく、絶え間なく体の横を通り過ぎていく。

二年前、ここに来た時。

乃亜に連れられて初めてこの景色を見た時。

あの時は何も解らなくて…。見るもの全てが新しく、輝いて見えた。この景色も、傍らで笑っていた乃亜も。

でも今は。

ただ、辛いばかり。

「黎、いた！」

息を切らして陽央がやってきた。

「良かった、ここにいたのね。もう、心配したじゃない」

優しい口調だ。記憶が戻ったのを知っているから、気を遣っているのだ。

「…黎？ …記憶、戻ったのよね？」

顔を覗き込むように言う。黎はそれから逃げるように顔を背けた。

「ああ…」

「そう…。ねえ、黎。今は辛いでしょうけど、少し時間が経てば、少しは楽になるわよ…」

その言葉に、黎は陽央を睨み付けた。

現実 3

「楽になるだつて…？ …お前がそうだからか？ 一緒にすんな！
！ 俺とお前では違う！！」

「アタシだつて辛かったわよ！ でも…確かに、アタシは記憶喪失のアンタを抱えていたし、環境のまったく違うこの世界に戸惑う事が多くて、どっぷり悲しみに浸っている場合じゃなかったから、立ち直りも早かったんだろうと思うけど…。でも、大切な人達を失った悲しみを、忘れたわけじゃないわ…」

陽央はなるべく落ち着いた口調で、黎に語りかける。どれだけ悲痛な想いを抱いているのか、それが解るから。そして“遺言”を守りたいから。

「今でもリトウナの夢にうなされる事もある。でもね、アタシはこう考えてるの。ここに来たのは偶然なんかじゃない。…ノアと、黎のお母さんが、ここに導いてくれたんだって」

「…！」

黎の瞳が大きく見開く。

「ここでアンタを見ていて本当にそう思ったわ。だつて…」

「ああ、そう」

黎は陽央の言葉を低い声で遮る。

「じゃあ何か？ この場所に飛ばされて、“乃亜”に出会って、優しい家族の中で笑っていられたのは、皆ノアのおかげだって言うのかよ！ …冗談じゃねえよ！」

この二年間の記憶は鮮明に覚えている。

優しい兄夫婦とかわいい姪っ子。隣には“乃亜”がいて。ほのかな想いまで抱いて。キラキラと輝くような幸せの中にいたのだ。

横暴な父の代わりに。

一度も傍にいてくれなかった母の代わりに。
敵意しか向けない兄弟の代わりに。

最も愛しい存在の代わりに。

無意識の内に望んだもの、全てを手に入れて。
緑溢れるこの美しい世界で、何もかも忘れて生きることが……それが彼女の願いだったとも言うのか！

何も知らないで、幸せになることが。
願いだとも言うのか……。

黎は大きく頭を振った。

(認められない)

誰が認めても、自分だけは。

(こんな、現実！)

ノアのいない世界など。

「ノアはあの時……一緒に死んでもいいって言ったんだ！なのに俺一人置いて、幸せを願うだなんてありえねえ！」

「そんなこと！だってノアは最後に『助けて』って言ったのよ！だからアタシはアンタをここに連れて来た！」

「そんなの知らねえよ！」

「黎！聞いて、本当のことよ。ノアはアンタに生きていて欲しかったのよ！」

「黙れ！」

黎は陽央から逃げ出す。

真実などどうでも良かった。

ただ、ここに一人で幸せでいることが耐えられなかったのだ…。

徐々に暗くなってきた空からは、冷たい秋雨が降り注いできた…。

相反する心 1

結局、この世界ではどこにも行き場はなく。

無理やり陽央に連れ戻された黎は、櫻井家の自室に閉じこもった。時々陽央や聖が様子を見に来てくれるが、一切言葉は交わさなかった。

李苑が食事を運んできてくれても、それに手を出す事はなかった。

浅い眠りにについても、見る夢は同じ。

愛しいノアの最期。

『……………』

何かを訴えるような、そんな瞳。

(何て言ったんだ)

ノアは、何を伝えたかったのだろう。

薄く開いた唇で。

何か、言葉の形を作っていた。

(一緒に逝こうって……………言ってくれよ……………)

そうして、目が覚める。

頬を伝う涙は、枯れる事がない。

そんなことを何回も、何回も繰り返した。徐々に“現実”がなんなのか、分からなくなるほどに。

そこに、夢見心地の世界にいた黎を引つ張り出す声が響いた。

「まーた寝てる〜!」

ボタン、と勢い良くドアを開け、部屋中にキンキン声が響いた。

「もう夕方だよ! 起きて起きて。カーテンも引きつぱなしじゃ余計に気分落ち込んだんじゃうよ〜?」

と、シャツとカーテンが開け放たれる。

傾きかけたオレンジの太陽の光が、部屋の中いっぱい飛び込んできた。

「れーい、おーきーてー!」

容赦なく体を揺さぶられる。

はじめは無視を決め込んでいた黎だが、あまりの喧騒にガバツと飛び起きた。

「やーっと起きた!」

ぶう〜っとむくれながら、目の前の少女は言う。そして、次の瞬間にはパツと明るい笑顔を見せる。

「おはよう! 黎!」

何の悪びれた様子もない乃亜は、制服姿だ。きつと学校帰りに直接ここに来たに違いない。

「やっと中間終わったんだ。しばらく来れなかったから寂しかった

でしょ？ はい、これね、テストの問題。気分良くなってからでいいから提出しろって先生が。あとね、これが……」

まだカバンをガサガサやっている乃亜を尻目に、黎は立ち上がり、部屋を出て行く。

「あつ、ちょっと、まだ渡すものが」

追いかけてくる乃亜。

黎は無視して、階段を下りていった。

そして、この二年で染み付いた癖なのか リビングへと入っていく。

リビングには李苑と雛がいた。

テーブルの上に散らばった色とりどりのクレヨンと白い画用紙。

「できた〜！」

雛が嬉しそうに一枚の画用紙を持ち上げた。

「上手に出来たわね、雛ちゃん。……あら、黎くん、おはよう」

李苑はにっこりと笑う。

「ちょうど良かったわ、今雛ちゃんが黎くんの似顔絵を描いていたのよ。見てやってくれる？」

「れいくん、みて〜！ ひなね、れいくんかいたんだよ！」

雛はその絵を持って、黎の元にやってくる。

画用紙いっぱい顔が描いてあり、その周りには赤や黄色で花らしきものがたくさん描かれていた。

「これがチュリプーで、これがしゃくりやで、これがひまわり！ れいくんお花のおせわしてるの〜」

記憶がなくても植物には興味があった…。

良く花壇の手入れをしたり、植物園に出かけていたのを雛は見ていたのだ。

無垢な笑顔に、思わず表情を崩しかける。が、そこに乃亜が来たので、パツと身を翻し、玄関へ向かった。

「あつ、黎ってばー！」

ボタン、と扉の向こうに黎は消えた。

乃亜はふう…と溜息をつく。

「…うるさくし過ぎるかなあ…」

落胆の色を隠せない彼女に、李苑は優しく微笑みかける。

「ありがとう、乃亜ちゃん。黎くんには…もう少し時間が必要なのかもしれないわね」

「はい…」

しばらく沈んでいた乃亜だが、「よしっ」と頷いた。

「李苑さん、私、頑張ります！ 明日も来ます！ それじゃあ！」

「はい」

「のあちゃん、バイバーイ」

「バイバイ、雛ちゃん」

笑顔で乃亜を見送った後。
李苑は顔を歪めた。

「いたた…」

と、大きくなってきたお腹をさする。

「おかあちゃん、ぼんぼりたいの？」

雛が駆け寄ってきて、心配そうに李苑のお腹に手を当てる。

相反する心 2

「うん、大丈夫……。赤ちゃんがいつぱい動いたの。乃亜ちゃんに頑張れ〜って言ってたのかな？」

「つばしゃくん、がんばれ言ったの？」

お腹の子供は、健診で男の子だと判明していた。名前ももう決めてある。

「そうね。皆、元気になりますように、って」

「つばしゃくん、えらいねえ」

雛はニコニコしながら、小さな手で弟のいる母のお腹を撫でてやる。その光景に、李苑はひと時の幸せを感じるのであった。

外に出た黎は、当てもなくブラブラ歩いた。その僅かな時間の間、どんだん日は暮れ、辺りは暗闇に包まれる。眼下に広がる街は次々に明りを灯し、地上は星の海と化した。冷たくなった風を受け、僅かに首を窄める。

許されたいわけじゃない。

でも、あの暖かい場所にいると、心が崩されそうになる。何事もなかったかのように、いつもと同じに接されて。

今までと同じに自分を受け入れてくれている人達。それに応えそうになる。

それが辛かった。

楽な方に逃げたら、全てを否定するようで。

彼女の存在すら、無かったことになりそう。

いっそ、責められた方が良かった。

お前はここで、幸せになる権利などない、と。

リトウナの人々やノアと一緒に、滅びるべきだったのだ、と。

誰か。

そう、言ってくれ…。

周りから見ても、僅かではあるが黎の表情に変化が見え始めていた。大人である陽央達の前では気を張っているのか表情を変えることは無いが、唯一、聖の娘、雛の前だけでは、柔らかい顔をするようになった。

子供の持つ純真さが、そうさせているのかもしれない。

反面、時折辛そうな表情も見せるようになった。

ここにいることを苦しんでいる。そんな風に見受けられた。

「どっついたらいいのかしら…」

陽央は溜息する。

「そうだな……」

聖は天井に目をやった。恐らく、またベッドに転がっているであろう、黎を見上げるように。

「そろそろ、見守るだけの時期は終わりがもしれないな」

「どうするの？」

「うん……。今のままじゃ、乃亜ちゃんもかわいそうだし……」

「アタシもかわいそうって言って」

真剣な顔で突っ込む陽央に、聖は苦笑しながら続けた。

「叱咤激励、してみるか」

「分かったわ」

陽央は頷いた。

「ところで……しっただげきれい、って何？」

「……」

まだここに来て二年しか経っていない陽央は、いくら頭が良いからと言って、分からない単語が多々あるのであった……。

「こんにちは〜」

夕方になり、学校が終わった乃亜は櫻井家にやってきた。

「いらっしやい、乃亜」

出迎えたのは陽央。

「また来てくれたのね。ありがとう」

「ううん、私が勝手にやってることだから」

乃亜は明るく笑ってみせる。

「うん、でもありがとう。…あ、李苑ちゃんが出かける前にシュークリーム作ってくれたの。一緒に食べてねって言ってたわ」

「本当？ わーい！ じゃあ、後でいただくね」

「ええ。アタシ外にいるから、黎に振られたら呼んでね」

「むう。今日こそ心開いてもらおうからっ」

ちよっぴりふくれっ面で、乃亜は階段を上がっていく。

今日も黎は部屋に閉じこもっているようだ。

いつも乃亜が来ると部屋から出て行ってしまっけれど…。

でも、思うのだ。

何故、乃亜が来る前から姿を消さないのか。それは、少しでも自分に逢いたいと思ってくれているからではないのか。

そんな希望を持って、今日も部屋のドアをノックする。

「黎？ また来たよ」

ノックの音に、黎は顔を上げた。

「……………」

一番、逢いたくない相手だ。

乃亜を見ると、辛い気持ちだけが表に出てくる。顔も見たくないし、声も聞きたくなかった。

相反する心 3

ガチャリ。
ドアが開く。

「こんにちはつ。…あれっ、今日は起きてたんだね」

いつもの笑顔で、乃亜は部屋に入ってくる。

そして、ベッドに座っている黎の目の前の床に座り、カバンを広げた。

「これは今日の授業のノート。黎、いくら天才だからって、あんまり休みすぎるとついていけなくなっちゃうよ」

と、一箇所を留めた何枚かのルーズリーフを差し出す。しかし黎は反応を示さず、乃亜は仕方なくベッドの上にそれを乗せた。

「来週は三者面談もあるんだよ。黎は聖さんに来てもらう？ 李苑さん身重だし、陽央じゃちょっと頼りない……あつ、これじゃ陽央に悪いね」

あはっ、と肩を竦めて笑う可愛らしい姿にも、今の黎は苛つくばかり。

しかし乃亜は、いつも寝ていた黎が起きているのが嬉しくて、つい饒舌になった。

「クラスの皆も、黎がいなくて寂しがってるよ。あの天然がいないと教室が静かだって。でも奈津子には『一番寂しがってるのはあんたでしょ！』なんて言われちゃって……」

「…帰れ」

耐え切れなくなった黎は、低い声でそう言った。

「あつ……ごめんね、うるさかった？ つい喋り過ぎちゃった。…
…じゃあ、明日また来るね」

なるべく明るい笑顔を作り、乃亜は立ち上がった。

「来なくていい。…うんざりだ」

黎はまたも冷たく言い放つ。

乃亜は怯みそうになるが……ギョツと拳を握り締め、耐えた。

「また来るから！」

「来るな！」

「来るっ！」

負けずに言い返す乃亜だが……その目には、うつすらと涙が浮かんで来た。

それを見て、黎は顔をしかめる。

「うつとうしいんだよ！ はっきり言わねえと分かんねえのかよ！」

「分かってるよ！ だけど、早く黎に元気になって欲しいからっ…」

「…お前が元気になって欲しいのは、“櫻井黎”だろ！？」

「えっ…？」

意外な言葉に、乃亜は一瞬言葉を失う。

「お前が心配してるのは櫻井黎であって、俺じゃねえ。悪いが“黎”はもういない。だから、もう俺に関わるな。いい迷惑だ」

乃亜は、しばらく立ち尽くした。

櫻井黎という人物は。

赤ちゃんみたいに素直で。

天使のような笑顔で笑う。

少し釣り目の鋭い瞳を、弓の様に細めて、優しい声で名前を呼んでくれる。『乃亜』、と。

でもそれは記憶を失った状態だったからで。

元々の“レイ”とは別人のように違うものだった……。

黎はもういない？

この人は、別人？

私は……。

乃亜は、ゆっくりと口を開いた。

「違う……。貴方は黎だよ。黎もレイも……。貴方だよ」

大きな力強い瞳で心を射抜かれる。

「うまく言えないけど……。 “黎” は貴方の一部なんだよ。記憶を失っても、貴方は貴方で、あの黎は貴方の本質の部分で……。えっと……。ごめん、うまくまとまんない。でも、だから……。私は貴方を好きで……。だから、また来るよ」

「俺は……。お前なんか大嫌いだ」

乃亜につられたのか、静かにそう告げた。だが、彼女は笑った。

「うん、いいよ。仕方ないもん……。でも、やっぱり黎には元気になつて欲しいから」

黎はギリツと奥歯を噛んだ。

“それじゃ駄目なんだ”

伏せていた瞳を、乃亜に向ける。その黎の目を見て、乃亜は背筋に悪寒を感じた。

「へえ、随分愛されてんだ、俺」

唇の端を上げ、笑う黎の顔は、今まで見たことのないくらい狂気を帯びていた。

乃亜は思わず後ずさりする。それを見た黎はクツと笑い、勢い良く立ち上がると乃亜の腕を掴み、そのまま壁に押しやった。

「黎っ……!?!?」

「なんて顔してんだよ。お前が言ったんだ。“俺”が好きだってね。お前がどう思ってるのか知らねえけど、俺は“黎”みたいに優しくしねえからな」

と、いきなり口付けてきた。

相反する心 4

あまりに急な出来事で、乃亜は一瞬頭が真白になった。しかし、無理やり口を開けさせられ侵入してきた舌に、ようやく手足をバタつかせて抵抗する。

「んんっ!!」

声も上げられず、痛いほどに掴まれた腕は振り解けない。バタつかせる足も黎の足で押さえられてしまった。気が付いたらブラウスの上から胸を強く掴まれていた。

「や…やだっ、黎っ!」

何とか顔を逸らし声を上げるが、黎は止めない。

「いやっ…!!」

小さな叫びを無視し、滑らかな太腿を撫で上げる。ビクリと震える小さな体。

「俺が好きなら、ちゃんと相手しろよな」

耳朶を甘噛みしながら嘯くと、乃亜の抵抗がピタリと止んだ。黎は静かに顔を離し、乃亜を見た。きつく閉じられた目から流れ出る涙。震える小さな肩。

「……分かっただろ」

黎は嘆息し、手を離してやった。

「俺は“黎”じゃない」

「っ」

乃亜は黎を押しのと、勢い良く部屋を飛び出して行った。黎はそれを見送ることなく、ベッドを振り返る。

残された鞆がぽつんと、床に落ちていた。

ベッドの上には、乃亜の字で書かれた授業のノート。

「ったく…。これで静かになるな…」

そう、静かに。

もう二度と乃亜がここに来ることもないだろう。

パタリ、と床に雫が落ちた。

パタリ。またひとつ、落ちた。

「っ」

後ろによろけて、壁に背を預ける形となる。

何故こんなものが？

あんな、華のように笑う少女を傷つけておいて、こんな涙を流す資格など無いのに。

（俺は“ノア”だけを愛してるんだ）

その想いだけは永遠に変わってはいけないのだ。
彼女を失った悲しみを。
愛した記憶を。

ずっと、この胸に抱いていなければ。

それでも流れ落ちる涙。

その意味を、知ってはいけなかった。

二度と掴む事の叶わない華へ募る思慕を、断ち切らねばならなかった…。

静かに階段を下りる。

(なあ、ノア……)

誰もいないリビングを通り、ひっそりとしたキッチンに入る。

(俺も、そっちに行っても、いいだろ……?)

食器棚の引き出しから果物ナイフを取り出して。

静かな微笑みを湛えながら。

その刃を、手首に押し付けた…。

さよなら 1

「ん？」

足音がしたような気がして、陽央は顔を上げた。
黎の代わりに花壇の手入れをしていたところだったのだが
は見当たらない。 人影

「気のせいかしら」

と、また花壇に目を向けた時。
庭に白いワンボックス車が入ってきた。

「あら、お帰りなさい」

立ち上がると、運転席から李苑が降りてきた。

「ただいま」

李苑は助手席に乗っていた雛を下ろし、両手に重そうな買い物袋を
持った。

「ああん、またそんな重い荷物持って！ 買うものいっぱいのは
呼んでって言うてるのに〜」

「ごめんなさい、こんなに買うつもりじゃなかったんだけど、つい
…」

「それはアタシが運ぶから、李苑ちゃんは雛ちゃんと家に入ってて

！この間も聖くんに怒られてたじゃない。入院するところだったって…」

「…そうね、ごめんなさい」

申し訳なさそうに謝る母を見てか、雛もちよっぴり泣きそうになりながら、

「ごめんなちゃい…」

と謝る。

「ププ、雛ちゃんを怒ったんじゃないわよ」

笑いを堪えながら、陽央は手洗い場へと向かう。

「それはそこに置いていてね！雛ちゃん、お母さんを家に連れてってね！」

「はい！」

頼まれて使命感に燃えた雛は、李苑の手をグイグイ引っ張って家中へ入っていった。

「ただいま…」

雛とともに家の中に入った李苑は、何となく重い空気を感じた。雛の靴を脱がせ、手を繋いでリビングへと向かう。

中は静かだった。

ダイニングのテーブルの上に、乃亜のために作っておいたシュークリームがそのまま置いてあった。それを見て、ひどく胸騒ぎがした。雛が手を離し、リビングにある本棚から絵本を取り出すのを横目で見ながら、キッチンへと足を踏み入れた。

そこには、黎が立っていた。

こちらに背を向けるような感じで。

李苑は名前を呼ぼうとして　キラリと光るものを目にした。果物ナイフの刃が黎の手首に押し当てられている。

「　黎くん!!!」

バツと黎の右手を掴み、上にねじ上げる。その衝撃で黎の手の力が抜け、カランカランと音を立ててナイフは床に落ちた。

「…離せ!」

ナイフの落ちた音で我に返った黎は、カ一杯李苑の手を振り払った。

その拍子に李苑は後ろによろける。黎は素早くナイフを拾い上げた。

「駄目!　黎くん!」

李苑は黎に飛び掛る。

「離せっ!!!」

「駄目よっ!!!」

「俺はノアのところに行くんだっ！」

「黎くん！」

と、その時。

僅かな間ではあるが、激しいもみ合いをしたせいでお腹に負担がかかったのだろう。一瞬腹部に痛みを感じ、李苑は体から力を抜いた。だがそのせいで力の均衡が崩れ、黎は思い切り李苑を突き飛ばす形になってしまった。

カウンターに勢い良く背中を叩きつけられ、床に倒れる。

さすがの黎も、ハツとした。

「おかあしゃん？」

雛がカウンターの影から覗き込んでいた。李苑はその声に起き上がろうとしたが……腹部を中心に体中に激痛が走り、動く事が出来なかった。

「……うわあああん、おかあしゃあんっ！」

異常を察したのか、雛はわあわあ泣き出した。

「何の騒ぎっ!?!」

外から陽央が戻ってくる。

キッチン内に倒れる李苑を発見すると、陽央は青ざめた。

「…聖くん！」

くるりと踵を返し、医院の方へ走る。

「うわあああ、れいくんのばかーっ!!」

雛の喚き声を聞きながら、しかし心はどこか遠くへと行ってしまっ
たかのような感覚に襲われた。

みるみる青ざめていく李苑の顔。額から流れ出す汗。両腕で包まれ
たお腹には 皆で誕生を心待ちにしていた赤ちゃんが。

「あ……」

何かしなくては そう思うのだが、体が硬直して動かない。

「李苑!!」

聖が駆け込んできて。

皆が色々叫んでいても。

自分の体を揺さぶられても。

動く事が出来ない。まるで何かに縛られているように。

救急車のサイレンがして、隊員達が駆け込んできた。

わあああ騒がしい中で。

黎には、李苑の声が聞こえた。

この喧騒の中、とても静かに。

「黎くん……生きて」

パチン、と弾けるように、意識が戻ってきた。

「……李苑……ちゃん……」

眩いた途端、バシツと背中を叩かれた。

「あんたも行くのよ！　グズグズしないで！」

さよなら 2

救急車には、櫻井医院に先代院長の時から勤めるベテランの看護師長が乗り込んでいた。

聖はどうしたのだろう……と考えているうちにタクシーがやってきて、雛を抱っこした陽央とともに、それに乗り込んだ。

車内ではすすり泣く雛を、陽央がずっと励ましていた。

「…聖くんは…？」

黎は先に行く救急車の赤い光を目で追いながら、小さく呟く。

「患者さん、放っておけないからって…。こんな時に限って混みあってるんだもの…」

陽央の声音から、焦りが感じられる。

もし李苑に、赤ちゃんに何かあったら。
皆が笑顔で取り囲むダイニングテーブルが脳裏を過ぎると、体中が震えだした…。

タクシーを降り、病院内に駆け込む。

受付の案内の通りに廊下を進んでいくと、処置室の前に看護師長が立っていた。

陽央は師長に駆け寄り、何か言葉を交わしている。

黎は少し離れたところからそれを眺めた。

しばらくして処置室から医師らしき人物が出てきて、陽央と師長に語りかけてきた。
黎のいる場所までははっきりと聞こえないが、「危険だ」という言葉だけ、耳に届いた。
雛を師長に預けた陽央は、血相を変えてこちらに走ってきた。
黎とのすれ違い際に「聖くん」に電話してくるから、ここで待っていて、と言いつつ、また走っていく。

（危険……）

黎の顔は蒼白になる。

何ということをしてしまったのだろう。後悔の念だけが胸の中に渦巻いた。

それから、どのくらいの時間が流れたのだろう。

突っ立ったままの黎の横を、スッと聖が通り過ぎた。

「あつ……」

声をかける間もなく聖は看護師長の元へ行く。

師長の話を何度か頷きながら聞いていた聖は、話が終わると大きく息を吐いた。

そして、黎を振り返る。

黎はビクツと体を振るわせた。

「……黎」

思いの外、静かな声で名前を呼ばれる。

「座つたらどうだ？」

しかし、黎は動く事が出来ない。そんな彼を見て、聖はまた溜息する。

「そこにいると邪魔だ」

と、黎のところまで歩いてきて、腕を掴むと陽央達のいる長椅子まで引つ張った。

しかし黎は椅子に座ることも、聖の顔を見ることも出来なかった。

「…ごめん」

喉の奥から搾り出すようにしてやっと声を出す。

「ワザとじゃないんだろう」

「…！」

黎は顔を上げる。

こんな時にまで、思いやる言葉をかけてもらえるなんて思わなかったから。

「…なんで…なんでだよっ…！」

顔をクシャクシャにして叫ぶ。

「だって危険な状態なんだろう？ 李苑ちゃんも赤ちゃんもっ！」

「…そうだな」

「だったら俺を責めろよ！俺のせいでこんなになっただ！俺のせいなんだ！何で止めたんだ……俺なんか……あの時、死んでれば良かったのに……！」

「黎っ！」

陽央が立ち上がった。

と同時に、パアン、と頬を叩かれた。叩いたのは聖だ。

ハツとして聖を見る。

聖はジツと黎を見据えていた。その瞳に静かな怒りの炎を宿して。

「…黎」

感情を出さない、静かな声。

「お前は、いつまで“ノア”から逃げるつもりだ」

「」

（逃げる……？）

「大切な人を失ったらどんな気持ちになるか……。それはお前が一番解っているだろう？……そんな風に、投げやりになるんじゃない……」

「聖くん……」

その時、手術室の扉が開いて、中から青い予防衣をつけた看護師が出てきた。

「櫻井先生、中へ！」

「はい」

聖はチラリと黎を見て、それから陽央に目をやった。

「頼む」

「うん」

陽央は頷いた。手術室の中へ消える聖の姿を見送り、黎に目をやる。そして看護師長に雛を預け、この場を離れさせると、黎の頭をガシツと驚づかみにして椅子に押し込んだ。

「座ってなさいよ」

と、自分も隣に座る。

「…ここに来てから、もう二年以上経ったのね」

コツン、と壁に頭を持たせ掛け、陽央は話し出す。

「でもあんたの時間は止まったままだった。記憶がなかったからね。仕方ないんだと思ってた。何もかも忘れて、新しい人生を生きるのもいいのかなって。

でも、本当はそうじゃなかったのよね。忘れてなんかなかった。…だから、乃亜に“好きだ”って言えなかったんでしょう？ ノアに負い目があるから。ノアだけを愛していたから」

「……」

「逆に言えば……乃亜も愛してしまったから」

黎の瞳が大きく見開かれた。

「ノア以上に愛せる人物を、無意識に排除しようとしてたんでしょね」

「そんなことっ……」

「あるんでしょ？」

ギロリと睨まれて、グツと言葉を飲み込む。

「乃亜に惹かれていくあんたを見ているのは結構辛かったわ。本当に大事なことを忘れてしまったんだと思って……」

でもあんたが乃亜に告白できないって言った時……思ったの。黎は、忘れてなんかいない。ずっと罪の意識に苛まれて生きてるんだって」

陽央はそつと黎を見た。彼はギュツと唇を噛んで、目を背けている。

「ねえ。いつまでそうやっていけばいいの？ ノアが……あんたに生きていて欲しいと言った言葉を、いつになったら受け入れられるの？」

「たとえばノアがそう望んでも、俺は……！」

さよなら 3

『黎くん……生きて』

李苑が言った言葉が頭を過ぎる。

「俺は……」

ノアは一緒に死のうと……。

「……」

あの時。

ノアがヒューイの放った銃弾に倒れた時。

彼女は本当に何も言葉を発しなかったのか？

必死に口を開けて、何かを言っていた。その言葉は、本当に聞こえなかったのか？

『レイ……生きて』

「……」

息を呑んだ。

ノアの声ははつきりと……この耳に残っている。

『いつまで“ノア”から逃げるつもりだ』

(…そういつ……ことか…)

過去の出来事を受け入れず、現実さえも拒否して、そして自分の存在さえも消してしまおうとした。

大切な言葉から。

大切な人から。

全てから目を逸らして。

けれど。

「俺には……ここで生きていく権利なんかない……」

「義務ならあるでしょう?」

陽央は穏やかに言う。

「アタシ達を助けてくれた乃亜や聖くん達、そして、ここに導いてくれたノアとアンタのお母さんの為に……ね」

「……『NOAH』は座標を指定していなかった。ここに来たのは偶然だ」

「必然よ」

きつぱりと陽央は言い放つ。

「でなきや、こんなにも幸せな環境にはいないわ。やっぱり、ノアが導いてくれたのよ。黎に幸せになって欲しいから」

「…思い込みだろ」

項垂れながらそう言う黎の顔に、僅かに笑みが浮かぶ。それを横目で見て、陽央にも笑顔が浮かんだ。

「いいのよ、変わっても。人の心は、変わっていくものなんだから。だから……幸せになって、いいのよ」

「…誰の言葉？」

「…さあね。誰だったかしら」

遙か遠くに思いを馳せながら、穏やかにそう言った時。

手術室の扉が再び開いた。

黎と陽央は勢い良く立ち上がり、出てきた医師に飛び掛った。

「李苑ちゃんの……姉の容態は!？」

掴みかかられた医師は少し驚きながらも、笑顔で応えてくれた。

「ええ、大丈夫です。赤ちゃんも、無事に生まれましたよ」

「っ、本当ですか!」

「はい。今、櫻井先生が……お兄さんが付き添われてますから」

「あ……ありがとうございました!」

陽央は床に頭が着くくらい、思い切り頭を下げた。

黎は大きく息を吐いた後、同じように深々と頭を下げた……。

それから三十分後。

黎は、一人で病院を抜け出そうとしていた。

李苑には聖がついているし、陽央が待機してくれている。

二人とも無事だったという安堵感に包まれ、そしてリトウナの人々やノアへ想いを馳せながら玄関前ロビーに出た。

とつくに診療時間は過ぎていたので、ロビーにはまったく人影がなかった。自動扉の向こうは、暗い闇に包まれている。

その自動扉が開いた。

開くのと同時に、小さな人影が飛び込んでくる。黎は足を止めた。

息を切らし駆け込んできたのは 乃亜だったのだ。

乃亜の方も黎に気付き、足を止めた。

しばらくそのまま時間が流れ…。

ハツとしたように乃亜が黎に飛び掛った。

「李苑さん！ 李苑さんは！？ 倒れたって聞いたけどっ…」

「…あ、ああ…。無事だよ…。赤ちゃんも、今生まれたって…」

「本当！？ ああ、良かったっ…。…どうしたのかと思って…。おめでとっっ！」

「…俺に言われてもな」

「あっ…。…ああっ！」

乃亜は黎の腕を掴んでいる事に今更ながら気付き、思い切り突き飛

ばすように離れた。

気まずい雰囲気は漂う。

お互い視線を逸らし、立ち尽くす。

黎は今掴まれた腕にそっと手を添えた。こんな風に触れられる事も、もつないだろうと思いつつながら。

「…ごめん」

ボソッとそう呟くと、乃亜を見ないようにしながら玄関に向かって歩き出した。

さよなら 4

乃亜を通り過ぎると、自動扉がガーッと音を立てて開く。足を止めることなく、外へ向かおうとする。

「…待つて！」

乃亜が叫んだ。

黎は足を止め、ゆっくりと振り返る。乃亜は振り返らず、そのまま立っていた。そして、右手を横に出す。

「そこ！ そこ座って！」

「…?」

どうやらロビーに並んでいる椅子に座れと言っているようだ。黎は暫し迷ったが……言うとおりに乃亜からは少し離れた椅子に座った。すると、乃亜はつかつかとやってきて、黎の目の前に立った。乃亜の顔を見れず、視線を横に向けたままでいる。

「うりゃああっ！…！」

という叫び声とともに、頬に拳がめり込んできた。

「!？」

黎は隣の椅子に倒れ込む。

大した力ではなかったのだが、まさか殴られるとは思っていなかった。なので、まったく構えていなかった。おかげで脳がグラグラと揺れ

る。

「これはさっきのお礼よ！」

乃亜はキツと黎を睨みつける。しかし…。

「…いつ…いつたあ〜い！」

黎を殴った右手をブンブン振り回し、涙目になる。そして、

「人を殴るって、殴った方も痛いんだ…」

なんて呟いている。

黎はまだグラグラする頭を軽く振り、殴られた頬に手をやった。先程聖に叩かれたところと同じ所を……。しかも今度は拳で殴られるとは。頬がジンジンと腫れあがってくるのが分かる。

それにしても、この乃亜は…。

怒っているのだろうが、傍から見ていると一人で喜劇を演じているかのようだ…。

そんな黎の視線に気付いたのか、乃亜は真っ赤な顔をして怒りの表情を作る。

「私、すっごく怒ってるんだから！ あんなことしてっ………ホント、傷ついた！」

「………」

それはそうだろう……と、顔を逸らす。

「黎なんてっ……て、思った。けど…」

一瞬悲しそうな顔をした後、乃亜はまた目を吊り上げた。

「黎はずるいのよ！ そんな風に中途半端に優しくしてっ……ちやんと突き放してくれないんだから！」

「それは…」

(俺の中で迷いがあるから)

そうだ…。

ノアのために突き放したいと思っても、どこかで乃亜のことを待っているのだ。それを受け入れられなかった…。

「そんなだから私はっ…」

乃亜は両手をギュッと握り締め、言った。

「悔しいから絶対黎を嫌いになんかなってやらないから！」

「」

その言葉に驚愕して、黎は顔を上げた。

視線が合って、乃亜は「うっ」と声を詰まらせる。

「と……とにかく、これからも付きまとうから！ 覚悟してるこの野郎っ！」

言いながら猛ダッシュで逃げていく。

途中、椅子の角に足を取られ、転びそうになりながら病院内へと走っていった。その姿を唾然としながら眺めていた黎は、いつしか声を押し殺して笑っていた。

今なら分かる気がする。

ノアしか愛さないと決めていた自分が、何故乃亜に惹かれたのか…。

「参ったな…」

そう呟き、立ち上がる。

そして今度こそ、外に出た。

しばらく歩いていって、空を見上げる。

空気が澄んでいるのか、今日は星が一段と綺麗に瞬いていた。

何億光年も離れている星々からの光。

今見えている星の光は何十年、何百年前のもので。もしかしたらリトウナの光も、この地球ほしからなら見えるかもしれない。そう、思った。

大きく息を吐いて。

暗闇に白い息が溶け込んでいくのを見届けてから、黎は静かに歩き出した。

ゆっくりと、前へ…。

終章

それから、一年余りが過ぎた。

道路の桜並木がようやく蕾をつけてきた頃。

「やったわあああ！！！」

陽央が叫びながらリビングに飛び込んできた。その手には、白い封筒と紙が握られている。

「入選！ 入選よ！ 見て頂戴！！！」

バアン、とテーブルの上に思い切り白い紙を叩きつけた。
黎、聖、李苑、雛、そして一年前新しい家族となった翼がきよとんとしてそれを見た。

「まさか、これ……」

聖が紙を手にする。

「そう、この間駄目もとで出展してみた絵が入選したの〜！ 嬉しい〜！」

陽央はクルクルと回って踊ってみせる。

「まあ！ おめでとう、陽央くん！」

「おめでとう」

李苑、そして聖が祝辞を述べると、恐らく何だか良く分かっている子供達も、

「おめでとう〜!」

「あうあ〜!」

と手を叩いた。

「へえ、昔からこういうの得意だったもんな、お前」

と、黎。

「ええ、絵を描くのは好きだったわ〜。それが人に認めてもらえるつて、すっごく嬉しい!」

陽央は一頻り喜んだ後。

少し表情を硬くしながら言った。

「それでね、お願いがあるの…。アタシ、旅に出たいの」

「え?」

あまりに急な申し出に、聖達は驚いた。

「アタシ、これからも風景画を描いていきたいの。まずは色んなところに行つて、色んなものを見てみたいの。アタシ……画家としてやっていきたい」

聖と李苑は顔を見合わせる。

「それは構わないが…。大変だぞ？」

「分かってるわ。聖くんや李苑ちゃんには、なるべく迷惑かけないようにするから」

「迷惑なんて、そんなことないのよ」

李苑は優しく微笑んだ。

「陽央くんがやりたい事なら、応援するから」

ね、と聖に目配せする。

「ああ…。でも定期的に帰ってきてくれ。体のことが心配だからな」

「うん、分かったわ。二人とも、ありがとう！」

笑って頷く陽央を見て、黎はふと寂しさを感じた。

子供の頃からいつも一緒だった。

喧嘩ばかりだったけれど、辛い時は慰めあったりして。こっちに來てからもずっと助けてくれて…。

考えてみれば、陽央とは十年もの間離れた事がなかったのだ。その彼が、旅立とうとしている。

置いていかれるような気分になってしまつのも無理はない。しかし、それを顔に出せないのが“黎”なのだ。

(昔は良かったよな)

記憶がなかった頃は、酷く素直な人間だった。

それが自分のなりたかった人物像だからだろうか。

あの時の自分だったなら、素直に「寂しい」と言え、笑顔で「行ってらっしゃい」と言えただろうに。

「…ま、頑張つて来いよ」

それだけ言つと、黎は立ち上がってリビングを出て行くとした。

「ありがとう。あんたも皆に迷惑かけないで、ちゃんと勉強するのよ」

「分かってるよ」

面倒くさそうに答えると、陽央はポン、と軽く頭を叩いてきた。

「寂しくても泣かないでね」

「…誰が」

ぶすつとしてそう応え、自室へと向かった。

何だか心を見透かされたようでバツが悪い…。

部屋に入ると、机の上に乱雑に置かれていた書物の整理を始めた。

それらは植物や環境問題に関するものばかり。

すぐにそれらの研究を始めても良かったのだが、黎は大学進学を決めた。

研究に没頭する前に、もう少し同年代の人間と触れ合ってみたいと思っただからだ。

記憶を取り戻してからしばらくして、復学した黎を見て、クラスメイト達はかなり戸惑ったようだ。

事故で失くした記憶を取り戻したため　と聖は学校側に説明してくれた。

それでも、先日まで能天気で穏やかだった人間が、いきなりぶっきらぼうで愛想のない人間に変わったのだから、それは戸惑うだろう。

最初は皆、話しずらそうだった。遠慮も見えた。

しかし徐々に“黎”は受け入れられていった。

黎も溶け込もうと努力した。

段々と垣根は取れ、近頃では友人と呼べる者も出来た。陽央以外に何でも話せる友人というのは初めてだ。

日々の他愛無い出来事や将来についてや、ちょっととした悩み、好きな子の話も。人によって様々な考え方がることが新鮮に感じられた。

そういう環境の中に、もう少しいたいと思った。

まだ人間的に学ばなければならぬことがたくさんあるように思えたから。

そして、何よりも…。

「こんにちは〜！」

玄関の方から元気な声が響く。その声を聞いて、黎は小さく息をついた。

「また来たか」

そう言いながら、顔がにやけていることを自身は気付いていない。しかし、部屋の中にいたのでは彼女に会うことは出来ない。

一年前のあの一件以来、乃亜は黎の部屋へ入ってこなくなったのだ。二人きりになるのを避けてのことだと思うが……それでも『好き』と言う乃亜の心理が解らない。

口から出任せなのかと思い、わざと大学を乃亜の行ける所よりワンランク上を受験した。すると猛勉強を始め、先日、見事揃って合格した。

試すような事をしておいて、乃亜が合格したと聞いた時はホッとしたものだ。

リビングへと行くと、乃亜は陽央と話をしていた。

「そうなんだ……。寂しくなっちゃっうね……」

どうやら陽央の全国行脚の話をしているようだ。

黎が入ってきたのに気付いて、乃亜はソファから立ち上がる。

「お邪魔してま〜す」

「おう」

黎は長くなった前髪を掻き揚げながら、乃亜とは対角の位置に座る。前髪だけではなく、後ろ髪も肩まで伸びていた。それを見て乃亜が

一瞬悲しそうな顔をしたのを……黎は気付かない。

この時、乃亜の気持ちに気付いていたら良かったのかもしれない……。互いに想いあっても、それが通じるとは限らない。

二人が正面から向き合えるまで、まだまだ時間がかかりそうだ……。

終わり

終章（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
宜しければ感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2982e/>

NOAH

2010年10月10日21時33分発行